



2



* 0000684000 *

0000684-000

302.22-H485s

支那の生活

平木多嘉志・著

昭和書房

1940

AAB

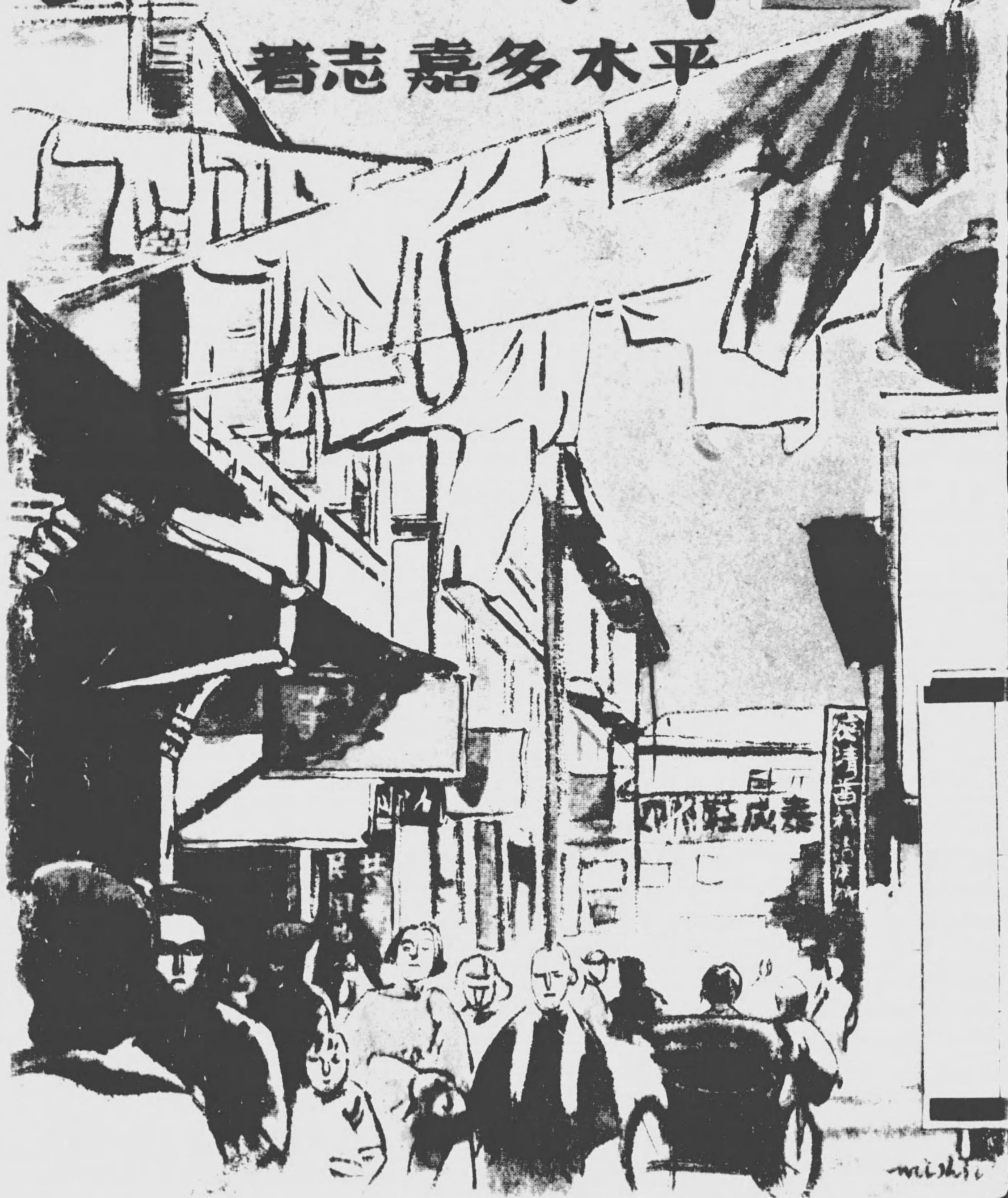
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

活生の邦

302.22

H485x

著志嘉多木平





平木多嘉志著

支那の生活

昭和書房版



30
H485A

30001

はしがき

支那事變に於ける漢口争奪戦こそは今事變中の白眉であつて、この漢口突入の日時や先陣競ひは日支は勿論、全世界注視の的であり、今事變に於ける最大のスリルであつた。

時あたかも楊子江北方地區を驀進また驀進、新州を屠つたかと思へば季家集、黄坡、横店とた。次から次へ湖北平野を通り魔のやうに、アレヨ〜と世界驚視の内に待望の武漢三鎮に突入した。

この偉業に颯爽たる『東部隊長』——覆面將軍は意外！東久邇中將宮殿下の御英姿とは拜するだに長き極みである。

金枝玉葉の御身をもつて、智勇兼ね備へ給へる殿下には、パール・バックの『大地』を讀ませ給ひ、大亞細亞建設を双肩に擔ふ日本人は、歐米人の熱心なる支那研究に學ばねばならぬ。旨仰せられ、日本に一人のパール・バックなきを歎かせられたと拜聞するが、御明識のほど恐懼に堪へざる次第である。

苟も東亞の盟主として、東亞協同體建設を双肩に擔ひ、日支提携を口にしながら、英語を話すもの多しといへども、扱、支那語を喋る者果して幾人ありや？、否！寧ろ、支那語を口にするを以つて却つて輕侮するかの如き觀なきにあらずや。如何に指導者が當を得なかつたか、今度の支那事變が立證して餘りある。

だが然し、今度と言ふ今度は、たとへ泥繩式とはいへ、何人も思ひこゝに至るは必定、尙且つ長期建設には金より人だ。畢竟するに人を植ゑるをもつて先決問題とすることは一點議論の餘地がない。

完膚なきまでに蝕まれた東亞を吾等の樂土とする爲には、日支の完全なる提携が必須條件たることは贅言を要しない。

日支提携にはお互が認識し理解しあふにある。ところが、同種同文等と簡単に考へられて居るにも拘らず、支那は何處までも謎の國、支那に關する知識がなくて支那が理解出来ないと言ふならまだしも、永年支那に住み、種々な支那人と交遊し、研究もして見て、支那を知れば知るほどますます／＼わからないのが支那である。

筆者十餘年支那に在り、起居に彼等の習性を見る。この間に體驗した彼等の生活こそ生きた支那である。

かう言ふ見地から謎の國支那の全貌を表面から裏面から、縦から横から、多角多面に觀察したものの、集積………を本書に藏めて提供の光榮に浴する。

紀元二千六百年九月

著 者

目次

第一章 支那の國民性……………一

- 一 支那人の融通性……………一
- 二 支那人の忍耐力……………二
- 三 個人主義支那……………二
- 四 對蹠的に相反する日支人の性格……………二
- 五 支那人の愛國心……………四
- 六 歐米人のいふ支那人は不親切か……………五

第二章 支那人氣質……………五

- 一 支那兵は何故弱い……………五
- 二 支那人の挨拶……………六

三 支那人の社交術……………六九

四 嘘つき王国……………七六

五 法螺ふき王国……………八四

六 黄包車の屁理窟……………八九

七 面子の正體を暴く……………九六

八 支那の喧嘩は事變の縮圖……………九九

第三章 拜金の國支那

一〇四

一 銀、銀、銀……………一〇四

二 銀が命か命が銀か……………一一二

三 未だ醒めず華僑抗日の夢……………一二六

四 役 徳 王 國……………一三六

五 昇給後却つて怠ける支那人……………一三三

六 車掌は稼ぐ……………一三四

第四章 桃源の夢は醒めず

一三七

一 苦力は人に非ず……………一三七

二 黄包車は支那の足……………一四三

三 強い婦人も金ゆゑ強い……………一四七

四 哀れ法幣の末路……………一五三

五 日本にない漢字……………一六一

六 支那人に化けきれぬ日本人……………一六七

七 斷 髪 令……………一七二

八 支那商店風景……………一七六

九 杭州勸善懲惡の像……………一八〇

第五章 享樂第一主義

一八四

一 享樂王国……………一八四

二 阿片王國……………一九〇

三 ホテルで見る支那人の享樂……………二〇一

四 泥酔しない支那人……………二〇五

五 洋風に近い支那生活面……………二〇八

六 人生は歡樂から……………二一三

第六章 支那情緒……………二一九

一 妻は銀なり……………二一九

二 支那宿……………二二四

三 招待の御馳走は博奕のテラ……………二三八

四 野鶏狩……………二三三

五 纏足……………二三六

六 歡樂境大世界……………二四二

七 茶館……………二四五

第一章 支那の國民性

一、支那人の融通性

日本人は融通のきかないことにかけては世界に類のない國民であるが、支那人は大陸性のためか萬事が大雑把で、どんな困難に直面しても、所謂「馬々虎々」で善處する。日本の様に八釜しい規則はあつても、一々辦法で解決され問題を起すやうなことは滅多にない。かう言ふ支那人の融通性は、一面非常な特長とも言へるが、またその反面から見れば全く仕末に負へない短所ともなつて居る。

支那では重罪人が銀によつて救はれたり、南洋へ行くとか、坊主になることによつて許されることは極めて普通に行はれ、また權力者の口一つで死刑囚の身代りが死刑を執行されると同時に本人は裏門からこつそり逃がされる等は、在支吾人の屢々見聞する處である。

政府に對して反旗を翻した逆賊の張本人は、何れの國たるを問はず反逆罪として極刑に處せられるのは當然であるが、支那では反逆軍閥の巨頭が下野外遊によつて一切の罪障は消滅するのみか、却つて歸國の際は政府が會つての反亂巨頭を迎へること凱旋將軍の如く、前にもまして良い地位を與へると言ふ、支那以外では見られない珍妙にして不可思議な特赦法がある。

「馬々虎々」主義支那の上手な嘘や法螺も、一種この融通性の延長であつて、支那人の約束や證文等は、その日の風次第と言ふ頼りないものである。

支那人は赤化しないと言はれて居るが、彼等の生活面そのものが社會主義的融通性をもつて居る。即ち支那の持てる人々は乞食に小さい金を恵むことを一種の義務と考へ、極めて因業さうな老人等も、乞食に對してだけは氣持よく恵むことを忘れない。

また支那の小賣商が、一仙二仙で小買する貧乏人に對して計りをよくする反面、金持階級の大買から計りを胡魔化する商法は極めて自然に行はれて居るが、これ等は××主義的に持てる者の恩恵を持たざる者に與へる一種の融通に外ならぬ。金持はこの商法を百も承知して居るが、持てる者の誇りであり義務と考へて居るから面子を損じてまで利口な小買をするやうな者は

なし。

支那事變前、上海邦人村に於て近來最も哀れをとどめたのは邦人質商であつた。上海に於ける支那質商が押すな押すな盛況に反し、邦商の窮状は目も當てられぬほど悲惨なものであつたが、何が邦商をしてそれ程不況のどん底に陥れたかと言へば、職業に對する忠實か否かによるものである。即ち邦人質商は流れた時のことばかり考慮して應待するのだから勢ひ親切味がない。されば賣行のよくない物は假令値打があつても貸し溢るし、顧客の胸算用の半額も貸さないことがある。利息は高いし期限が短い上に因業で文句が多い、これでは借りる處か、質屋など馬に蹴られてクダバツてしまへ！と言ひたくなる。

ところが支那の當(質屋)はその點調法の上もない。金目の物なら何でもOK、賣行等は問題ではない、賣行不良と見ればそれだけ安く貸せば良いし、品物で融通するのが天職である以上金額の多寡に文句を言ふことは職業本來の使命に反する、と言ふ主義で取引するから帽子でも靴でも、Yシャツからネクタイ、苦力の破れバツチに至るまで、五仙でも十仙でもドシドシ融通するのだから極めて重寶なものである。

支那當の便利なことは上述の通り全く邦商とは格段の相違がある以上、邦商唯一の得意先たる在留邦人までが、文句の多い邦商の前を素通りして支那當参りにお百度を踏むと言ふ理で、唯一の得意を邦人にもつ邦人質商の立瀬がなくなるのも「アツタリマエ」で、事變前の氣息奄々たる邦人質商の窮状も、一に經營法の優劣による生存競争場裏の敗殘者に外ならぬ。

日支商戰場裏に於ける邦商の敗退は單に質商だけではなかつた。殆んどあらゆる方面で、幅の廣い支那人の商法、特に薄利多賣主義と、生れながらの商賣上手に壓倒され、正面きつて太刀打の出来ない苦境にあつたことは衆知の事實である。

支那行商といへば、日本内地等で見ると反物行商人でも、取引値は普通言ひ値の半額が相場とされて居るが、上海等では半額以下に値引した上おまけまで添へると言ふ愛嬌タップリな商賣をするが、それ程勉強するものなら、何も好んで長い時間を値ぎり問答に無駄な時間を費す必要はなさうなものであるが支那人に言はせると、そこに商賣の大切な骨があり妙味があると云ふのである。

支那人の考へ方は、一體商品に定價表を附けるのは商賣ではないと言ふ、商賣である以上駈

引がなければならぬ、多く儲けたり少く儲けたり、場合によつては損をする處に商賣の妙味がある。だからその場の情勢によつて懸値も種々で、偽物で欺いたり暴利を食ふ事等は、苟も相手方と商戰場裏に相見える以上當然のことで、欺した方は利口者、掴まされた方は商戰能力の足らなかつたことを自覺して「没法了」の一言で諦めるより仕方がない。

かう言ふ駈引の必要な支那では、買ふ方もなか／＼油斷が出来ない。例へば客が骨董買ひに來たとして、商人は第一に客の目が高いかどうかを試して見る。即ち十元の佛像に百元を吹かけけるが、そこで客が「馬鹿言ふな十元以上の物ではない」と言へば、商人は忽ち折れて十五元と出る、さうしてこの客はなか／＼玄人だと尊敬の念を以つて應待し、結局薄利で取引すると言ふ有様である。

かう言ふ場合半額以下に見當つければ間違ひないと思つて四十元で如何かと言へば「少々甘い男」と見て、とんでもない八十元以下には絶対出来ないと言つて、とゞのつまり恩きせながら五十元位で賣りつける。

支那に「南斗北秤」と言ふ言葉がある、元來北支と南支の度量衡の相違を意味するので、同

一地方でも支那の量衡は區々であるがその間違つた秤で如何して秤るかと言へば、お互に所持の秤で秤つて双方の開きの中をとると言ふ珍妙な取引法も極く近年までやつて居た位である。行商人は愛嬌が第一であることはいふまでもない、されば値引問答中に客の氣持をすつかり掴むことによつて末永く常得意とせねばならぬから、十分客に満足を與へるまで勉強した上お添物までして客の機嫌をとる事を忘れてはならぬ、とかう言ふ見地から言つても定價販賣は何の妙味もないし、ちつとも商賣らしくない商賣とされて居る。商賣は客の値切る氣持と、負けて客に満足を與へる氣持とがピッタリ合つた處に取引の妙諦があるとは、生れながらの商賣人たる支那人のもつ商法哲理である。

御亭主の朝の出勤を送り出したマダム連が、青物行商の支那人を掴へての國際交渉場面は一種のナンセンスもので、マダムは支那語、行商人は日本語で、而も双方怪し氣な日本上海語の國際取引場面が展開される。

支「奥シャあん、買ふか大根」

奥「今天不用」

支「上等チユケモノ出来るタクシヤン、負けるよ安い〜」

奥「一把幾値か」

支「三十個銅幣安くないか」

奥「十個銅幣好か」

等々暇人同志長い値切り問答の末、とゞの詰りが銅幣十五枚（日本金の五錢位）で商談成立、金を支拂ふと、

支「奥シャあん、イチユモ買ふ、負ける一本」

等と愛嬌をふり播いて居る。

このユーモラスな場面を側で見て居ると噴飯さすには居られない。何を苦しんで双方が下手な相手國語を使はねばならぬか、場合によつてはどちらが日本人か支那人か區別の出来ない場合もある。

殊に支那人の日本語は漢文式に言葉が不順だから「大根買ふか」とは言はない。必らず「買ふか大根」と反對に言ふ、支那人としても亦日本式支那語の順序不同に或るユーモアを感じ、

苦笑を禁じ得ないものがある事は吾々と同じ思ひであらう。

まだ上海事情に馴れなかつた一と昔前の話であるが、涂家^{ジカウエイ}滙とバンド間を循環する二十二號バスで上海自然科学研究所からバンドに向つて乗るべしであつたが、間違つて反対方向に乗つてしまつたことがあつた。

車掌の改鉄で初めて間違ひを知つて「シマツター！」と思つたが追つつかない。然し循環バスだから迂回の時間と運賃を覺悟すればこの儘乗つて居ても目的地のバンドに行くことが出来る。この邊は上海と言つても淋しい場末で、バスの待合せ時間が非常に長くて不便な上に、大きな荷物を持つて居たから、乗車賃を全距離支拂ふ覺悟で、その旨車掌に話したら、

車掌「あなたさへ差支なかつたらその儘で行け」と、極めて淡白り普通乗車賃で改鉄した。

この間違ひで實際の乗車距離は、目的距離の約三倍であるから、従つて距離制度の上海バスは當然三倍の料金を支拂ふべきであるが、車掌は所謂「理」によつてこれを理解し善處したのであつた。

吾等の最も不思議に思はざるを得ないのは支那の金持階級が、相當使ひ古しのお妻さんを品

物か何ぞのやうに進物として他に興へることである。我が國等では品物でも古いものは餘程親しい間柄でない限り、却つて失禮にあたるといつて遠慮するが、支那人は散々使ひ古した「お妻さんの骨董品」を贈つて得々として居るし、貰つた方も無上の光榮と感謝する等は、女を玩弄視し一種の銀と考へる支那なればこそ、こんな融通も出来るものである。

支那事變の前年、支那人店員の友人と言ふのが、店員を尋ねて來たことがあつた。生憎その店員が出張不在のため、暫く代つて話した事があつたが、その時の會話等はナンセンス百パーセント、わらわし隊も跣足と言ふ朗らかなものであつた。

主「君は何處に勤めて居るかね」

支「只今失業で就職口を探して居ます」

主「失業とは氣の毒な、さぞ困つて居る事だらう」

支「いえ、親父が上海一の大會社に三十五年も勤めて居ますから經濟的には何の心配もありません」

主「上海一の大會社と言へば南洋兄弟煙草公司か」

支「さうです、南洋では一番古株で押しも押されもしません」

主「それぢや君は遊んで居ても良いではないか」

支「でも經濟上の問題よりも自分は自分で働かねば人間として生甲斐がありません」

と言ふ話を聞けば大ブルジョアの子弟が職工から叩きあげる心意氣を髣髴させ、親父は南洋公司の重役か、高級社員のやうに吹きまくつてその日は歸つていつた。

數日後出張店員が歸つたので、早速過日の話をしたら、またか！と言つたやうな顔して「彼奴は法螺ふきで困ります。彼奴の親父は南洋の門番で三十年以上勤続して居ますが、もう老年ですから働けないさうです」とその駄法螺に一同開いた口が塞がらなかつた。

然し駄法螺は駄法螺でも、南洋煙草に勤めて居ることも事實であり、南洋会社が上海一の大會社たることも間違ひない。勤続三十五年も、南洋の古株も右の通り相違これなく候だが、扱肝腎要の地位と月俸には聊か悲哀を感じずには居られない。

その後、駄法螺先生酒々として來たのを掴へて、

主「君の親父は南洋公司の門番だと言ふぢやないか」といへば、

支「ハイ、現在は門番ですが」と言ふ意味深な返答にすかさず、

主「現在は門番で次には何になるか」

支「老人の上に神経痛で働けないから近く首になるかも知れませんが、さうなれば私が働かねば一家は困りますからあなたのお店で雇つて下さい」と泣き出しさうな彼の面上には哀愁もあり、過日の得意満面、南洋煙草の煙に巻いた時とは全く別人の感があつた。而も失業で困つて居るから雇つてくれとは厚顔しさにも程がある、何處押せばそんな音が出るか、彼等のトーチカ心臓には漫才も跳足、素見されてすごく歸る後姿には寧ろ憐愍の情禁じ得ないものがあつた。

上は要人金持から、下は苦力ルンペンに到るまで、すべての支那人は幅の廣い融通性を持ちその範囲内ではどちらにでも動き得る餘裕をもつて居る。

殊に支那の所謂「辨法」は、たとへそれが間違ひの結果を招來しても、その動機や方法に理窟がつけば「没法了」の一言によつて清算され、減多に責任を追窮するやうなことはないから何事にも積極的に仕事が出来し役所仕事等も少しも窮屈なところはない。

二、支那人の忍耐力

享樂支那の金持連中は全く遠慮がない。あり餘る銀と、もて餘す暇を、警察や世間の噂などはわれ關せず焉で、思ふ存分、享樂することにかけては何れ劣らぬ猛者揃ひ、敢て人後に落ちないことを持てる者の誇りとする彼等である。中産階級の人々は、餘り派手な遊びは第一懐が許さない、然し彼等とても享樂支那の一員、働きながらも分相應に人生の享樂を忘れない。獨り無産支那だけが牛馬の職場を天職として、働くために生れた機械（+カ）のやうに一生を働き通して居るのが享樂支那の世相である。

支那の金持といへば誰を見ても手足が白くて繊細な所謂白魚のやうな手をして居るが、それは持てる者の表看板だ。これは労働しない階級を示す一種の虚榮に外ならぬ。また中産支那の人々もこれを真似て、出来るだけ手足を綺麗にするやうに努めて居る。

一寸極端な者になると、小指の爪を二寸以上も延ばして居るが、爪は前方に圓く弧状を爲し

て居る。筆者は曾て十指全部の爪を延ばして非常な不便を忍んで居る先生（シヤン）を見たことがあつたが、虚榮もこゝまで徹底すれば愛嬌がある。

支那婦人の纏足なども労働者に非ずと言ふ多分に虚榮を意味して居ることは言ふまでもないことで、爪の長い者や纏足した女が労働に適しないことは贅言を要しない。

享樂支那に於けるズバ抜けた享樂生活は、金持階級にのみ許された特權であつて、無産支那にとつては別世界に住む人種のやうに見えるらしく、何の不平もなく諦めて居る。

無産支那といへども人間である以上楽しい遊びはして見たい、甘いものも食べたい、好きな女の仇枕も味ひ度いのは山々、殊に人間は死後三年経てば地上何處かに生れ變つて來ることを確く信じて居る彼等は『來世の幸運は葬式による』立派な葬式の銀も残したい。牛や馬のやうに働いてばかり居ないで立派な家に住んで贅澤三昧な生活もやり度いことは山々だが、さて、悲しいかな先に立つ銀がない。銀さへあれば妻を買ひ家庭をもつて人間らしい生活が出来るし、今一步進んで夢の別世界も現實に味へる。銀だ！銀だ！！銀が人生のすべてだ。あゝ銀が欲しい、銀が欲しいが彼等をして極端な銀の亡者にデツチあげ、働いて働き通す忍耐力となつたのであ

る。

かう言ふ觀念によつて働く彼等は、目的の財を得るまではそれこそ食べ度いものも食べず、楽しみを他所に女も知らず、やれ拜金宗ちや守銭奴ちやと罵られながらも零細な銀を次々に臍繰り、牛の歩みのやうに目的に向つて近づいて行くのが常である。

どの苦力を見ても、その體質を見れば榮養不良のせいか、少し働いたら今にもへたばりさうに見えるが、その實なか／＼辛抱強く、餘り過激な労働を嫌ふかはり、長い時間を撓ます倦まず、牛のやうに働き続ける粘り強さは、とても日本人などの遠く及ぶ處ではない。

彼等の多くが海外に發展し、全世界に散布する華僑として、現在世界的に有名になつたのも、全くこの忍耐力の賜であると言つても過言ではなからう。

石の上にも三年と言ふが、彼等は目的が達せられるまでは十年が二十年でも、乃至は一生涯でも働き続け、急がずあせらず、根氣よく目的に向つて進んで行くが、その心棒強さは島國日本人などのとても真似ることの出来ない悠長なもので、これが大陸性をもつて生れた彼等の特長であらう。

恰るで人間のやうに扱はれない苦力の中にも、二千元や三千元の銀を臍繰つて居る者は決して珍らしいことではない。この銀こそは、その忍耐の賜と言ふべく、過去幾年間に得た貴い汗と油の結晶であることと言ふまでもない。

日本人諸氏に一考を煩したいことは——「日本人中二三千圓の現金を持つて居ながらなほ労働を續けて行く心棒強い人が果して幾人あるであらうか」？……いや！日本人なら一寸纏つた金を握つたが最後、すぐに小商賣に轉ずる等、その金を有利に活用することばかり考へて、労働を續ける人は恐らく無いと言つても過言ではなからう。處が、無産支那の考へ方は、この半端な銀額が帯にも襷にもならぬことを、彼等自身が百も承知で、この銀は持てる者の享樂生活費にすれば僅か二三ヶ月を支へるに過ぎないし、小商賣に轉ずるにしても十分な資本とは言へない。されば現状維持こそは最も賢明であると言ふ考へから用心堅固、石橋を叩いて渡ることをモットーとする彼等である。抑も商賣は儲かる反面にはまた損を覺悟せねばならぬ危険性がある以上、そんな危険な商賣に手を出すよりはたとへその日の利益は薄くても、確實に純益をあげる労働が天職であり分相應であると信じて居るから、臍繰が二千元になつても三千元に

なつても、我れ關せず焉として、文なし苦力と何の異なる處なく働き続けることによつて、彼等の虎の子はだん／＼大きくなつて行く。

吾々が會つて見聞した範圍に於て、粗衣粗食に甘んずること無産支那の右に出る者はない。少しばかり蓄へが出来たからといつて日本人のやうに、すぐに「ユルフィン」になる彼等では決してない。

ユルフィン日本の代表者は支那事變以來の「産業戦士」といひたい。何處の遊場に行つても、惜し氣もなく金銭をバラ撒いて居る非國民は大抵産業戦士であることは注目に價する。未曾有の國難が逆に幸した産業戦士よ！事變前に於ける諸賢の不遇時代を想起すると共に事變終結による元の默阿彌的將來を考へて見れば、眞逆考へなほさずには居られまい。

彼等産業戦士の過半は事變前まで生活に迫られた人々といつても過言ではなからう。それが今度の非常時の波に乗つたからといつて、在支皇軍將士の辛苦を他所に、殆んど非國民とまで嘲笑される爲體は、餘りにも時局と身分を辨へない所業ではなからうか。

どんな統制、單價切下げで抑へられやうとも、産業界はインフレ街道驀進の一途を辿つて居

る。事變前まで裏店の土間を落して小僧もおかず修繕専門が關の山、恵まれなかつたトツチン鍛冶屋が、國難は救世主の逆効果、多くの職工を使つて天晴れ生産擴充の國策線に躍る下請工業者となつて浮び上つて來た。

支拂は前金、原料は向ふ持、賃銀は文句なし、仕事は居催促と言ふ好條件揃ひときて居るし、委託先のお偉方から一夕のお供を、と出られる。この處主客顛倒も時局なればこそだ。交際の繁多は山猿先生にモーニング着用の機會を與へ、やれ〇〇倶楽部、〇〇社とお忙しいこと、どこへ行つてもとつもない倶楽部員の増加が如實に産業景氣を反映して居る。而もこの種成金の豪遊はキザであり、尻尾が見えて鼻持ならぬ。如何考へて見ても戦争成金などは、靖國神社の英靈に對して罰當りだ。よろしく猛省して、支那人の忍耐力と貯蓄心を見習へ、の苦言を呈せずには居られない。

だが然し忍耐と貯蓄に一生を働き続ける無産支那も好事魔多しの例へに洩れず、運命的に賭博支那に生れた因果には、生れながらの博徒として、この守銭奴も亦そこに大きな抜穴のあることは氣毒千萬なことである。彼等は全支を一貫する一種の運命觀から、命にもかへ難い虎の

子を、惜し氣もなく運と不運に賭ける悪習を持つて居る。だから働きの餘暇には處嫌はず骰子を弄び、一天地六に運を托して居るのが常である。

守銭奴と言はれる無産支那といへども、理と諦めに徹底した彼等は、幸運と悪運に極めて従順で、悪運に襲はれて、十年の虎の子を一勝負で失つても、所謂「没法子」の一言に悔を残さないところ、運命論者たる支那人の面目躍如たるものがある。

無産支那の内には長年愛育の虎の子が成長したため、苦力の足を洗つて轉業する者もあれば、幸運に恵まれて一躍享樂生活者に伍する成功者もあるが、悪習の賭博が禍して一生を勞働者で終り、餘儀ない童貞で終る者も決して尠くない。

支那は嘗てはその忍耐力によつて東洋文明のピラミッドを築いたこともあるが、今ではその過分の發達が衰亡のドン底支那を現出して居る。支那人の最も長所であり短所と言はれる性格は忍耐力、無關心、老獪の三者とされて居る。

支那國民の忍耐力は、遂に無抵抗主義となり、所謂韓信の股潜りとまで間が延びてしまつた。彼の「馬^モ虎^フ」、「馬耳東風」、「君子危きに近よらず」、「我れ關せず焉」等も忍耐力の變

形で、遂に謎の國支那とか、支那は正常なる國家にあらずと喝破される現代支那をデッチあげてしまつたのである。

かうした支那人の忍耐力は、無産支那にのみ與へられた特性ではない。平常は暢然^{シヤン}とした持てる人々といへども、一旦事にあたれば、潜在して居る忍耐力が勃然として現れ、何處までも粘る強靱性をもつて居る。

今度の支那事變の當初、戰禍が中支に波及しやうとする直前、總帥蔣介石が對日主義論者の鋭鋒に對つて、「日本を相手に一戰を賭するなら、新疆に首都を移すところまで追詰められても、なほ抗戰の覺悟を要するが如何に？」と言ふ質問に對して、並み居る諸將星は即座に「諾」と答へたが、これが今度の所謂焦土抗日、最後の勝利といふ、叩かれても撃たれても屁古垂れない抗日支那の粘りとなつて居る以上、支那事變はどこまでも長期戰、抗日支那は最初の覺悟から言つても、または支那の國民性から見ても、事變はまだく峠を越したとはいへない。されば抗日支那の「參つた」は餘程氣長に待つて居る外はない。

支那人は總體的に見て非常に辛抱強い處があつて、どんなに強く叩かれても、また何處まで

追詰められてもチーツと辛抱して、相手の力量を測るだけの餘裕をもつて居る、現在蒋介石の南京から漢口、重慶にまで都落ちしたといつても、日本の實力低下の測定中と見るべく、一本の浮いた藁でも掴まうとする對外工作も、決して希望を捨て、居るとは思はれない。

愈々對外工作に成功し、日本の國力に餘裕がなくなつたと見た處で、猛然反撃を加へようと、氣長に抗戦を續けて居ると見ねばならぬ。

これから見ても、漢民族の忍耐力は全支那に共通するものであるが、平常は無産支那にのみ見られ、有産階級といへども、一旦事にあたれば孜々營々、一念癡るところ何處までも目的に對つて粘る忍耐力が潜在して居ることは斷言出来る。

忍耐支那の長期戦こそは、彼等抗日支那の得意中の得意とするところ、まだく武漢陥落や廣東、廣西攻略位で戦勝氣分を出すやうな氣の早いことでは、東亞協同體建設などは思ひもよらぬ。すべからく漢民族の忍耐力を習つて、急がず、あせらず、氣長に新秩序の長期建設に對つて邁進すべく、今一度、禪を緊めなほしてかゝらねばならぬ。

三、個人主義支那

支那は香しくない方面での相棒ユダヤ人と共に、「個人主義」と言ふ點でも、これまた東西に並び稱せられる兩雄であるが、この支那人の非社會的頑固な個人主義は先祖代々傳はつたもので、國情のしからしむる習性に外ならぬ。

「自分さへ良ければ他人は如何でも良い」といふのが、支那の大衆を一貫する通念で、彼等には自己以外、國家もなければ社會の必要もないと考へる者が殆んどその大部分といつて差支ない。有史以來五千年、支那の人々は政府の恩恵による安居樂業の生計を營んだことは極めて稀であつた。天災地變、内憂外患、兵災、匪災、惡疫の流行など、彼等の周圍にはあらゆる脅威が絶え間なく、ヒシ／＼と襲ひかゝると言ふ有様で、歴代の大衆はその都度塗炭の苦しみに泣いて來たが、かう言ふ時にも弱い彼等には、國家や社會の溫い救ひの手は期待することが出来なかつた。結局彼等はどんな場合にも、自分は自分で護る以外に道はないといふ、この環境の内

に會得した人生觀が、彼等をして極端な個人主義にデッチあげてしまつたのである。だから彼等は、どんな場合に直面しても他力を頼らず、何處までも自分一個の力で生き抜いて行かねばならぬといふ強い信念を持つて居る。

かういふ社會に育つた支那人にとつては、國家が亡びやうが、社會がどうならうが、支配者が誰に代らうと、そんなことは問題ではないのである。

現代支那に於ける個人主義の代表的人物は、餘命幾何もない抗日支那に、支那良民の道づれを強要して居る蔣介石であらう。白色帝國主義の傀儡たる蔣介石は、今度の事變以來既に二百萬を越える無辜の良民を殺傷し、巨億の國幣を失ひ、全支を焦土化してまで、而も、既に山の見えきつた今日、なほ私心からなる抗日戰を強要して居る。

蔣政權が金科玉條のやうに豪語し期待もして來た英、佛、ソ聯の同時作戰も、アメリカの固執する九ヶ國條約、國際聯盟の集團干涉なども、現在既に重慶に地方政權化し外國權益の大部分が新中央政權下にあり、而も蔣政權の屋臺骨のヘン折れた現實を見ながら、剩さへ援蔣反日三銃士中、英佛の二銃士までが没落した今日誰が好きこのんで援蔣を積極化し、對日重壓など

虎の尾を踏む危険を敢てする者があらうか。英米の對支借款や、ソ聯のこそ泥式武器援助といつても、瀕死の重慶にカンフル注射一本した以上のもではなく、抗日支那にとつてはそれこそ焼石に水でしかない。

抗日支那の豪語する長期焦土抗戰も、皇軍を奔命に疲れしむると言ふゲリラ戰も、日本の長期建設と、皇軍の神速果敢な討伐に對しては線香花火よりも儂い。事變が長びけば長びくほど、日本より以上に困るのは却つて抗日支那自身ではないか。中原を追はれて地方政權、一軍閥に墮し、僻地に據つてお得意の逆宣傳に世界を欺瞞しようとしても、答へるものは犬の遠吠えばかり、戰況は日一日と悪化の一途を辿り、前途はお先眞暗、而も足腰たゞなくなつた抗日支那の尻をヒツ叩いてけしかけ、嫌がる民衆を戰禍の坩堝に地獄の苦を嘗めさせて居る。げに抗日蔣介石こそは個人主義の權化であり怨府の鬼と化してしまつた。

薄^{スス+}尾花のそよぎにも戦く落人の姿は哀れだが、一身あつて萬民を思はず、一黨あつて天下を忘れた個人主義の酬ひ、所謂天に唾する者の運命だ。南京を失ひ、徐州に敗れ、南支を失ひ武漢三鎮を退いて奥へ奥へと逃避行を続け、支那の樞要地區や七大都市は完全に皇軍の占むる

一等二十五萬元が欲しいのである。

だが然し、今度の支那事變の體驗によつて吾等の冷靜なる支那再認を要することは、この徹底した個人主義支那人の何處にあれだけの團結力、旺盛なる精神力、強靱なる戰鬥力が潜在して居たか、これだけは軍部は勿論多くの日本人が夢想だにしなかつたことであり注目すべき一事である。抑々その因つて來る處は蔣政權の採つた排日教育であることは言ふまでもないが、如何に排日教育が深刻なものであつたか、如何に白魔赤魔の陰謀が根強いものであつたか、想像するだに慄然たるものがある。度し難いと言はれる個人主義支那といへども、支配の如何によつては永年の習性たる個人主義の殻を脱いで鞏固なる團結力を現し得ることは、共に東亞を護る日本として心強い限りといはねばならぬ。

事變終了と共に、完全なる日滿支の協同體が結成されることは言ふまでもないが、この協同體は日本を中堅、滿支を兩翼として東亞を護るべく運命づけられた兄弟の國である以上、支那人の最も短所といはれる個人主義の殻を完全に脱ぎ捨て各々協同體の責務を果さんことを望むものである。

四、對遮的に相反する日支人の性格

隣邦であり同種同文、而も千數百年の古い馴染でありながら、幾回ともなく戰爭を繰返して來た日本と支那とは、因果同志か仇の末か、現在もまた支那の東南に食ふか喰はれるかの死闘を餘義なくされて居る。

同じ顔色に生れた日支は兄弟の國として運命づけられて居ることは双方共に認める處、恐らく幾萬年かの大昔を考へればイトコもあればハトコもあつたことは想像される。されば日支の關係は車にすれば兩輪、鳥でいへば双翼、一方が亡びてもアジヤは亡ぶと言はれるほど因縁淺からぬ關係にありながら、何が犬猿もたゞならぬ不仲にさせたか？……曰く、世界制覇の野望にもゆるユダヤ系の對日攻勢、曰く、共產主義の陰謀、曰く、蔣介石の排日教育等々、その原因も種々あるであらうが、内に顧みて見逃すことの出來ないのは、日支兩國人が性格的に全然相反して居るといふ一事である。

處、彼等には海外に通ずる一つの海口すらもない。而も新中央政權は汪精衛の登場によつて全支に號令せんとして居る、事ここに至つてはこの上抗戰の意味ないとは、蔣介石自身が一番よく知つて居る筈である。

も早や支那四億民衆の總意は完全に蔣介石から離れつゝある。さうして蔣に代つて新支那を負つて立つた汪精衛が抗日支那の内幕を完膚なきまでに暴露し、その無謀を天下に訴へたではないか。驟然悔悟して支那を戰禍から救ひ、男らしく支那の指導を誤つた不明を詫びて罪の輕減を乞ふこそ、時既に遅しといへども、なほ收拾の餘地なしとせず。大衆に一日も早く安堵を與へるこそ、自己を生かし支那を生かす唯一の道であり、下野外遊して晩節を全うするこそ男子の償ひではないか。

支那の指導者が個人主義の權化なら、四億大衆もまた、これに輪をかけた我利々々亡者の集りと言つて良い。我々日本人の戰爭に對する觀念は、戰場たると銃後たるとを問はず一億一丸となつて、眞の國家總力戰を展開するが、支那では單なる政府や軍閥が戰爭して居るに過ぎず、推進力たる銃後といふものがないから尻切れトンボのやうなものだ。かういふ戰爭觀をも

つて居る支那大衆だから冷淡なもので「日支戰爭?……日本と蔣介石の戰爭なら遠退いてしまつて安心だ」と恰るで雷のやうに思つて居る。

結局個人主義支那人にすれば、どんな政府が出来やうと、誰が支那の支配者にならうと、そんなことは問題ではない。支那軍が来れば青天白日旗を掲げ、皇軍の支配下になれば俄か作りの日章旗を打振りながら歓迎することを忘れない彼等である。

滿洲事變以來對日戰備に汲々たる國民黨部が、飛行機の必要を痛感して躍氣となり、「對日戰に勝つためには飛行機が絶対必要だ、愛國心に訴へて空軍の建設に協力せよ」と、きつい命令に集つたものは冷笑以外の何物でもなかつた。愛國心で味噌つけた國民黨部が考へたりな今度は「一等二十五萬元、航空獎券を買へ」と、射幸心理から民衆の弱點を衝いた計畫は見事圖にあたつて、支那人は勿論外國人、「殊に皇軍の頭上目がけてドカーン!」と落す支那空軍建造資金に、人もあらうに「在留××人」までが協力する罰當りもあつた位で、數年ならずして數百臺の飛行機が出来あがつたとは流石に支那なればこそだ。

これから見ても支那一般民衆は、抗日戰や飛行機は如何でも良いのであつて、海老で鯛釣る

一等二十五萬元が欲しいのである。

だが然し、今度の支那事變の體驗によつて吾等の冷靜なる支那再認を要することは、この徹底した個人主義支那人の何處にあれだけの團結力、旺盛なる精神力、強靱なる戰鬥力が潜在して居たか、これだけは軍部は勿論多くの日本人が夢想だにしなかつたことであり注目すべき一事である。抑々その因つて來る處は蔣政權の採つた排日教育であることは言ふまでもないが、如何に排日教育が深刻なものであつたか、如何に白魔赤魔の陰謀が根強いものであつたか、想像するだに慄然たるものがある。度し難いと言はれる個人主義支那といへども、支配の如何によつては永年の習性たる個人主義の殻を脱いで鞏固なる團結力を現し得ることは、共に東亞を護る日本として心強い限りといはねばならぬ。

事變終了と共に、完全なる日滿支の協同體が結成されることは言ふまでもないが、この協同體は日本を中堅、滿支を兩翼として東亞を護るべく運命づけられた兄弟の國である以上、支那人の最も短所といはれる個人主義の殻を完全に脱ぎ捨て各々協同體の責務を果さんことを望むものである。

四、對遮的に相反する日支人の性格

隣邦であり同種同文、而も千數百年の古い馴染でありながら、幾回ともなく戰爭を繰返して來た日本と支那とは、因果同志か仇の末か、現在もまた支那の東南に食ふか喰はれるかの死闘を餘義なくされて居る。

同じ顔色に生れた日支は兄弟の國として運命づけられて居ることは双方共に認める處、恐らく幾萬年かの大昔を考へればイトコもあればハトコもあつたことは想像される。されば日支の關係は車にすれば兩輪、鳥でいへば双翼、一方が亡びてもアジヤは亡ぶと言はれるほど因縁淺からぬ關係にありながら、何が犬猿もたゞならぬ不仲にさせたか？……曰く、世界制覇の野望にもゆるユダヤ系の對日攻勢、曰く、共產主義の陰謀、曰く、蔣介石の排日教育等々、その原因も種々あるであらうが、内に顧みて見逃すことの出來ないのは、日支兩國人が性格的に全然相反して居るといふ一事である。

この性格の相違が認識不足となり無理解を招き、猜疑心を醸し、相手を嘲笑する様になり、遂に今日のやうな對立激化から支那事變を惹起したものとといへる。この責たるや兩國指導者の當を得なかつたことにもよるが、兩國民があまりにも無自覺であつたこともまた責めねばならぬ。さればお互が認識を缺き、無理解であり無自覺である限り、日支提携は百年河清を待つに等しいものがある。

今度の事變が終れば東亞の新協同體が出来あがるが、それを護り立て、行くのは日滿支の國民でなければならぬ。ところがその肝腎な國民同志が從來のやうな無自覺では全くお話にならない。砂上に築いた樓閣のやうに、今後もまた再度三度の支那事變が繰返されねばならぬ。されば如何すれば日支提携の實を擧げ得るか。先づ日本人の支那觀、支那人の日本觀、並に兩國人の歐米觀とこの三つの觀念が、歐米人は永劫同化し得ない異人種であること、並に吾々の子孫は何時の時代にか彼等と戦ふべく運命づけられた東亞の敵であること、また日支は兄弟の國として何處までも東亞を護つて行かねばならぬ唇齒双車の關係にあることを感銘して益々提携を深くせねばならぬ。

日本人の所謂「チャンコロ」の悪口は日清戦争以來四十餘年の長き侮支であつて、支那人の「東洋鬼子」の應酬もまた蒋介石の排日教育によつて十數年に及んで居る。かくまでお互が憎み合ひ唾み合ひ、同人種でありながらも縁も由縁もなかつた歐米人を崇拜する等は沙汰の限りといはねばならぬ。

現代支那は蒋介石の新生活運動によつて隔世的に目覺めつゝある。事變直前の南京の如きは百萬の首都に一人の賣笑婦なく、ダンスホールは勿論、カフェー、バー等の享樂機關は次第に姿を消し、娛樂場に於ける喫煙、放痰等の違反者は見つけ次第處罰される。要人富豪に妾はつきものといはれる支那政府要人に一人の蓄妾者もなく、麻雀を禁じ、宴會等も酒類を用ひず刻苦精勵、日本人の想像する支那人とは雲泥萬里の模範都市を建設して居た頃である。この新生活運動が新中央政權に繼承されたら幾十年後の支那はそれこそユルフン日本の遠く及ばない新興支那がデッチあげられることは想像に難くない。

日本人の侮支は日清戦争以來のことで、支那人を見ること一級下の人種のやうに考へて居る人の多いことは遺憾に堪へない。一等國民とか、優秀民族とかいふのは、銃火戦に勝つだけの

ことではない。日本の何處に行つても遊廓と言ふ世界的恥さらしの人身賣買が行はれ、一方君國のために身命を賭して奉公の誠を盡して居る秋、買占め賣惜み等私益のため國禁を犯し、祖國に弓引く不徳漢の多いこと、乗車風景を一寸覗いても、老幼女子を押分けて良い席を占める日本男子の進取の氣性は大したものだ。「山間をベランダのやうにまでして農作物の増收を計つて居る位土地に恵まれない日本」といふ外人の日本觀を裏切つて、野に山に不毛の廣大なゴルフリンクスをつくり、極めて少數のブルジョアによつて占有されるのみか、血のガソリンを而も公用車で惜し氣もなく使つて居る罰當りもある。阪神國道に長蛇の列を爲して居る阪神競馬場繰込みは、爲に交通戦線に異状を呈したことも吾人の記憶に新なる處である。かく數へ来れば日本人は果して優秀民族と言ひ得るか、新生活運動以來の南京市民に恥ぢざるか、深く吾人の猛省すべきことである。

眠れる支那に活を入れたものは蒋介石の新生活運動であることは上述の通りで、今度の支那事變に於ける隔世的支那軍の團結力も、強靱なる戰鬥力や愛國心もこの新生活運動の賜といつて差支ない。

されば近代支那の國家的地位の向上はわが國の飛躍的發展には遠く及ばずといへども、過去十年間に於ける近代支那の躍進ぶりは、歐洲の新興ドイツやイタリーと比肩して、毫も遜色を認め難きものがある。吾々が、この躍進支那を、舊態依然としてチャンコロ視する等は、大國民の襟度と言ひ難い。すべからず今度の事變を契機として、新支那を再検討すべきである。さうして、吾等の東亞を今日のやうに蠶食し搾取しつゝある歐米人を見直し、如何に彼等が日支を不幸に陥入れたかを再吟味すると共に、東洋文化、東洋道德に立脚した東亞協同體建設に協力邁進せねばならぬ。次に日支の對蹠的に相反するものを列記してみよう。

日本 支那

- 一、體面主義 と 實利主義
- 二、一本調子 と 多面性
- 三、根性悪 と お調子者
- 四、短氣 と 呑氣
- 五、男尊女卑 と 女尊男卑

上記五項を較べて見ると、日支兩國國民の習性は殆んど對蹠的に相反して居る以上、一朝一夕でこれを是正し融和提携の完璧を期することは至難であるから、外交當局は勿論、一般の人々も互讓の美禮によつて急がず、あせらず提携の實を挙げねばならぬ。

一、體面主義と實利主義

支那には面子シヅといふ、日本の體面に等しいものがあつて、利にのみ走るやうに思はれる支那人が、特にこの面子を重んずること不思議なほどである。

同じ拜金宗といはれながらも、支那人が猶太人と異なる處は、案外この面子に拘泥する點で、面子のためには利益を度外視することも決して珍らしくないと言はれて居る。

然し支那の面子は、日本の體面と較べると非常に融通性があるから面白い。即ち事實は兎に角、表面上曲りなりにも理窟がつけば良い、といふそれほど嚴格なものではない。また支那人は屁理窟捏造にかけては先天的に妙を得た國民だから、支那人の重んずる面子といつても怪しいものである。

日本の體面となると支那の面子のやうな生柔しいものではない。古來武士道精神から、體面のために敢て死を選んだことは枚擧に遑がない。歐米人が、わが體面上の切腹を稱して「ニツポンハラキリ」と、非常な驚異とすることは衆知の事實で、彼等にすれば、痛い腹まで切らなくても、謝罪、改心、賠償かアーマン位で解決出來さうなものに、日本人ほど馬鹿正直なものはない、と日本人の體面が如何に重大なものか、武士道の眞髓を解し得ない彼等には無理ならぬことである。

この封建時代の武士道精神が、現代日本の體面に生きる習性となつて居ることは言ふまでもないことで、體面を捨て、まで利に走る功利主義者は他國に較べると非常に尠いことはいふまでもない。

支那人の考へ方は、面子は成るほど大切だ、然し面子ではお腹は膨れない以上實利の方がより大切である。面子は曲りなりにも誤間化せるから、成るべく要領よく實利を得た方が良い、と花よりダンゴを選ぶ。

支那人は、「大信無約」などと、言ふことだけはなか／＼立派だが、約束が不利な場合には

勝手に違約して涼しい顔して居る。日支兩國間にも随分多くの條約が結ばれて居るが、いざとなると何一つ實行されない。これから見ても、支那人の重んずる面子の正體は、外面を糊塗する醜女の厚化粧以外の何ものでもないと解すべきである。

一國を代表する南京政府が背信行爲を平氣で繰返して居る位だから、一般民衆はおして知るべしである。支那事變前に於ける全支は擧げて抗日狂躁曲を奏で、抗日にあらざれば人にあらずといふほど、抗日は愛國の合言葉となつて居た。ところが、北支が席卷され、上海、南京、武漢三鎮が陥ち、廣東、海南島、南寧と次々に日章旗が翻ると、今度は皇軍の占領區域は勿論、遠い奥地や蔣政權の内輪からまで和平救國、日支親善の聲を聞くといふ有様である。

事變前まで不世出の英雄と崇められ、神様扱ひにされた蔣介石は怨府の鬼に轉落、遠慮なく罵聲を浴せられて居る。事變前蔣介石を難じたり、日支親善でも唱へやうものなら、忽ち漢奸として極刑を受けねばならなかつたが、明暗一轉、新中央政權の治下は親日一色に塗り潰されてしまつた。

支那の面子が、支那人のいふやうに重大なものであつたら、今まで抗日主義者であつた人々

の親日轉向等は容易なことではないが、そこが幅の廣い面子の正體を立證するものである。

孫科と共に抗日親ソ派の巨頭といはれ先頃爆死説の出て居た馮玉祥の如きは、面子を捨て、實利主義に走る代表的ルンペン政客といはれ、節操などは藥にしたくもない男である。彼は曾つて吳佩孚の麾下として第二奉直戦に出動、吳を裏切つて一敗地に陥れた過去をもち、極端な反蔣主義者だつたにも拘らず、現在は蔣介石の鼻息を伺つて居るし、クリスチャン・ゼネラルであつて共產主義にも共鳴し、同時に三民主義者でもある。こんな裏切専門家でも、支那なればこそ機を見るに敏なる將軍として尊敬されるから妙だ。

馮玉祥の舊部下で、馮に輪をかけた裏切前科のレコード・ホルダーは、北支の曠野に皇軍の雪隠詰を喰つて居る石友三である。

石は曾つて馮玉祥麾下の國民第六師長として一九二九年馮を裏切つて蔣介石の下に走り、唐生智の反蔣舉兵に呼應して今度は蔣介石を裏切り、一九三〇年には閻錫山についたり、中央に寝返つたり、また中央を裏切つたり、變節、轉向、裏切り、買収を常とする支那軍閥中でも彼の右に出る者がないと言はれて居る。然し今度といふ今度は、如何に裏切常習の彼でも、相手

が皇軍であつて見ればいさゝか勝手が異ふ。翼中の曠野に進退谷まり、待つものは哀れ儂い死ばかりとなつて居る。

二、一本調子と多面性

わが國では、何處の鴉も黒いと言ふて居るが、福岡矢部川畔の鴉は白黒である。されば一概に鴉は黒いと言ふことは出来ない。

日本人は、一般に鴉の場合のやうに善は善、悪は悪と餘り判然り言ひ過ぎる潔癖性をもつて居るから、屢々矛盾を招くことがある。

善と悪の場合でも、餘り鮮明に斷定を下せば融通性がないから、時によつては持ちも提げもならぬ破目に陥ることがある。

概して日本人は單純で正直すぎるから、何事にも一本調子で、外交や取引なども、多面性な外支人の術策に翻弄され、見事に背負投を喰はされるのが常である。

殊に外交等は、千の外交辭令より一つの腹藝だ。抜くぞ！ 抜くぞ！ と駈引だけで有利に

導く外交の勝利は、第二次歐洲戦前に於て民主主義國家をハラ／＼させながら實利を次々に獲得した獨伊外交を見ても明かで、彼等は一步々々と目的を達成して涼しい顔をして居るではないか。

國際正義の番犬たる英米外交の表裏常なく、自ら紳士の國を以て任ずる歐米人が、惡辣な駈引を敢てすることは過去の歴史が立證して餘りある。

わが國では、一本調子の人を「世渡り下手」、といつて居るが、外支人から見た日本人は、總體的に世渡り下手な國民である。

世渡り下手日本の代表はわが外交陣で、過去に於ける幾多の戦争も、現在血で血を洗ふ支那事變も、外交々渉の失敗を實力で補ふ正義の主張に外ならぬが、「わが國に人なし！」ドイツやイタリーの如き大物が一人でもあれば、無血勝利を次々に確保することが出来たであらう。

結局國を賭してまで戦はねばならぬのも外交の失敗を補ふため、戦争は正義外交の延長であり、外交は戦争の一翼を爲すものである。ところが、日本は銃火戦に強い反面外交は武士道的國民性が禍して、術策を弄する外支外交に翻弄され勝て、國民の期待を裏切ること夥しい。

すべての日本人にとつて、今度の獨ソ不可思議條約等は全く狐につまされた様に思へるが、英佛にとつては外交の失敗、ドイツにとつては外交の勝利といはれるところを見ると歐米人のすることは日本人には不可解なもので何處までも謎である。

支那人はかういふ駈引とたこと生れながらの外交家といつても過言ではなからう。政治外交は勿論、社交や取引にいたるまで、あらゆる詐術を弄して臨機應變、難しい問題にブツつかれば辨法で片づけ、馬々虎々で善處する。日支外交戦にしても、日本の一本調子に反し、國府の外交は多角多面、遠交近攻や一面交渉一面抵抗等の兩頭の蛇のやうな政策はまだしも、邦交敦睦令を出す裏からは、即時對日決戦、國民總武裝等と羊頭狗肉の政策を採り、全く相反する政治工作を二重にも三重にも使ひ分けるから手におへない。おまけに嚴重抗議を幾度連發しても暖簾に腕押、軽く鼻の先で翻弄するから、痺をきらした軍部が癩癩玉を破裂させ、とゞの詰りが「軍部が通つて外交引込む」戦争となる。

人間同志の喧嘩にしても、國運を賭ける戦争も、口だけで濟めば痛い思ひもせず、損害も尠いが、口で負けていざ實力の發動となると幾倍幾十倍の損害を覺悟せねばならぬ。感情や勘定づくで戦争は出来ないが、ある程度まで戦争を避ける外交工作も、歐米や支那流を學んで幅の廣い懸引をすることも必要なことである。

支那人相手の取引等も、一回や二回ではなか／＼甘い具合に商談は成立しない。馴れた人々は別段氣にもしないが、不馴れの人は商談不成立と早合點して匙を投げてしまふ事があるが、これ等は支那人特有の粘りで、たとへ最初の取引條件が満足なものであつても、支那流に粘らない内はなか／＼承知しない彼等である。

日本人の一本調子も、支那人の多面性も、共に長所もあり短所もあるから何れが是か非かは別として、相手方を十分理解してかゝらねば日支提携に十分の成果を擧げることが出来ない。

三、根性悪とお調子者

わが國では、言ひ度いことも半分腹に藏つておく人を利口者といつて居るが、これは先祖代々傳つた習性で、ザツクバランに喋る人を「お人よし」とか、「口が軽い」と言ひ、特に男のお喋りなどは甘く見られること夥しい。

この半分腹に藏つておく日本の賢さを、外支人が見れば根性悪に見え、何か打解け難い腹黒さを思はせ、警戒心をおこさせることになる。

日本の外交等も、いくらかさういふ風に誤解されて来たことは否めない事實で、何時も損ばかりしてゐることは遺憾にたへない。この點支那人はザツクバラン、腹藏なくを通り越して、嘘でも大風呂敷でも、御調子次第では天井知らずに吹きまくる。日本流にいへば底の知れない阿呆であるが、彼等に言はすれば世渡り上手だから所變れば品かはるである。

然し、たとへ日本流のお人よしであつても、それが支那の國民性であつてみれば、強ち排撃すべきものではない。悪い點もある反面、また良いことも決して尠くない。その良い處は常に朗らかで陰性がなく、融和し易く社交的で、何人にも好感をもたれる徳がある。然しまた、この短所が支那を禍して、行過ぎの失敗を招いたことは殆んど枚擧に遑がない。お調子は輕卒を伴ひ慎重を缺く。南京政府の外交行過ぎの失敗は衆知の事實で、對日問題にしても、青島を返せば關東州を望み、佐藤外交の支那再認聲明をもつて日本外交の後退と早合點して、冀東の解消から滿洲奪還を叫ぶ。英ソの口車に乗つて對日決戦を豪語し、多少國力が出來れば強國を以

つて自ら任じ、飛行機の千臺も整備されると日本に勝てるやうに考へ、「日本それ何ものぞ！」と強がる。このお調子の乗り過ぎは滿洲事變で滿洲の獨立となり、支那事變では遂に蔣政權の屋臺骨までヘン折つてしまつた。

清朝は役人の自墮落から亡び、蔣政權はお調子の乗り過ぎから全部を失ひかけて居る。新支那は前車の覆轍に鑑み、堅實第一主義に建國の實を擧げねばならぬ。

日本の根性悪は新秩序の盟主として清濁合せのむ襍度に缺くるものである以上、もつと幅の廣い抱擁力をもたねばならぬ。

四、短氣と呑氣

日本人の短氣なことは所謂島國日本の名の示す通り極端なものであるが、支那人の呑氣性もまた、「大陸性支那」の一言で贅言を要しない。

この兩國民の性格は今度の支那事變に最もよく反映して居る。即ち皇軍の猛進、急追、一寸の間に日本に倍する地域を席卷したのに反し、支那は何處までも長期抗戰、最後の勝利といつ

て、首を締められたら尻から呼吸^{イキ}することを考へて、日本のヘタバルことばかり氣ながに待つて居る。日本の方では痛くも痒くもないが、長期交戦で却つて困るのは支那側ではないか。國土の廣さを唯一の武器として、自國民の財産を焼拂つて焦土抗戦もないものだ。その悠長さには皇軍の方で顔負けして、今度はその上手を行く長期建設と出たが、お株をとられた大陸性支那から嚴重抗議を受けることは覺悟の前である。この長期建設こそは日本が島國から大陸に方向轉換したことによつて餘裕を生じその性格まで悠然^{ユツタ}りしたことを實證するものである。

然し、この長期建設は當局の頭腦をしぼつた戦果確保手段であつて、一般の日本人はどこまでも島國根性、支那人とは全然相反する兩極にあることは言ふまでもない。だが日本人中にも極端な呑氣者もあれば、またズバぬけた短氣者もあるが、それが長短相和して行く處を見ると、相手が呑氣屋支那といつても互讓の精神をもつて交際^{ツキア}へば決して提携出來ない筈はな

50
日本の大陸發展は、今までの島國日本たることを許さない。今こそ島國根性の殻を脱いで、大陸日本たるべき時期到來、急がず、あせらず堅實なる新協同體をデツチあげねばならぬ。

五、男尊女卑と女尊男卑

女ならでは世の明けぬ支那は、世界中でも比類のない女權の強い國である。

支那に於ける地位は「一銀、二女、三男」と相場がきまつて居るが、拜金支那の事であるから、銀の威光は當然として、何故女が男よりも權力があるか、これには種々な見方もあるが、一言にしていへば「女は銀なり」である。即ち女を得るためには相當の銀を要することは衆知の通りで、銀で買はれた女は一種の銀であり、家の財産であるから、銀に準ずるものとして銀の次にあることは當然である。

「妻を買ふ」とか「女は銀なり」といはれる支那では、銀がなくて一生を獨身で通す者の多いことは、とても他國人の想像も及ばないものがある。されば女を得ることを第一目標として、無産支那の生活目標となつて居る「良い女をもち、甘いものを食べ、立派な葬式をする」ことに全力を傾倒して働き続ける風習となつたのである。従つて女の權力は益々強くなり、女尊男卑の國となつたのも當然といはねばならぬ。

近代支那の新しい女性等が、男性よりの解放を叫び、女權の擴張を論じ出したことは衆知の事實で、彼女等が銀によつて買はれ、蓄妾ブルジョアの玩弄物となることを極度に嫌ひ「女は銀にあらず」と主張するものであつて、目醒めた新しい女性〇叫びであり、婦人を商品視する悪習打破の聲である。

蓄妾方面から見た支那は全く世界の奇觀である。支那の持てる階級は大抵數名から多い者は數十名の妾を擁し、所謂「蓄妾王國」を形成して居るが、一人の金持が十名の妾をもつて居るとしても、それだけ結婚難を深刻化する理で、甚だしいのは、三千の宮女をもつた皇帝があつたやうに聞くが、この皇帝は三千人の男に獨身を餘儀なくさせた理である。

日本の家庭では、男兒が生れると「兵隊さんちや」といつて大喜びするが、女尊の支那では反對に女兒の出産を望む風がある。

天災地變による饑饉で、被害窮民が乞食の群に投ずることは、パール・バックの「大地」に見る通りで、愈々窮すれば最後に最愛の子供まで賣りに出すが、その場合、女兒は男兒より數倍高く取引され、買はれた子供は「了頭」(奴隸)として一生を飼ひ殺しにされる。

數年前の黄河氾濫による河南の水災は、この世ながらの生地獄を展開したが、乞食の群が列車を止めて物を乞ひ、子供を賣る者は、兩足を掴んで豚の子のやうにブラ下げ、お尻をめぐつて眞正々味女兒に相違ない證據を見せ、出来るだけ高く賣りつけようとする圖こそ、現實に見る女尊男卑の實寫ともいふべきものである。

アメリカの男女同權などは顔負けする支那の女權は世界中でも比類がないが、日本の男女問題はまだあまりにもこれと相反する極端な對照には驚くの外はない。日本女性の弱さ、一弱きものよ汝の名は女なり」の一句に盡きる。この弱くて恵まれない日本婦人に、貞淑の美德が生れるのは當然で、支那のインテリ層が「洋館に住み、日本婦人を妻として、支那料理で生活すること」を理想とし、アメリカ人が、「日本婦人を妻、フランス婦人を妾、支那婦人を料理女」として生活したいといふのも、すべて日本女性の眞價を買つたものといへる。

燈臺下暗し、この貞淑に馴れ過ぎた日本の男性がこの美德を當然なる婦道と勝手にきめて、家庭に於いては殆んど奴隸視するのみか、中には妻の働きて徒食して居ながら折檻する不心得者もあれば、子供の製造は合資會社でも、出來た子供は妻委せ、御自分は妾狂ひや待合遊びに

現をぬかして居る御亭主もある。而も日本婦人は不平を忘れた人種のやうに、完全に妻としての本分を盡して居る。

これを要するに日本の男性の横暴も見にくいものであるが、支那の女尊も鼻もちならぬ。双方世界の兩極にある惡習たることを自覺して、その惡風矯正に努めねばならぬ。

殊に日本の男性は女性に對する禮を缺く惡習をもつて居るから、新協同體内で日支がガツチリ手を握り合ふためには如何しても支那婦人の御機嫌を損ぜぬ心掛けが第一である。而もこの支那婦人の對日知識はゼロだ。この難物攻略は、徐州や武漢占領よりもはるかに難しいことを覺悟して最も慎重に善處せねばならぬ。

五、支那人の愛國心

「支那人の愛國心」といつても、支那人にも愛國心があるのかと不思議がる人があるかもしれないが、それは勿論、日本の所謂「鐵の愛國心」とは較ぶべくもないといへ、頭から支那人は全部非愛國者と見ることは出来ない。支那人にはまた支那式の愛國心があることはいふまでもなく。

殊に滿洲事變後から、彼等は無暗と愛國心をふりまはし始めた。それもわが日本を對象として、「打倒日本××主義」、「國辱記念」、「日貨不買」などと、頗る偏狹な愛國心ばかりである。

南洋華僑が、抗日資金として蔣政權に送つた金は一億元を越し、自らは、その生命ともいふべき日貨不買を實行して居ることは衆知の事實で、アメリカその他の華僑も大なり、小なり愛國呼ばはりをして居る。

これを以つて、彼等の眞の愛國心の發露と見ることは大變な間違ひである。彼等の奏する愛國行進曲こそは、國民政府の國論統一政策の手に踊らされ、共產黨の魔酒に酔はされた狂態に外ならぬ。

元來支那人は、眞から國を愛する觀念は傳統的になかつたといつて差支ない。幾度か國家の主權者は代つたが、その都度國家の恩惠を受ける處か、却つて誅求擄取至らざるなく、寧ろ國家や主權者はあり難迷惑なもので、常に怨嗟の聲を放つて來た彼等である。

海外華僑が授蔣に狂奔するのも、愛國心といふより、一種の愛郷心の發露と見るのが至當ではなからうか。なぜならば、元々蔣政權の母體たる國民黨は、華僑の出身地たる廣東を溫床の地として今日を爲せる關係上、色々な引きずり引つぱりがあつて、九州人が九州最負をなし、四國人が四國を賞めるのと同じで、廣東とは何の關係もない張學良や閻錫山等が日本と戦つて居たら、恐らく對岸の火災視する事は火を睹るより明かで、廣東陥落後授蔣の積極性を失ひ、汪精衛の重慶分離、新中央政權の樹立で漸く目醒めつゝあるのを見ても、恐らく愛郷心の延長ぐらゐなものであらう。

世界に安住の地を求めて浮浪する亡國のユダヤ人ならいざ知らず、弱小といへども山河あり肉身知己の存する限り、人間として愛郷心のあることは當然である。

愛國心といつても千差萬別、その國體によつて種々であることはいふまでもない。わが國のやうに皇統連綿たる國は別として、舊い國家で、同一民族によつて結成された國民には、相當強い愛國心のあることはいふまでもないが、隣邦支那の如く、有史五千年といつても、興亡常なく、五民族同床異夢、而も一步他省に入れば全然言語が通じないやうな國で、それだけでなく、個人主義の權化のやうにいはれる支那人に、愛國心を云々する等は變積なものである。

それでも、滿洲事變前後から全支は擧げて抗日に狂奔し、抗日をもつて愛國の合言葉としたあの變チクリンな愛國心も、一種の愛國心として否定することの出來ないものがある。然しこの愛國心たるや抗日蔣が、僅か十數年で注入した排日教育といふ曲つた教育によつてデッチあげたものであつて、極めて短期速成の教育であり、教育の本旨に悖る惡の注入であつたため、支那事變の進展と共に、大衆はケロリと忘れつゝあるのを見ても、凡そ支那人の愛國心の正體はうなづけるものではないか。

六、歐米人のいふ支那人は不親切か

個人主義者は自己ほど可愛いものはない。すべての行動が自己本位で順次近親者に及び、縁が遠ければ遠いほど不親になるのは自然の理で、個人主義支那人が、歐米人のいふ通り、外人に對して不親切なのは決して不思議なことではない。

支那人が、縁の遠い人々に薄情な反面、近親者に對する親切味は、支那が多く大家族主義的生活をして居るのを見ても凡そ想像することが出来る。支那家庭は一般に集團家族制で、一つの家に數家族から數十家族、多い家などは二百名にも及ぶ人々が同居し、その和親よりは日本家庭に於ける團欒よりと何等異なる處はない。と同時に外部に對しては殆んど排他主義ともいふべく、その極端な差別には一驚を喫せざるを得ない。

筆者の店に黄といふ支那人店員が、約半年位も勤めて居たことがあつた。この男は手長猿のやうな、自分と他人の區別の出来ない厄介者で、店の商品は失敬する、同僚の金品はチヨロマ

カスといふ有様で、己むなく解雇してしまつた。この店員の實姉が密勒路で陸戦隊納入の野菜問屋の主婦であつたから安心して居たが、それから一年も過ぎたある日、その姉から「黄が死んだ」といふ通知に接したから、早速悔みに行つたが、實姉が涙で語る黄の身の上話は……黄は幼少から手癖が悪く、姉をたよつて上海に出て來たけれど、手癖が悪くて如何にも仕末に負へぬから田舎へ歸したが、またすぐ田舎を飛出して來た。姉の家にも出入止を喰つたため、職業紹介所によつて轉々五回も店員勤めをしたが、お店を最後に就職口がなく、遂々ルンペンの群に轉落、行衛不明のまま一ケ年を経過したが、通知によつて駈けつけた時は瀕死の重病、早速引取つて醫者よ薬よと、金に糸目をつけぬ手當も甲斐なく佛さまになつてしまつた。といふのである。

數日の後黄の葬式に列したが、その葬式の堂々たる盛儀には目の玉の飛出るほど驚いた。全く大ブルジョアの盛葬にも劣らぬ立派なものである。心ならずといひながら勘當の身で、ルンペンにまで轉落した黄の葬儀としては餘りにも不似合な葬式ではないか。これもその實姉の語る處によると……

黄はこの世で非常な不幸な人生を終つた。相當な家に生れながら、彼一人がこの不幸を甘受せねばならぬのは前世の因果應報で、眞に同情に堪へないものがある。こんな不幸な者に普通の葬式を出したのでは彼の來世が思ひやられる。來世だけは立派な人間に生れ代る様に、この盛大な葬式をするのである。と兄弟の情はまた格別である。かういふ近親者に對する親切味は、歐米人の言ふ「支那人は不親切」とは雲泥萬里の相違がある。

個人主義支那人の反面を考慮せず、一概に支那人は不親切者といふのは認識不足も甚だしいものである。

第二章 支那人氣質

一、支那兵は何故弱い

一と昔前までの支那兵と言へば、七ツ道具を背負つた見窄らしい乞食に鐵砲を持たせたやうな恰好をして居た。中央軍や正規兵のやうに整備された兵隊は服装等も割合キチンとして居るが寄せ集めの雜軍となると眞にだらしない愛嬌アイコウタツプリなもので、落語や漫才の種にでもなりさうな兵隊が多かつた。

何しろ雨が一番苦手だ。服装は綿服でブク／＼の綿が入つて居るから雨に濡れたが最後仕末に負へなくなる。而も從來のやうな國內同志の戦争では鐵砲彈に當るやうな心配は滅多にないが、雨となると百發百中、傘以外防ぐものはないから雨を一番怖ろしがるのも無理ならぬ話で戰場といへども雨傘携行、いくら忙しい戦争でも雨天順延は双方申合せたやうにタブーとなつ

て居ると言ふおかしな戦争もあつたものだ。

今度の支那事變上海衝突の當初、抗日支那軍の遺棄死體中から「日本の兵隊は月明の夜、鐵砲を撃ちまくる無風流……」の手記を懐中して居た「詩と兵隊」にでもなりさうな風流少年兵もあつたと言ふが、かう言ふ朗らかな戦争なら命を捨てる者こそ馬鹿の骨頂に相違ない。

何しろ彼等の兵隊志願の目的からして、忠君愛國や滅私奉公等と言ふ軍人精神は藥にし度くもない連中だ。殊に戦争相手は弱い支那人同志の馴合戦争で、出来る丈け要領よく役徳を漁るのが樂しみ、日本軍のやうに進むを知つて退くことを知らない無茶な相手は眞つ平、岩角に頭を叩きつけるやうな無謀な戦争は夢想だにしなかつた彼等である。商取引を利錢、戦争を利兵と云つて一種の取引視して居る支那兵だから、戦争といへば儲かるものと心得て居る。かう言ふ兵隊に向つて軍人精神や愛國心を強要したところで始まらない。今度の支那事變で支那の兵隊が強くなつたと言はれるのは、排日教育の徹底と、援蔣諸國の供給する精銳なる武器による一時的附焼刃と見るのが至當ではなからうか。

兵隊がこの通りであるから、たとへ抗日意識に燃ゆる勇敢な部隊長があつたとしても一人で

戦争は出来ない、惜しむべし、その旺盛なる攻撃精神も結局賣の持腐れとならざるを得ない。たとへば長官から此の勇敢な部隊長に向つて、「貴官は部下一ヶ小隊からなる決死隊を募り〇〇橋脚を爆砕し〇〇高地を死守して日本軍の進撃を阻止し、本隊の後進を全からしむべし」と言ふ命令が下つたとしても、相手が日本軍では決死隊即ち必死隊である以上志願者のあらう筈はない。

個人主義支那人から見れば第一決死隊と言ふ名前が良くない。何も死を決せんでも死に損ふ心配はない。誰しも壽命が来れば自然に死ぬるものを、いくら戦争でもさう死を急ぐ必要はない。大體決死隊と言ふ名前を聞いただけでも「ゾーツ」と寒氣がすると言ふ兵隊さんばかり。

部隊長「決死隊志願者は一歩前に出るよろし、出ないか決死隊名譽あるぞ、汪は如何か」

汪「いまお腹痛い動かない」

部隊長「邱は行くか」

邱「報酬前金で幾何呉れるか、半年溜つた給料も先に拂ふよろしい」

部隊長「孔は如何ぢや」

孔「おかみさん若い、心配ある、一遍相談するよろしいか」

部隊長「陳は異存なからう」

陳「命保証するか」

部隊長「張は如何か」

張「今日は親父の命日ある、明日まで待つよろし」

部隊長「鏢は如何ちや」

鏢「多数決公平あるな」

部隊長「皆不賛成、部隊長一人行くよろしか」

部下「大いによろしな、部下心配するな、日本軍来るみな降伏するある」

と言ふ程でもなからうが、なか／＼纏らない内に東天白めば萬事解決、日本軍が眼と鼻の先に進撃して居ると言ふ有様で問題の決死隊はオチャン、勇敢な部隊長も手のつけやうがなく、部隊長「後にチヌチヌメー」と逃足の速さだけは無敵皇軍も舌を巻く神速。

今度の事變で支那の兵隊が強くなつたと言ふ話は、あらゆる方面で聞くが滿洲、上海事變後

僅か五ヶ年の間にそれ程強くなる理由のものではない。さればその正體を掴むべく靜かに支那軍を質と精神の兩方面から考察すれば、

一、支那軍は攻撃精神に缺け、攻勢に出でることは殆んど稀れと言はれ、最も有利に展開された突撃でも極度に白兵戦を嫌ふ。

二、上海衝突當初に於ける抗日支那中支軍は、蔣直系八十七、八十八師の精銳を加へた大軍をもつてしても、僅かその二十分の一に過ぎなかつた我が陸戦隊に對して何等優勢を示し得なかつた。

三、上海東北部配備の支那軍は中支衝突直後に於て、殆んど無防備に近い虹口東部のクリーク線を突破し得なかつた。

四、支那側では上海の戦闘で二ヶ月半を對等に闘つたと豪語して居るが、當時夏季滿水期にあつた無数のクリークは皇軍の進撃を阻む天然の要塞となり、剩さへ外國權益を考慮に入れねばならぬ不利な條件の下に、尙且つ大戦争の準備期間として、滿を持しながらも敢て強攻法をとらなかつた。

- 五、總攻撃開始されるや上海は勿論、僅か一ヶ月の間に殆んど百里に近い首都南京まで放棄してしまつた。
- 六、滿洲上海兩事變は支那の一部が闘つたに過ぎなかつたが、今度の事變は全支を擧げる總力戦である。
- 七、前兩事變に較べると、千臺の飛行機を初め格段に精銳な武器を有し、援將第三國の援助を受け、剩さへ假想敵を日本として、數年に亘る遠大な計畫を以つて獨逸軍事顧問の指導下に各地を要塞化した。
- 八、抗日支那軍中の精銳は、中央軍と少數の正規兵に過ぎず、地方雜軍や急募兵は苦力やルンペンを狩り集めた俄か兵隊がその大部分である。
- 九、支那事變中局地的にも頑強に抵抗したと言ひ得るのはほんの二、三地區に過ぎず、北支のスピード掃滅、武漢三鎮までの無人の境的躍進、廣東、海南島、廈門、仙頭、舟山列島、福州、温州、南寧等の無血攻略、支那空軍の潰滅等、何處にも支那軍の強さを見出すことは出来ない。

十、海岸線を初め支那の大都市は完全に日本軍の掌中にあるが、一として支那軍によつて奪還されたことはない。

以上は支那軍を質的に考察した弱い例證で、次に精神方面から見れば、

- 一、支那事變中支衝突當初、抗日支那軍の最高部が、交通、通信機關の不完備を利用して北支に於ける支那軍の大勝利を逆宣傳大いに努めたため、これを盲信した支那の將兵は、日本軍の潰滅、支那の大勝は一にかゝつて上海戦にありとして士氣大いにあがつた。
- 二、上海戦において支那軍が勝てば日支戦を決定的のものとなし、日本軍を完全に支那から掃蕩すると共に、上海を掌中に收めることによつて役徳思ひのまゝなることを信じた。
- 三、日本軍の慘虐性を逆宣傳し、降伏すれば鬼畜に等しい日本軍によつて慘殺されることを怖れしめた。
- 四、英、米、佛の積極援助、國際集團の對日壓迫によつて日本は世界孤立となり、ソ聯の同時作戦によつて最後の勝利を確信せしめた。
- 五、支那軍獨特の苛酷極まる督戰隊の非人道的強兵工作。

以上等々によつて一時的にも旺盛なる抗日精神、強靱なる戦闘力や團結力をもち、豫想以上頑強な抵抗を敢てした理由は首肯出来る。

とりわけ支那一流の苛酷極まる督戦術と、交通通信網の不備を逆利用して將兵を欺瞞したこと、援蔣諸國の武器供給等によつてあれだけ頑強に闘つたと見るべきで、その他滿洲、上海兩事變と異り今度の支那事變は全支を擧げての總力戦、而も十數年に亘る排日教育の收穫的總決算期として舉國一致體制と言ふ、支那では有史以來會つて見られなかつた總力戦を展開したのである。

それでも一時的附焼刃に過ぎなかつたから、次々に弱體を暴露し、汪政權の確立と共に支那大衆は次第に反蔣親日に轉向の現象を呈して來たことは衆知の通りである。

抗日支那敵中の敵たる蔣介石が、「支那は三年後には日本に勝てる」と豪語し、アメリカの極東通として知られて居るナサニエル・ベツファーが、「支那は十年後には日本に對抗し得る」と斷じた言葉は、單なる質的に見たもので、精神を忘れた認識不足も甚だしい皮相の見と言はねばならぬ。

從來支那の兵隊は、戦争を一種の取引位に心得て居る程で商賣を利錢、戦争を利兵と言つて「勝てば成金負くれば素つ裸」と言ふ觀念をもつて戰場に臨む兵隊だから、商賣で命を失くする者のないやうに、戦争位で命を失くするのは馬鹿々々しいと考へ、感情より勘定が先、すべて鐵砲彈より算盤玉を彈いて戦争するのが常である。

かう言ふ兵隊が蔣介石の欺瞞政策に引つかゝつてやれ排日ぢや、抗日ぢやと流行病に浮かされて勇躍戰場に來て見たものゝ、案に相違して相手が日本軍では岩角に頭をブツつけるやうなもの、敗戦に次ぐ敗戦で役徳どころか、右や左の戦友は次々に娑婆に左様ならすと言ふ悲觀材料ばかり見せつけられ、強制された抗日や愛國心は事變が不利になればなる程士氣は沮喪し、抗日病に狂奔して居た民衆も、抗日支那軍の敗走と共に支那事變の眞の意義を識り、東洋人本來の姿に歸つて日章旗を高らかに打振りながら新政權を謳歌すると言ふ有様である。

支那の所謂「好人不當兵ハオンブトレン（立派な人は兵にならぬ）」と言ふのを見ても、支那兵の素質は凡そ親ふに足るが、滿洲事變以來蔣介石の音頭とりで、「好男子は須らく覺醒して兵士と爲れ」と宣傳大いに努め、ポスター等で盛んに募兵して居たが、いくら宣傳に大童となつても民衆が

踊らないのは畢竟支那人は誰しも兵隊が良いとは考へて居ない證據である。

募兵の方法も、下士官程度の者が「募兵」と書いた旗を押立て、苦力やルンペンの集つて居る場所をブラ／＼歩き廻りながら、下「兵隊になる者はついて来い、兵隊は飯が食へるし、着物も貰へる、これ程良い處はないぞ」と勧誘して、ソロ／＼ついて来たものから強さうな奴を選んで軍服を着せ、銃を持たせるとこれが颯爽たる支那兵となる。

かう言ふ兵隊だから頭等は至つて低級なもので、字の讀める者は四五名に一人位しかない。兵隊が自分の名も書けないやうでは萬事不便だと言ふので上官が讀み書きを教へる。然し嫌はれ者の兵隊でも志願しようと言ふ奴だから覺えの悪いこと一通りや二通りではない。一計を案じて食前三十分頃から教育を始め、覺えた奴から順次飯を許すやうにするが、彼等にとつて食ふことは天下の一大事だ。曲りなりにも覺えて飯にありつくが、食つてしまつた後はケロリと忘れて居ると言ふ厄介千萬な連中が多い。

支那兵は現役の兵隊でも、戦争と言へば逃亡者が續出する位だから、戦争が近々あるから兵隊を募集すると言つても、それこそ猫の子一匹やつて來ない。その呼吸を知り抜いて居る募兵

官は「當分戦争はないから安心して兵隊になれ」と安心を與へることを忘れない。

今でこそ軍官學校出身の優秀な將校が山ほどあるが、一と昔前までの支那では、大石を持上げたゞけで一躍下士に拔擢された、と言ふ昇進法はいくらもあつたと言はれて居る。

上述の通り支那兵は、中央軍や正規兵以外の雜軍となると、苦力やルンペンの寄せ集め兵隊と言つたやうなもので、戦争は掠奪や暴行が役徳、上官は見て見ぬ振りどころか、寧ろ率先して範を垂れると言ふ、凡そ兵隊か泥棒か區別の出來ないものがあつた。

今度の支那事變中大場鎮の激戦で、豫想以上頑強に闘つた勇敢な支那兵の正體が、機關銃座に縛られたり、お互が鐵鎖で繋がれ自由を束縛されて居た哀れな兵隊であつたが、あくなき督戦隊の強制死守の犠牲となり罪なくして死刑を待つ連中で、愈々逃げられぬとなると支那人特有の糞度胸が出る。運命論者の支那人は、初め何とかして逃れようとあせる時は、女々しく涙を流して泣き叫ぶが、愈々逃れられぬと觀念したが最後、態度はガラリと一變して全く別人の如く大膽不敵な態度を示すのが普通である。

こんな奴等が燒糞と二人連れで機關銃を撃ち巻くものだから大變だ。彈丸は皇軍第一線の將

兵より一千、二千米突後方勤務者が却つて被害を受けると言ふ奇現象を呈する。

支那の内亂で一ヶ師の大部隊が、形勢によつて一夜の内に寝返ることは決して珍らしいことではない。馮玉祥が第二奉直戦で吳佩孚に煮湯を飲ませて一敗地に陥れた等もその一例で、支那内亂に於ける買収、變節、寝返りはつきものとなつて居る。

日本に於ける洞ヶ峠大名は、後世に至るまで二股大根と蔑まれ、武士の風上にもおけぬ外道と嫌悪されるが、支那では機を見るに敏なる將軍として尊敬を受けるから面白い。寝返られた方も先方の條件が良かったら仕方がない、と淡白り諦めて憤慨一つしようもしない。

皇軍の軍事教練は一般に野戦を建前として訓練されるが、支那の戦争は双方が申合せたやうに市街へ市街へと戦争を導いて行く。第一市街戦でなければ必要な物資の補給に困難するし、掠奪や暴行の楽しみもない。殊に支那は領土廣大で、いくら野つ原を占領して見た處で尻のつ張りにもならない。皇軍には立派な兵站部があるが、支那軍は先々で徵發する。徵發と言へば體裁が良いがその實掠奪だから民衆こそ御難だ。

かう言ふ兵隊に對つて軍人精神や愛國心を要求したところではじまらない。三年後には日本

に勝てるとか、十年後には日本と對抗し得る等と、臆面もなく公言する人の頭を怪しみますには居られない。兵器や兵數が戦争の全部か如何か、現實は支那事變が餘りにも雄辯に立證して居る。戦争は精神が第一であるが、この精神が一朝一夕で叩き直せないことは過去に於ける幾多の歴史を見れば判るではないか。

度し難いと言はれる個人主義支那人、戦争を取引視して居る抗日支那軍を三年や十年で日本に勝てる等とはチャンチャラをかしい。支那に於ける近代不世出とまで言はれる蔣介石の統制力をもつてしても、いかに頑張り、いかに睨を利かせても、愈々崩れ出したが最後、他國では眞似の出来ない見事な敗走振りを見せる。されば今度の支那事變に於ける支那兵が強くなつたと言ふことは、その考へ方とその程度に大きな疑問を懷かずには居られない。

二、支那人の挨拶

道で出會つたあまり心安くもない人に對つて「飯あがりましたか」、など、支那式の挨拶で

もしたら、ここら失禮千萬な！と非道いお目玉を頂戴することはきまつて居る。

それと同じやうに、支那人に對つて「良いお天気ですね」、と日本式の挨拶をしたら、わざわざ天を仰いで、何だつまらない、近頃ズーツと天気續きだのに、をかしたといふもんだ。阿呆か天文學者か、何れにしても普通の常識を備へた人とは考へない。

わが國では、先祖代々のお天気挨拶に馴れて來たから極めて自然に聞えるが、支那人のやうに聞馴れない人々にとつては、これくらゐ無味な挨拶はなからう。

わが國のお天気挨拶、支那の食事挨拶、歐米人の朝晩挨拶など、すべて單なる儀禮に過ぎないから、何れが良い悪いを云々することは出來ないが、支那の「飯あがりましたか」の挨拶だけは、いかにも親し味があつて支那式である。人生の一番大きな問題は食ふことで、而も支那のやうに食ふことに事缺く窮民の多い國では飯が食へたら結構、さればこの挨拶は一番現實的なものに相違ない。

わが國の挨拶にも種々ある。處變れば挨拶かはるで、經濟大阪の挨拶「どうだす、儲かりましたか」、「てーんとあさまへん」などは經濟都市にふさはしいもので、これなどは支那の「飯あ

がりましたか」と較べると五十歩百歩である。

同じ日本でも、東京と大阪では武士と商人ほど挨拶も違つて居る。「儲かりましたか」の挨拶は大阪人にこそシツクリ板について居るが、これを東京の官吏が使つたらそれこそ變槓なものが出來あがる。例へば「此頃お儲けになりますか」、「どういたしまして、近頃はちつとも役徳がありません」とやつたら……と奴臭いぞ！〇〇疑獄か、〇〇事件の片割ではなからうか、一寸別荘で休養せい、とやられないとも限らない。

わが國のお天気挨拶は、特に雨の多い關係上、多くの人が天気を喜び雨を嫌ふ風習があり、殊に基隆等は一年中十一月は雨天といふ極端な處もある位で、雨を喜ぶ人といへば、早魃時の發送電會社か農業關係者ぐらゐなもの、普通一般はシト／＼と降りしきる長雨に氣を腐らす者が多い。

抑も、このお天気挨拶は近代的のものではなく、遠い先祖からの遺習で、封建時代の武士等が「飯あがりましたか」とやつたら、それこそ漫才武士が出來あがる。「武士は食はねど高楊枝」など、氣位の高かつた時代に、最も無難なお天気を挨拶にしたのは、國民性からいつて

も極めて自然である。

支那の「飯あがりでしたか」挨拶ほど親しみ深い挨拶は他の何れの國家にも見當らない。殊に空腹の時などは、何だか救はれたやうな氣持になれるし、親交を深めること夥しい。

この「飯あがりでしたか」に對する返事は濟んで居ない時でも「はい、濟みました」が普通である。何故ならば、これは單なる挨拶であつて、食べたか食べないかを聞くのではないから、かういふ場合正直に「腹ペコです」と答へたら、それこそ一遍に興が冷めて、先方では二の句がつけなくなつてしまふ。本當に御馳走する場合は、その言葉に積極性があつて、而も幾回も繰返すからすぐに判断が出来る。

御馳走に誘はれた場合に於ける彼等は、滅多に遠慮するやうなことはない。遠慮は却つて失禮と考へる社交人であるから、どんな忙しい場合でも、たとへそれが食後の満腹時であつても無理我慢して、食ふことにかけては敢て敵に後を見せない勇敢な彼等である。

支那人は初対面の挨拶からこの通り親しみたつぷりな社交家だけに、打解けるのも實に速いもので、挨拶と同時に必ず煙草を勧め、マッチを擦つて火をつけるサービスを忘れない。何時

見ても明らかで、昨日の友も十年の知己の如く、愉快なことこの上もない。

支那の第一聲「飯あがりでしたか」の味はひは、社交下手な日本人のよろしく學ぶべき社交の妙諦ではなからうか。

三、支那人の社交術

支那人は生れながらの社交家といはれ、相手をそらさぬことにかけては世界中でも比類がない。

支那人の社交は千變萬化、種々術策を弄し幅が廣い。大風呂敷を揚げたり、判りきつた嘘でも平氣で喋る。全く彼等の社交は堂に入つたものである。

大體社交に遠慮や氣兼ねがあつてはシツクリした交際は出来ない。すべてザツクバラシ、心の底までさらけ出して、相手に何の蟠りも持たせない氣分を起させてこそ、妙味のある交際が出来るものである。わが國の人々は總體的に「腹を見すかされる」といふ島國的狹量から、心

の底まで打解ける、所謂肝膽相照らす親交は、特別關係者か、十年竹馬の友以外なか／＼出来ないのが普通である。

殊に金持やサラリーマンの上役等は、自大自尊、いやにお高くとまつて、持たない者との交際は、百損あつて一利なしと尻の穴の小さい考へから、自然敬遠主義に走り、結局妙味のある交際は出来ない。これが解放的な外人から見れば、いかにも腹黒さを感じしめ、何だか近づけない陰險な人種のやうに思はせるのである。

その點支那人は極めて解放的で、天真爛漫な兒童を見るやうに、何の蟠りもなく始終朗らかに交際^{ツキアツ}ことが出来る。この支那の社交上手を日本流にいへば、輕薄でありお人よしであるが、社交的に見れば上手者であることはいふまでもない。

「飯あがりでしたか」といふ支那人の挨拶からして親し味深いものであるが、この挨拶を聞馴れない日本人などは、一寸侮辱されたやうな不快を感じることもあるが、馴れるにつれて却つて好感がもてるやうになつて来る。

全く支那人は遠慮を知らない人種である。初対面から歳を聞いたり、月収や財産を尋ねた

り、甚だしきは「お妻さんは幾人お持ちですか」といふ奇問にブツつかれることもある。持物の値段を問ひ、珍らしいものは一々觸つて見るし、相手かまはず盛んに褒めちぎる。提げて居る白金時計を見て、勝手に時計から鎖やメタルまでも引つぱり出して、

「現代流行の尖端は何といつてもクローム側だが、クロームは案外重たいものですな。金よりクロームの方が上品だし、第一盜難の憂ひがなくて良い。お値段はいかほどですか」といふから、

「全部で五百圓ばかり」等と答へると吃驚仰天、

「あなたは白金時計が身分相應だ。あなた位の方はクローム側を提げて居ても、見る人は白金と間違へるでせう」等とトンチンカンなことを喋つて洒々として居る。それこそ値段や製造國名を聞かすには安心出来ない國民としか思へない。彼等にとつて品物の値段は相手の身分を判定し、製造國名はその品質のパロメーターとなつて居る。例へば雜貨類ならイギリス、化粧品ならフランス、機械類はドイツ製を以つて最高とし、日本製は國産に一寸毛の生えた程度で、外國製中値の安い處を買つて居る。

こんな連中に遠慮は禁物、遠慮する人は「心悪了（心の良くない人）」といつて却つて敬遠される。日本人は一般にこの「心悪了（心ワレシ）」の方で、世界人中一番交際し難い國民であるとは、彼等の偽らざる言葉である。

彼等の社交辭禮中一番返答に困るのは、「あなたのお妾さんは幾人おありですか」の奇問である。一寸でも日本の風習を認識した者なら、こんな愚問を發するやうなことはないが、生れながらの持てる支那人は、日本人に對つても自國の風習で律するのだから顔負けする。

この珍妙にして不可思議な「お妾さんは幾人おありですか」は、妾の有無にあらざる數である。彼等にすれば、これだけの紳士が、一人の妾ぐらゐで我慢する吝嗇（シツ）たれ（？）等と失禮な考は毛頭ない。これでも先方では敬意を表したつもりだから怒ることも出来ない。かういふ手合に、「妾などは半匹もないよ」と不用意な返答でもしやうものなら、「あんなに立派な紳士風して居ても、内實は火の車だな」とそれこそ尊敬と信用を一遍にフイにするのが落だ。されば彼等に對する限り、ない妾でも、二三名あるやうな顔をして、良い加減お茶を濁すことは、信用を保つ上にも已むを得ない場合がある。

上海事變前年のことであつたが、取引關係のある持てる支那人から「あなたの一番若くて美しい御夫人に拜顔の光榮に浴したい」といふ世にも迷惑千萬な難題にぶつゝかつたことがあつた。

曾て支那式に數名の妾があるやうに言つておいた手前、今更無いとは言へない立場にある。内心ビク／＼しながらも約束の日時まできめて見たが、サー困つた。いくら二十世紀の文明時代であり、國際都市上海といつても、妾のレデーメイドなどは見當らない。殊に若くて美しくなければならぬ條件がつけられて居るから難中の難物だ。而も約束の土曜日は後三日に迫つて居る。時日は容赦なく流れるが、曾て經驗のない素人が、咄嗟の場合に妾を拾ふなどはとても出来ない相談だ。

約束の土曜日は愈々明晩といふ處まで切迫、兜を脱いで謝らねばならぬか！といふ瀬戸際まで追詰められてしまつた。だがしかし、こゝで兜を脱いで以後の取引にまで差支へて來る。利害は別としても、こゝで謝つては日本男子の面目（？）を如何んせんか。

藝者なら！と思つて見たが、若くて美しいのは屋形住ひ、家持ち自前は大抵婆藝者で裏表の

判らない代物で第一條件に缺けて居る。

窮餘の一策！ダンスのパートナーに時々選んで居たブリュエード・ダンスホールのK子を思ひ出し、泣落し戦術で、尻込みするのを拜み倒して、漸く一日契約の俄妾に成功、先づこれなら條件揃ひて申分なしと一安心、やれ／＼氣の揉める「妾ヤイ」ではあつたと思ひ出すだけに苦笑禁じ得ないものがあつた。

善は急げと早速準備にとりかかり、化けの皮を現はさぬやうにと、バッテリーの名コンビ、サイン工作も萬事OK、當日は得意満面、K子ならぬ第〇號夫人のアパートに案内し、接待の焦點を胃袋に集中すべく、御馳走攻めで胡魔化す計畫のもとに、灘の生一本と贅美を盡した日本料理に日本情緒を満喫させ、程良い處で麻雀テーブルを持出し、夜の更けるまで歡待大いに勤めたが、臨時雇の愛妾氏が、眞にせまる甘い場面や、よき妾ぶりを見せたため、流石の悪童連も顔負けの形、幸ひこの難物「俄妾劇」も大成功裏に幕となり、豫想以上の成果を擧げることが出来た。

こんな連中に對つて、お調子に乗つて、妾はブリュエードでダンサーをさせて居る等と、

餘計なお喋りは禁物、何故ならば、銀と暇のあり餘る先生等は、明日とも言はず悪童連を引具してホールを襲撃、「友人の〇號夫人だ」等と得意氣に紹介するだけなら良いが、食堂やバー等にまで引張り廻す位のことには仕兼ねない。さうなれば、一日契約の化けの皮まで怪しくなり、持ちも提げもならぬ破目に陥らんとも限らない。

支那の人達と會食して、一番愉快なのは彼等に遠慮のない處である。量と味に於て世界の王座にある支那料理が、片つ端から遠慮會釋もなく攻略され、宴席の空氣を極度に浮立たせると共に、一同胸襟を開いて、宴會の意義を百パーセント味はふことは、とても他國人では眞似られないことである。

宴席はテーブルといはず床といはず、あたり一面、食殻は死屍壘々足の踏む處もない。盃盤狼藉、ただでさへ姦しい彼等の話聲は席の進むと共に益々大きくなり、アルコールが廻れば雙問答さながら、而も初對面も十年の知己の如く何の蟠りもない處に、得も言はれぬ社交の妙味がある。

抑も、社交の妙諦は腹藏ない處にある。何でもかでも無遠慮に、ズバリ／＼といつてしまふ

ことは、たとへそれが禮を失する不用意な失言であつても、その性格を知つてしまへばそれで通るのみか、却つて好感を持たれる。その點支那人は生れながらの社交家といはれるだけであつて、大きな徳をもつて生れた國民である。

四、嘘つき王国

嘘つき支那に關する限り、御伽噺の夢物語のやうに、眉に唾して、氣つけ薬を用意しながら聞いて居ないと、とんでもない錯覺をおこすことがある。

嘘つき支那は、嘘の良心を完全に麻痺したトーチカ心臓で、戦争の弱さと反對に嘘にかけては將に世界一、遠慮會釋なく嘘砲を機銃式にブツ放すのだから、世界人はその毒氣に征服される。

今度の支那事變で中支衝突當初、援蔣三銃士たる英佛ソ聯側では、支那スポークスマンの嘘でかためた逆宣傳を眞に受けて、「支那は可愛想だ、弱い者いぢめする日本は怪しからん」と、

盛んに支那の提灯を持ち、對支援助や、國際干涉誘發工作に大童となつて居たことは吾人の記憶に新たなる處で、赤い舌をペロリ！と出したのは支那の排日屋だつたが、それにも増して北叟笑んだのは、英、佛、ソ聯の爲にせんとする策士連であつたことはいふまでもない。

この反日援蔣策士連は、支那の嘘は一から十まで知り抜いて居るが、嘘でも信じた方が都合の良い時は、無條件に信じたやうな顔をする。利害關係が深ければ深いほど、嘘でも尤もらしくとりあげねば芝居にならないし、やれ國際聯盟ぢや、九ヶ國條約ぢやといつても、相當な根據がなくては、たとへ大根でも役者が出揃はない。

支那の眞赤な嘘を尤もらしくデツチあげて、やつとこさ遠いアメリカまで引つぱり出すところまでは大出来であつたが、上手な嘘も正義の前には影薄く、グン／＼進む皇軍の鐵石心にかつては犬の遠吠えよりも儂い。折角もり立てた會議も單なる國際漫談會に終り、國際聯盟は恥の上塗り、九ヶ國條約は「八ヶ國條約」とか「主演者のないハムレット劇」と嘲笑を買ひ、日本でも、「由良之助のない忠臣蔵」と物笑ひの種を蒔いたに過ぎなかつた。

世界の人々はこの老大國支那に對つて、「支那とは何ぞや」とか、「謎の國支那」、「支那は

正常なる國家にあらず」と等と、凡そ獨立國としては聞くに堪へない罵言を浴せかけて居るが、哀れ醒めない老大國は反撃の氣力もなく、この侮言に甘んじて居るのも、畢竟するに支那が不信の國であり、嘘や法螺が支那の表看板となつて居るため、國家にしても、個人にしても、嘘つく者を相手にしないのは當然である。

今度の中支衝突の直後、嘘の震源地的役割を演じて居た眞如の無電臺が、神速なるわが海の荒鷲の爆撃によつて滅茶苦茶にされたかと思へば、下等動物は何處からでも呼吸するやうに、今度は抗日支那の親分格たるイギリスやソ聯を踏臺として香港や、遠いモスコ―あたりから、盛んに毒づいて居たことは衆知の事實である。

下等動物には心臓がない。胴體を切断されても尻尾の方から鼬のやうに最後屁を嗅がせる。嘘をついたり、誇張宣傳を常習とする國は、まだ外にもないではないが、同じ嘘でも、支那の嘘は良かれ悪しかれ徹底したもので、頭かくして尻隠さず、一々尻から暴露しても、蛙の顔に水ブツかけたやうに洒々として居るのには、却つて聞く方が顔負けする。國が弱いだけに同情があり、どんな不信も問題にされない處、國が弱ければ嘘にまで徳がある。

支那事變中支衝突の第二日（八月十四日）、支那空軍が編隊も見事に、わが機先を制しようとして、堂々虹口邦人密集地區を空襲したのは敵ながら天晴れといひ度いが、目的物たる肝腎な日本權益には裕豊紡績（東洋紡績）にかすり傷を負はせたに過ぎず、却つてアジヤ石油、英、米軍艦、キヤセイ・ホテル等援蔣國の權益や、大世界、先施公司等自國權益に見事首彈を浴びせ、敵か味方が判らない、共産黨の所業にも等しき狼藉を敢てした。

時恰かも、セントラル地區の反日外人等は、帝國領事館横に碇泊指揮にあたつて居た旗艦〇〇が、今にも支那空軍の巨彈を喰つて黄浦江の藻屑と消えるであらうと、戦争最大のスリル、映畫で見られない實演を味ふべく、パブリック・ガーデンからバンド一帯に亘つて黒山の群集が蝟集し、「ざま見ろ！ ジャップ奴！」と高見の見物の眞最中、處もあらうに一丁ばかり背後のキヤセイ・パレス兩ホテル中間の路面に、グワァーン!!と一發、五千米の上空から加速度を以つてブツ放したのだから、迫撃砲や大砲どころの騒ぎではない。地軸を裂くこの一彈に百四十名の死傷者を出したのだから、對岸の火災處か眉に火のついたやうな狼狽、眼球を白青させながら蜘蛛の子を散らす様に四散したのは滑稽を通り越して氣の毒見たいなものであつた。

この天に唾する配罪的盲彈は、少くとも數萬、十數萬内外支人還視の中であつたにも拘らず、南京政府御用紙「中央通信」が逸早く、「日本飛行機の暴狀！」と題して眞赤な特號見出しで、白を黒と強辯する御座なりの嘘報を掲げ、その反響を見てあれば、マンの悪さ屁の臭さ、生證據の野次馬が何萬といふほどあつて、實見した自國側大衆からまで露々たる非難に周章狼狽、尻尾を掴まれたが百年目、流石トーチカ新聞も兜を脱いで記事を取消し、責任二飛行士を處罰した旨發表した等は、嘘つき支那の最も良い實例である。

國民政府の嘘は、信じた方が都合の良い人々以外、自國の民衆といへども滅多に信ずる者はない。最も効果的なのは兒童の排日教育である。彼等兒童としては政府要人や先生ほど偉いものはないと信じて居るから、彼等にとつて教科書は唯一の頭の糧である事はいふまでもない。

ところが、この教科書が日本を敵役として、嘘で固まつて居るから大變だ。この悪玉ばかり注入された小學生も十年経てば支那の中堅層となる、その總收穫が今度の支那事變と思へば怖ろしい教育もあつたものではないか。

その排日教科書を一讀すれば、日本を侵略國呼ばはりはまだしも、暴虐無道と誹謗し、日本

××主義打倒を絶叫する滿艦飾といつたもの、支那軍の常套手段を皇軍になすりつける文句は隨所に見られ、北支、滿洲の奪還はおろか、朝鮮の獨立から臺灣の恢復に至つては狂人に等しく沙汰の限りといはねばならぬ。

全く一國の政府が、次の時代を背負つて立つ兒童に教へる聖なる教科書にまで嘘八百の出鱈目を織込み、いやが上にも抗日意識を鼓吹しておきながら、裏に廻つて日支親善、東洋平和を口にする等は、木によつて魚を求めるよりも難しいことである。

こんな教育が、知識慾の旺盛な兒童の頭に叩き込まれるのだから深刻だ。罪科ツミトガもない兒童までが、無條件に日本を憎み侮ることになり、十數年前その教育を受けた者は、中學、大學を経て現代支那の中堅層を形成することになり、遂に支那事變の如きアジアの悲劇が餘儀なくされた理である。

強將の下に弱卒なし、政府がこの通り嘘の固まりのやうなものだから、民衆もまたこれに倣ふで、相當な紳士階級でも、嘘だけは平氣の平左だ。

一般に支那人との約束は、それを確實に期待することは出来ない。そのかはりまた、彼等は

ど、どんな約束でも氣持よく、氣輕に引受ける人種はない。彼等は初めから實行する意志がなくとも、または、實行の困難なことが極めて明瞭であつても、一旦は無造作に引受けるのが常である。彼等の考へ方は、約束を拒絶することは、相手の感情を損ずるものであつて、社交上面白くないといふより、却つて失禮にあたるといふ、とんでもない社交哲學を編出して居る。かういふ氣持で約束を引受けるのだから、何でもかでも否應なし、若しその約束不履行で相手に迷惑をかけても、次回會つた時は洒々として居る處、正に嘘は罪惡だなどは毛頭考へて居ない證據である。

然し、嘘の良心が完全に麻痺した彼等でも、案外確いのは金銭の貸借だ。金銭に關する限り所謂支那人の面子にかけて、殆んど間違ひを起さないから不思議なものである。借用證書等も、一般の支那人は減多に印鑑を用ひない、強ひて要求すれば、名の下に田と書いて渡すが、何の呪ひか知らないがそれが奇妙に間違はない。されば彼等の約束は、面子に關せざる限り、嘘ついても差支ないと考へて居るのかも知れない。

支那事變の前年、取引先の陳といふ人を日本料理に招待する約束をしたことがあつた。相當

良い得意先であつたから、大いに歡待するつもりで、上海一流の旗亭を選び、約束の午後五時に先だつて用意をすませ、一流の美形數名にも内意を含めて、今か／＼と、待てどくらせどやつて來ない。電話で照會すると三時過ぎ頃出たまゝだといふ。何處かに途中立寄つて來るのだらうと、待つこと久し午後八時！あゝ、やつぱり支那人の約束か、と遲蒔ながら漸く氣がついた。これ以上待つことの意味ない事はいふまでもない。折角張りきつた宴會もオチヤン、鋤焼も酒も、藝者までがお茶をひいてしまつた。

翌日早速電話をかける。

陳「ヤ、昨日はとんだ失禮、何分約束が生憎三つも混線して已むを得ず手近の方から、と思つたのが遅くなつて、ほんとに申譯ありません」、とは世にも珍妙にして不可思議な詫び方もあつたものだ。

吾々から考へれば、同時に三つの約束が混線するといふのが不思議なものだし、又混線しても、そんな不信を洒々と口にする事、それ自體が正氣の沙汰とは思はれない。この非常識を、而も相當な紳士が臆面もなく話す支那は、「謎の國」より寧ろ「嘘の國」が適言ではなからうか。

五、法螺ふき王国

大陸支那の大法螺は、「白髪三千丈」の一句に盡きる。

數年前東京で催された日本美髯大會では、全國から髯自慢が集つて、見事金的を射當てた加藤翁は、尾長鳥のやうな美髯を、首からブラ下げた頭陀袋に後生大事と入れて居たが、その長さといへども五尺四寸以上のものではなかつた。

今も昔も、日本も支那も、髯や髪長さの長さにそれほど大差のあらう筈はない。して見れば、支那の「白髪三千丈」は、少くとも五百倍以上の大法螺たること將に實證也である。この大法螺は、世界法螺界のレコード・ホルダーたるべき秀逸として、現代に至るまで他の追隨を許さない。法螺もこれだけになれば愛嬌があるし、第一景氣が良い。わが國等でも、今なほ代表的美辭麗句として人口に膾炙されて居る。

近代支那の法螺界は、極度の不景氣續きで、三百や五百倍といふインフレ景氣は遠い昔語り

となつてしまつた。今度の支那事變は戰爭景氣で變態的非常時インフレを現出したが、普通はやつと二倍ぐらゐが現代支那の標準相場となつて居る。

支那事變に於ける國民政府の對外放送は、法螺ふき支那の元締だけに、何時聞いても大法螺や大風呂敷を擴げて居るが、戰爭が漸次困難となるにつれて、全然根據のない逆宣傳にまで脱線し、銃火戰と反比例して、トーチカ心臓で鐵牛部隊のやうに爆進する勇敢さは、とても他國では比肩すべきものがない。

どうせ戰爭には勝つ見込がないから、せめて宣傳戰だけでも日本をやつゝけて、法螺ふき支那先祖の名を辱かしめない殊勝な心がけだけは感服の外はない。

一體に支那放送といへば、親支外人は勿論、自國民といへども大底眉に唾して聞く者が多く、信じた方が都合の良い者だけが御尤もといつたやうな顔するだけで、普通一般には何の效果もない、青空に空砲ブツ放して居るやうなものである。

蔣介石が、カー英大使や外人記者團に對つて、やれ四月攻勢とか、やれ十月、やれ冬期攻勢等と、自己慰安的強がり豪語して居ることは衆知の通りで、なるほど攻勢は攻勢かもしれな

込んで居るなどは言語道断なことである。

ある時佛租界に店を持つて居る支那商人が来て、防水接合劑「萬能液」の上海代理販賣をしたいから引合つて貰ひたい、といつて来た。特約の條件として毎月一千元以上取引すること、上海全市を代理販賣すること、の二つを取極めて、第一回見本として百元分を取引した。

その後先方のいふが儘に、また百圓の取引をしたが、言を左右にして月一千元取引契約を履行しさうにもない。大體この話は月一千元取引を規準として製造元に交渉した關係上、値段も非常に安く、小口取引では引合はないのみか、第一製造元に對して法螺ふいたことになる。

その次にまた百元取引を申込んで来たから、今度は契約を楯に強硬に一千元取引を要求したら、それきり馳の道をきめ込んでしまつたが、かういふ手は支那人の常套手段で、仕入値を出るだけ安くさせるため、計畫的に駄法螺を吹いて來るのである。されば支那人との取引は、先方の言ふことを無條件に鵜のみにすることは餘程警戒せねばならぬ。

殊に支那の金持階級は出來るだけ尊大に構へ、財産なども輪に輪をかけて吹聴する。聞きもしない妾のことや、銀行その他の信用等まで稅務調査のやうに語つて聞かせ、煙に巻く大風呂敷を擴げる。

彼等は嘘も甘い

が法螺も上手だ。何れ嘘と法螺とは親子か兄弟のやうなものだから、嘘つき支那が、法螺にかけても世界の王座にあることは敢て怪しむに足らぬ。

六、黄包車の屁理窟

黄包車ワンボウシャは日本の人力車である。もと／＼人力車は日本が元祖であるが、勞働賃金の騰貴と、西洋文明のスピード化に押されて、日本では臺灣、大連以外内地では殆んどその影を潜めつゝあるに反し、近代支那では、何處もかしこも黄包車の氾濫、殊に都會地では完全に都會人の足となつて居る。

この黄包車は別名を東洋車トウヤンシャ（日本車）とも言はれるが、すっかり日本式を改善し、日本の人力車とは殆んど較べものにならぬほど乗心地が良くなつて居て、車體が非常に低く背延びの出來る具合は、丁度安樂椅子にかけたやうで申分がない。

數年前のことであつたが、南京旅行の歸途、開北の北停車場に下車すると共に、例によつて十數臺の黄包車群の包圍を受け、忽ち猛烈な客の爭奪戦が展開され、車夫等の口々に叫ぶ最底値の車を選ぶのが普通であるが、一群中に、見るも哀れな一老車夫を發見したから、佛ごゝろも手傳つて、無條件にその車を命じたことがあつた。

ところが、二十貫に近い體重と、大型トランク一個は、この老車夫にとつて過重の負擔と見えて、ノロノロ龜さん、一向に道が捗らない。別に急ぐ必要もないし、最初から覺悟の前だからこれも仕方がないと觀念して、途中幾度かゴーストップにハラ／＼させられながら、やつと家に辿り着いた時は、普通時間の二倍以上もかゝつて居た。

何時も定つたやうに支拂つて居る大洋二十仙を與へたが、老車夫先生頑として承知しない。彼の要求するものは大洋三十仙である。

老車夫のいひ分は、「北 Station 駅から文路まで、大洋二十仙は決して安い賃銀といふ理ではないが、私は他の車夫と違つて倍以上の時間を費したから、それだけ勞力も大きなものであつたしあなたも亦、それだけ長い時間を乗車されて居た。殊にお宅は立派な金持で、私はお見かけ通

りの貧しい老人である。この通りヘナ／＼した老人の車には、特志の同情者以外滅多に乗る人はないから、その同情者に重ねて同情を乞ふことによつて、少い収入を補ふより仕方がない」と文句多々どうしても大洋三十仙を要求して譲らない。

この老車夫のいふことも、支那流に考へて見れば一理ないでもない。これ等は二十數年前、臺灣の汽車が遅い上に料金が高いことが議題にのぼつた時、當時の民政長官下村氏が、長い時間乗れば高い料金は當然ではないか、と諧謔まじりに答辯したことを思ひ出さずには居られない。

上海邦人村といはれる虹口から、フランス租界にある化學の殿堂「上海自然科學研究所」までの車賃は、普通六十仙位が相場となつて居るが、空爆で一躍日本人に馴染深くなつた「大世界」あたりで他の車に乗りかへると、二回に支拂はれる乗車賃は、二十仙と三十仙で計五十仙となり、十仙の割安となる。

わが國などでは、遠く乗れば乗るほど割安になるのが常識であるが、支那では却つて割高となる處支那人の心理は謎である。

この虹口、大世界、研究所間にしても、虹口、大世界間は二十仙、大世界、研究所間の三十仙は通り相場となつて居るが、これを全部ブツ通せば、前者は二十仙で良いとしても、後者は距離に比例して車夫の勞力が倍加されるから、その勞を犒ふ骨折賃として、十仙の割増は當然だといふのである。

わが國の常識で考へると、遠距離割高などは珍妙不可思議なことであるが、彼等にすれば立派な理窟であつて、これがすべての支那人の常識となつて居る以上、郷に入れば郷に従ふことも亦已むを得ないことである。

一體に支那では、賃銀の前極めなしで乗る人は金持で氣前の良い鴨と見られ、相當高い賃銀を要求される。また同じ距離でも、市場の買出しや仕事通ひなどは案外安いし、映畫その他の娯樂場に行く時はかなり高い支拂を覺悟せねばならぬ。婦人は男性より安いし、また服装によつても支拂の多寡あり、盛装のアベック等には、足もとをつけ込んでべら棒な賃銀をブツ掛けることがある。

一般に黄包車の考へ方は、楽しみに行く人は幸福にある以上、その幸福の幾分を貧乏な車夫

にも分つべきで、普通より多少奮發するのは當然である。また車夫は車夫で、それだけ恵まれない人々に勉強することが自然の理である、と判然とした觀念を持つて居る。

まだ上海事情に馴れなかつた十年ほど前の話であるが、曹家渡の公大紡績（鐘紡）から、内外棉會社第六工場に行くべく黄包車を拾つたことがあつた。

當時まだ支那語の出来なかつた頃だったので、車の上から見當つた方向をたよりに、「左に行け」、「右に曲れ」といふ具合に指圖しながら走らせて居る内、勞勃生路の内外一、二工場附近まで來かかると、立ち止つた車夫が、何かブツ／＼いつて進まない。先方では、「降りろ」といつて居るらしいが、言葉は通じないし、途中代りの車の見當らない場末で、その上大きなトランクを提げて居るのに、こんな所で降ろされては大變だ。八釜しく呷鳴りつけながら一元札を見せ、追立てるやうに無理矢理に進ませた。黄包車のブツ／＼は益々劇しくなる。キヨロ／＼あたりを見廻しながら、なか／＼進まない。漸くにして小沙渡路あたりまで來たと思ふ頃、突然頓狂な聲を出した車夫が、さも吃驚したやうに顔面蒼白となり、遂々泣き出してしまつた。腹痛でも起したのではなからうか、と腹がたつやら可愛想やらで立往生して居る處に、

自動自轉車の英人巡査部長が駈けつけて来たから、渡りに船と通譯を求めると、淡然り『お氣の毒さま』の一言を残して、有無をいはず車夫を戈登路警察署に引致してしまつた。

何が何だかさつぱり判らない、をかしいな！罪人だつたのか、と思ひながら重荷を引きずつて警察に行き、知合ひの邦人巡査にその理由を聞いて見ると、支那租界黄包車は支那租界のみに許され、共同、佛租界侵入を許されないにも拘らず、彼の車夫は交通違反を敢てしたから罰則を適用されるといふことであつた。

これで先刻來不審を懷いて來た車夫の謎が漸く氷解した。元々言葉の不通が原因で、嫌がるのを無理矢理に進ませたのだから、自分としても多少責任を感じずには居られない。

邦人巡査や英人部長に釋明大いに努めたが、事情の如何に拘らず、車夫が百も承知の規定を犯したのは不都合千萬だ、法は曲げられぬ、と三日間の營業停止、三元の科料を即決申渡された。

車夫に乘車賃を拂ふべく面會を求め、一元を與へようとしたが、罰金額の三元呉れといつてなかく承知しない。こちらは何も知らずに車を進ませたまで、言葉の不通から規制を犯さ

せたとはいへ、車夫は共同租界侵入の違反なる規定は先刻承知して居る以上、どんなに強要されても、規定を犯してまで客の命令に従ふ理由はない。

これ等は、一元札を見せられて、慾に目のない車夫が、慾と二人連れで規則を破つた以外の何ものでもない。さればこの近距離に一元の車賃は法外なものでなければならぬ。それにも拘らず車夫は罰金額の三元を強要して已まないのである。

だが然し、車夫の主張する『金のない自分が三日間の營業停止を受け、金のあるあなたが金を拂ふのは當然だ』、といふのも、支那の所謂「理」によつて考へれば、萬更判らない話でもない。

郷に入つたら郷に従へだ、車夫よりいくらか金持である以上、御無理御尤もと諦めて、一里足らずの近距離に三元といふ法外な車賃を拂つて、上海事情を一つだけ知る事が出來た。

また支那では黄包車に乗つて、一里位走らせ、十仙も拂へば十分であるが、佛心を出して二十仙もやれば、必ず尠いからもつと奮發しろといふ。三十仙やつても四十仙やつても決して満足さうな顔はしない、やはり尠いといつてねだる。女子と小人は養ひ難しといふが全く仕末に負

へない小人である。即ち黄包車の考へ方は多く與へる人は金持だから、ねだれば尙呉れる。尠く與へる人は貧乏だからねだつても駄目だといふ風に解釋する。すべて彼等の行動は支那人の所謂「理」によるもので、而もその「理」が低級になればなるほど屁理窟だから手に負へない。

七、面子の正體を暴く

虹口路^{キウコウ}マーケットのすぐ先に、羊の腸からテニスガットを製造する工場を經營して居たことがあつたがその隣りに汪^{ワン}といふ支那人が住んで居た。

汪の家は、さほど豊かとも思はれないが、といつてその日に困るほどの生活向きでもないらしく、夫婦と子供の五人家族で、汪の竹細工製造販賣で平和な生計をたて、居た。

支那事變前年のことであつたが、ガット工場に用事があつて行つて見ると、汪の家の前は一杯の人ばかりで、何が起きたか群集がワイ／＼騒いで居る處只ごとではなさうである。

群集の肩越しに覗いて見ると、十歳位の汪の長男が、母親の爲に非道い折檻を受けて居る。ヒステリックな母親の甲高い聲や、長男の悲鳴、口々に罵る彌次馬のざわめき等たゞごとではない。

汪家の爭議は從來もないではないが、未だ曾てこれほど非道い折檻はなかつた。母親は支那人として内氣な方で、長男は至つて利口さうな子供、それにこの惨状は何ごとぞ。

打擲して居る母親の側には、子供の片腕を鷲掴みにして睨目つけて居る意地悪さうな老婦人が居るが、彼女がこの問題の發頭人らしいやうに見受けられる。

隣り同志であり、子供は時々使ひ走りをさせたこともあるので、遂々仲裁を買ふ事にした。母親よりお先に出嫁婆つて老婦人の語る處によると……「この子供が、老婦人の庭先に干してあつた洗濯物を失敬しようとしたが、その老婦人に發見され、その場で小つ非道く叩いて子供を證據に嘔鳴り込んだ」といふのである。

盜難といつても未遂であり、老婦人の被害は何もなかつた上、年齒もゆかぬ子供だから許してやれ、といへば、『面子を潰したから承知出来ません』、といつてまたビシャーリー！

支那は何事によらず長期戦、何時までも果しがないから、老婦人の手から子供をフン奪つてしまつたら、母親は群集に對つて「東洋先生トウヤウシヤン（日本人）が折角仲裁してくれるから許しても良いか」といへば、彌次中にも同情者續出、「面子はたつた」、「子供は善人になつた」と陪審席が無罪決議、裁判長の老婦人も許すといふに及び、さすがの騒動も幕となつた。

子供の盗まうとした目的物は婦人シャツで、凡そ子供に用のない代物である。こりや一寸臭いぞ！と思つて、數日後工場の前で遊んで居る汪ワンの長男を掴へて聞いて見ると「あの洗濯物は新しいから、こつそり失敬して來い」、といふ母親の命令イヒツケで、側に行つて見ると手が届かない。側の塵箱を踏臺として、やつとこさ手が届いてシメタツ！と思つた瞬間、襟髪をむんずと掴んで居たのが彼の老婦人であつた、と恩人と見てか包む處なく告白した。されば泥棒の主犯は母親であり、子供は手先に過ぎない。

これから考へても、子供が非道い折檻を受けるのは、泥棒したからではなく、し損じて面子を潰したからである。老婆を初め多くの群集も、目的物から考へても、泥棒の張本人が誰であるかは百も承知して居るが、それをいへば問題は重大となつて來る。支那婦人同志の喧嘩はな

かなか容易に治まらない難物である。

單なる面子のため、罪のない子供が母親の犠牲となり、母親の悪事をカムフラージュするのだから、支那人の重んずる面子といつてもナンセンスものではなからうか。

支那人の面子は日本の體面と較べると非常に融通性のある事は言ふまでもないが、屁理窟で曲りなりにも面子を立てると言ふことは極めて普通に行はれ、而も支那人は理窟をこねまはすことに妙を得た人種である。

して見れば、この面子といつても怪しいものでその正體は外面を糊塗する醜女の厚化粧の類のやうなものである。

八、支那の喧嘩は事變の縮圖

支那ほど喧嘩の多い國はなからう。而も概ね口喧嘩で、滅多に實力を發動させない代り、口角泡を飛ばす舌戦の激しさと長期抗戦だけは、とても他國では見られない。

殊に、對日本人の喧嘩は、今度の支那事變を想像すれば間違ひない。日支の喧嘩といへば一方は叩き役、一方は叩かれ役の跛行状態を展開し、而も長期抗戦、救援を求める工作に大童で、逆宣傳をこゝとする等は何處までも支那式である。

日本人の喧嘩は江戸つ子式に、一つポカリツ！とやつてから文句をいふ。日本人は島國生れで至つて氣が短い、速戦速決主義で、口より手が先、機先を制するを以つて喧嘩の秘訣として居るに反し、支那人は大陸性の悠長さをもつて、つとめて武力を廻避し、今にも爆發するかに見えても威嚇にとゞめ、振りあげた拳で頭をかく、手の遅い反面、口は手を補つて餘りある。彼等は出来るだけ無抵抗——韓信の股潜りの忍耐心や、長期抗戦主義をとりつゝ最後の勝利を策し、そのためには觀衆に對つて逆宣傳大いに努め、觀衆の同情を得て喧嘩を自己に有利に導く工作を忘れない。場合によつては喧嘩相手を忘れてしまつたかのやうに、觀衆に對つて演説を初めるといふ有様で何時まで経ても果しがない。

在留邦人等は長い大陸生治で、その風習等も多分に支那化し、餘程我慢強くなつて居るが、あまりの長期戦に堪忍袋の尾が切れて、潜在する民族性がむく／＼と鎌首をもたげ出して、猛然鐵拳を頬ツべたに炸裂させる。

支那人の反撥力もないではないが、殴られながらも、チツと、相手の力量を測り、暫くの間靜觀的態度をとり、相手がそれ以上悪化するのを制しながら粘り強く我慢する。それでも邦人の攻撃は手を緩めない。ポカリツ、ガーン！と、再度三度益々鐵拳は威力を發揮する。

愈々堪へられなくなつた支那人は悲鳴をあげながら、觀衆に救援を強要する、應援者が出てこれなら勝てる、と見込がつけば猛然起つて反撃に轉ずるが、應援者がなければそれで「参つた」と淡白^{フラット}り謝る。

支那のやうに暇人の多い處では、犬コロの喧嘩でも黒山の彌次が集つて来る。支那人觀衆は支那事變に於ける援蔣民主主義諸國のやうな現實功利主義者ばかりで、「義によつて弱きを援ける」といふ血の氣の多い者は一人もない。相手が弱いと見れば加勢して分前に預かることを考へるが、負喧嘩には嘲笑以外何物をも與へない。

支那に於ける男女間の喧嘩ほど男に歩のないものはない。たとへ對等な理窟があつても、普通七分女に有利に展開される。而も支那の婦人は男に反比例して、口も達者なら手も速い。そ

の上觀衆の多くが女の味方だから、これではいくら何でも算盤がもてない。自然男は女に遠慮することになり、従つて女の無理が通つて男の道理が引込む支那は世界に類のない女權の國となつてしまつたのである。

支那の男も、男の歐米人も、女に對しては一步も二歩も譲るから、支那婦人は上見ぬ鷲に増長して、その調子でもつて日本人にまで横着をいふが、日本男子だけは、ドッコイ！さうは問屋が卸さない。ガアーン！と一つ鐵拳を見舞つて「何ぬかすかツ！めん鳥ツ！」とやるから手も足も出ない。おまけに達者な口も用を爲さない内にペンヤンコに參らされるから仕末に負へない。こんな筈ぢやなかつたが、と考へるだに癩の種、嫌やな奴よ！汝の名は日本人なり、といつて、日本の男といへば一目も二目も苦手とする彼女等である。

今度の支那事變中にも、時々抗日支那軍の遺棄死體中から、娘兵隊の死屍が発見される記事を見るが、男より女の方が強い、と自惚れて居る彼女等が、あまりにも呆氣なく敗退する抗日支那軍の意氣地なさに業を煮やし、自ら威風堂々(?)第一線に督戦に乗り出したものと見ると、畢竟女は男より強い、と考へて居るからこそである。

女が三人寄せれば姦といはれる通り、日本の井戸端會議等も相當賑やかなものであるが、支那人同志の喧嘩は何といつても物凄い。彼女等の喧嘩は二人だけでも相當なものであるが、時によつては次々に應援團が繰りだされ、四十、五十の大部隊が相對峙し、舌戦物凄い持久戦を展開することがある。

かういふ大會戦は、纏足女の老年組が部隊長格で先陣を承り、第二陣は中年新造組、豫備隊として斷髮娘子群が控へて居る。

女同志はさすがに手出しはしないが、口合戦にかけては落雷以上の大騒動が展開される。この鬭争は双方譲らず長期戦となるが、これが何によつて解決されるかといへば、結局ダラダラ試合となり、飯時になれば空腹には勝てないと見えて、三々五々と去り、残るものは不用になつた棒切と鼻紙ばかり。

第三章 拜金の國支那

一、銀、銀、銀

有史以來五千年、支那人は政府の保護や、その恩恵による安居樂業の時代は殆んどなかつた。内憂外患、匪賊の掠奪、天災地變、惡疫の流行等、彼等はあらゆる苦難に虐げられて來た哀れにも弱い國民である。

彼等には、自分は自分で護る以外他に依存する方法はない。それが今日、彼等をして極端な個人主義國民にデツチあげてしまつたのである。

「他人は他人なり自分は自分」と、かうした觀念に徹底した人生觀をもつやうになつたのは、國情と環境のしからしむる處で、それが親から子へ、子から孫へと傳へ傳はり、年代を経るに従つて頑固に焦げついて、その結果が今日のやうな個人主義の權化となり、極端な拜金宗とな

つたのである。

西にユダヤ東に支那、と拜金宗の二大本山が、洋を東西に分つて相對し、世界至る處ユダヤ禍を受けない處なしといはれると共に、世界至る處南京蟲と華僑の居ない處はない。

銀、銀、銀、拜金支那の銀こそは、彼等の命であり、命にもかへ難きものは銀である。死に追ひ込む戦時の徴兵も、「好人不當兵（ハインツトレンヂン）（立派な人は兵隊にならぬ）」の支那では銀によつて免れることが出来るし、首の素つ飛ぶやうな重罪人も銀さへ出せば救はれる。正に銀は支那人の命であり、彼等の生命は銀である。

かういふ觀念によつて銀を欲する支那人が、銀を得るためには、その手段を選ばないのもまた當然といはねばならぬ。

無産支那の特長といはれる忍耐心、粗衣粗食に甘んずる勤儉心、一旦握つた銀は容易に吐き出さない貯蓄心など、みなこの觀念から生れた彼等の特長である。

支那が海外に送つて居る華僑の數は、現在殆んど八百萬に近く、それ／＼成功の域に達し、民族的發展を遂げつゝあるのも全くこの長所に負ふものである。

されば、彼等は何を目的にこれほどまでに眞剣に働くか、日本人、歐米人、支那人とそれぞれその目的を較べて見ると、

日本人——一、國家のため

二、名譽のため

三、子孫のため

歐米人——一、安定のため

二、贅澤するため

三、老後のため

支那人——一、良い女をもつため

二、甘いものを食べるため

三、立派な葬式をするため

右のやうに日本人が滅私奉公、子孫繁榮を念願に孜々として働くに反し、無産支那が女のためとか旨いものを食べ、立派な葬式をするために働くなど、徹頭徹尾自己本位に終始し、ある程度の財を得れば、殆んど別人の様な享樂生活に入り、贅澤の限りをつくすといふ有様である。

近代支那が、新生活運動で生活の改善を奨励し、享樂の自制を強要した事は衆知の通りで、支那の持てる人々にとつては、相當脅威となつて居るが、徹底した個人主義の彼等にすれば、そのいらざる御せつかいは、この上もない有り難迷惑なことである。

彼等にすれば、自分の銀で自分が勝手に享樂するのだから、敢て他の干渉を受ける必要はない。折角一生懸命働いて、愈々享樂が出来るいふ身分になつて、思ふ存分贅澤が出来ない等といふそんな不合理な話はない。もしそれが許されない位なら、銀は何の價値もない一塊の土に等しいものではないか、何を目的に働き、何のために苦しい思ひをして來たか、これほど判らない話はない。といふ風に考へて居るから、後半生の享樂を目標に、前半生を殆んど牛馬のやうに、側目もふらずに働き続けるが、その間に於ける彼等は、全く銀の亡者となつてしまつて居る。

ところが、目的の銀を得て愈々享樂生活が出来るといふ時の豹變ぶりは、チーキルとハイドのやうに全く別人の感がある。さうして彼等は、享樂の限りをつくして人生の快樂を満喫し、尨大なる葬式金を残して一生の幕を閉ぢるのが常である。

昭和四年十月、厦門アモイから臺灣へ渡る船中で、金密輸の一支那人が、厦門税關アモイに捕つたのを目撃したことがあつた。

この船の二等室は、吾々日本人二人とその支那人一人で、愈々出帆するといふ間際に、外支人税關吏の一隊が、ドヤ／＼と船室に侵入して來た。

直ちに支那人の旅具検査を初めたが、既に支那人の面上から血の氣は失せて土色のやうになつて居る。トランクその他を探して無いと見た外人税關吏の命によつて該支那人の身體を調べようとする、間髪を入れず、脱兎のやうに上甲板へ逃げあがつた。

ソレーツ！といふので税關吏の一隊も兎を追つかける獵師のやうに總追撃、やがて暫くは上甲板に追ひつ追はれつの鬼ごつこを展開した。

逃げおほせないことが極めて明瞭な船中にも拘らず、何故彼はこの非常識を敢てしたか、支那人の銀に對する心理を認識しない人々には判らない。即ち彼等の銀に對する執着は、常識では割りきれない銀亡者である。だから、むざ／＼没収される事は死よりも酷ツラいことで、命にもかへ難い銀を没収される！といふ恐怖心から常軌を逸して本能的に、船の中をグルグルと逃

げ廻つたのである。

だが然し、極めて狭い船中であり、而も多勢に一人では、この悲喜劇の結果は極めて歴然、船首に追ひ詰められて、あはや捕まらうとするその瞬間、非常識にも、思ひきつて身を海中に躍らせた。然し、この大膽にして見事なダイビングも悲しいピエロでしかなかつた。水泳の心得がなかつたのか、それとも金の重味でか、しばらく経つても海面に姿を見せない。税關吏の一隊もボートに乗つて、今か／＼と待つこと久し、漸くにして浮び上つて來た時は、名も土左衛門と改められて居た。

早速醫者の手當を受けたが、時間が早かつたから蘇生したであらうことは想像出来る。またどれだけの金を持つて居たかは、既に船が岸壁を離れつゝあつた際であつたから確かめることは出来なかつたが、その時船まで見送りに來て居た柏洋行旅館の客引の話によると、當時の金相場は、日本の方が約一割弱高い頃で、慾に目のない彼等が、一萬、二萬といふ金の伸棒を臺灣へ向けて運搬して居た。一萬圓を携行しても、往復二日で九百圓の純益をあげ得るとすれば、手輕で骨が折れず、これほどボロイ商賣はない。

今度の場合のやうに、密輸者がもし税関で発見された時は、勿論没収されるにしてもその全部ではない。支那海關の規定では、これを三分して、一を密告者に賞與し、一を税關收入とし、一を密輸者に返すことになつて居る。だから、密輸者に金を賣つた地金屋は、賣ると同時に税關に密告して、犯人が捕つた場合は、その三分の一、即ち一萬圓で三千三百餘圓の賞金を得ることになる。この哀れなピエロも、強慾なる地金屋の密告で捕つたことはいふまでもない。

また中野江漢氏から聞いた話であるが、ある河で舟が顛覆して、今にも溺れさうになつて居る船頭を、橋の上の通行者が、サー大變！と繩を投げ與へたため、藪をも掴み度い船頭は夢中でその端にしがみついた。ところが、橋上の通行者は下に對つて三本の指を示した。三元くれるなら繩を引きあげて救けてやるがどうか、といふのである。これに對する返事は上に對つて二本の指を出した。いま將に溺れやうとする命の瀬戸際に二元に負けとけ、それ以上なら殺せといふのである。この押問答は兩々譲らず、遂に妥協の餘地なく通行者は憤然繩を捨てたため、船頭は力盡きて溺死してしまつた。して見れば、この船頭の身體は二元と三元の中間だけの値打しかなかつたことになる。

ところが驚くべき事實は、死體検査の結果左手は繩の端を掴み、右手には三十元の現銀をしつかり握り締めて居たといふことである。

この話は筆者が實見した理ではない。單なる受け賣りだから、その眞偽は保證の限りではないが、彼等の銀に對する執着がどんなものであるか、といふことを知るには十分な一つの例證である。

また、支那人は生れて三日目に産湯をする風習があるが、湯を入れた盥の中には、親兄弟は勿論、親戚知己に至るまで、將來の幸福を祝ふため、各自思ひ／＼に銀貨を投げ入れて、赤ん坊に銀の産湯をさせる。この銀貨はすべて産婆の收得となるが、その銀貨が多ければ多いほど赤ん坊の將來は幸福といはれて居る。即ち祝つた人々は赤ん坊の幸福は何より結構なことがあるし、産婆も全部の銀が貰へるから多いほど結構、第一赤ん坊自身が幸福になるといふのだから三方の喜ヨロコビびと言ふ理である。

これから見ても、支那人は生れながらに銀の産湯を使い、死ぬまでの一生を銀、銀、銀に終始する。

一、銀が命か命が銀か

銀を一番よろこぶ國民といへば、印度、メキシコ等數多いが、お隣りの支那人は特に銀を崇拜し、執着をもつところ銀の亡者とまで極言される國民である。

支那の家庭を見ると贅澤な調度品は大底銀の裝飾が施され、吾々が金を崇ぶ以上に、銀は支那人にとつて無上の寶とされて居る。

支那は悠久五千年、支配者の興亡常なく紙幣の價値は殆んど期待することが出来なかつた。されば現銀を蓄へる以外安全な蓄財の方法はなかつたのである。

然し、いくら現銀を蓄へても、古來支那では権力者の強制徴収があつて、一種の強奪行爲が絶えず繰り返されて來たから、身の安全を計る爲には應分の獻金を餘儀なくせられて來た。従つて民衆は出来るだけ貧乏を装ひ、地下に銀壺を埋めたり、壁の間に現銀を塗り込んで財産の隠匿に努めて來たのであつた。

數年前のリースロスによつて斷行された幣制改革で、支那大衆の命にもかへ難い現銀引揚げを命ぜられ、吃驚仰天したのは哀れ弱い支那の大衆であつた。無理無態に現銀を紙幣に代へられた民衆の不安と苦痛は想像に餘りあるものであるが、當時人氣の絶頂にあつた蔣介石の統制力によつて中支、西南方面から、相當多額の現銀引揚げに成功したことは、支那大衆が如何に蔣介石を信頼したか、そのプロメーターと見るべきものである。

それでも、あれほどやかましかつた現銀引換命令にも拘らず、巨額の現銀が地下に隠匿され、或は奥地に逃避行し、蔣政權に信を置かない者は盛んに外貨買や、外國銀行に預金替して財産の安全をはかるなど、當時慌だしい情勢が隨所に見られた。

幣制改革直後、上海に於ける銀相場は現銀一元が、一元三十仙の紙幣に代へられ、當時日本の潰し相場が一圓五六十錢程度だつたので盛んに日本向け積出され、今まで地下に隠匿された現銀が、極秘裡に次から次へ地上に現れ、上海や北支に於ける銀狂躁時代を展開、銀の暴落によつて輸出が幕となるまでの四ヶ月間、國民政府の嚴命によつて、あるべき筈のない現銀が、泉の水の涌くやうに地上に現れ、驚くべき巨額の現銀が、取引されたのであつた。

一元銀貨一枚の重量は凡そ八匁弱で、紙幣にすれば百元、二百元を藁口に収めることは何でもないが、僅か一元銀貨十枚は、嵩からいつても、重さからいつても、殆んど仕末に困るほど厄介千萬なものである。殊に現銀には約二%の贋ものがあつて、馴れない人々は、大抵掴まされる。

贋造銀貨は鉛の上に銀でメツキされてあるから、重量や外觀だけでは何人も判別することは出来ない。普通支那ではカウンターの板にブツつけて、その澄んだ音色で識別するやうになつて居る。また正しい銀貨には必ず錢莊の印がベタ／＼と捺してあるのが普通である。

一元銀貨に限らず小洋や紙幣といへども、餘ほど注意しなければ贋ものを掴まされる。掴まされた者は、いま／＼しくて堪らないから、如何にかして掴ませた人種即ち支那人に掴まさうと、良い鴨を物色するが、ドツコイ支那人は、贋物に對しては生れながらの刑事眼を備へて居るから、安々と掴むやうなボンヤリは一人もない。それかといつて、いくらでも掴む何の罪もない日本人に掴ませることは良心が許さないから、捨てるにも勿體ないこの厄介ものは、何時までも机の奥で癩の種となつて居る。

然し、一旦掴んだ贋物でも、物によつては半額を損する覺悟なら買つて行く支那人があるから何といつても支那は謎の國である。この支那人は、半額で買つた贋物を次の馴れない鴨を見つけて掴ませることによつて確實に十割の利益をあげるのである。だから支那の贋造紙幣は、五割と十割の中間値を保持しながら、何時までも通用價值を維持し、従つて根を斷つやうなことはない。

あれほど大衆の信頼と支持を受け、今一步で全支統一の完成を思はせた蔣政權が、支那大衆の怨嗟を買つたのは、英支合作の幣制改革によつて命から二番目、否寧ろ命よりも大事な現銀を紙幣にかへられたことで、蔣政權の太鼓判の保證も、支那事變の進展と共に蔣介石と抱合心中の危機に直面し、戦禍に塗炭の苦を括めると共に、現銀の代りに一片の紙を掴まされた支那大衆が、蔣介石を呪ふのも當然である。この怨みだけでも蔣政權の前途は暗澹たるもの、既に蔣介石は抗日支那の蔣介石であつて、支那の蔣ではなくなつてしまつた。

支那事變始まつて以來、蔣政權の財政部が總動員して、財政經濟對策中特に爲替に全力を注ぎつゝあるのはそのため、今日までの處、一時は對英二ペンス臺まで崩落したこともあつた

が、どうやら法幣がまだ一片の紙とならず、安いながらも爲替を維持し得るのは、商取引が死滅といはぬまでも極めて尠く、爲替の需要が殆んどないからで、財界の活動が復活して來るに従つて種々の無理が現れ、法幣が第一次歐洲大戰當時のルーブルやマークの轍を踏むことは想像出來る。

今や蔣介石に對する民衆の信頼は完全に失はれ、次第に愛國心の缺如となり、北支、中支の新政權も汪精衛の中央政權合流によつて、こゝに名實共に中華民國政府が出來あがるに及び、曾て奥地に逃避行した現銀のやうに、蔣政權の運命は奥へ奥へと逃避行を續けて居る。

三、未だ醒めず華僑抗日の夢

支那事變渦中、抗日支那の原動力として一役を演じて居るものに「華僑」がある。

華僑とは、海外にあつて労働もしくは商業に従事して居る支那移民の總稱で、その數は、一九三四年の南京政府僑務委員會調査の七百八十二萬餘が、比較的信憑するに足る數字といはれて居る。

て居る。

南洋華僑は、世界華僑の約九割を占め、總數凡そ七百萬人といはれ、今度の支那事變中、最も抗日援蔣に血道をあげた排日華僑の本場であつた。

この南洋華僑七百萬人を居住地別にみると、

タイ國	二百五十萬
英領マレー海峽植民地	百七十萬
蘭領印度	百二十萬
香港	八十二萬
佛領印度支那	三十八萬
ビルマ	十九萬
澳門	十二萬
フィリッピン	十一萬

となつて居るが、これ等南洋華僑は、殆んど南支、殊に廣東、福建省出身者がその大部を占

めて居る。

華僑の送金額は毎年二億元を越えるといはれ、その他、支那本國に於ける投資、公債の引受け、義捐金など、彼等の協力は何といつても大きなものである。厦門大學フモイの如きも、一華僑がポーン！と投げ出した金で建設されたといはれ、殊に輸入超過に悩む支那の外貨獲得にはなくてはならない經濟力となつて居る。

海外移駐のトップをなすタイ國の華僑等は、何を目的にタイ國に入込んだかといへば、彼等の最も興味をもつたものは米穀である。先づ農産物を獨占して經濟界に覇權を樹てた。それから造船、製材、製革、セメント等あらゆる方面を牛耳つて居る。殊に米は支那人の特性ともいふべき投機心の對象となり易く、その騰落は彼等の經濟力に左右されるといふ有様である。タイ國商人の手を通じて農民に前貸し、粃米を安價に集荷、國民の無智に乗じて精米業を占斷し、精米は勝手な値段で國內に販賣、または輸出する。また一坑夫から借區して後には錫の大鑛業家となつて居る者も尠くない。彼等は同宗教と同種族とから全く同化し、現在では支那人の子孫とタイ國人との判別が出来ないまでに同化してしまつて居る。

支那事變が起つて以來南支方面から、蔣政權の宣傳隊が潜入して日貨排斥に狂奔し、華僑の生命とする日貨取引停止を強要し、中には耳、鼻を削ぐなどの直接行動に出づるものさへあつた。購買力の低いタイ國人にとつて日貨は全く必需品であつたから、排日貨で困るのはタイ國人であり華僑自身であつた。その間にあつてタイ國政府は日本との友好關係を忘れず、蔣政權から伸びた魔手を斥けて局外的立場を守り、不良華僑に彈壓を加へたことは衆知の事實である。

廣東と華僑、廣東と國民政府、華僑と國民政府といふ具合に此三者の關係を調べて見れば、それこそ密接不離の因縁關係が判つて来る。即ち、孫文の革命は廣東を母胎として起つたことは衆知の通りで、國民政府要人の多くが廣東省出身者であり、同じく廣東を郷里にもつ華僑とは友人知己は勿論、イトコもあればハトコもあるといふ理で、孫文が廣東から革命の烽火を擧げた時の軍資金等も、その大部分が華僑によつて賄はれたことはいふまでもない。それが孫文から蔣介石へと傳はり、南京政府の全盛時代から斷末魔の重慶政府へ、兩者の關係は持續し來つて、今度の支那事變に於ける抗日支那の有力なる財政的救世主として、排日の一役をつとめて來たことは衆知の事實である。

彼等の今事變に於ける援蔣排日の數々は枚舉に遑がないが、その重なるものを擧ぐれば

一、昭和十三年末蔣政權政務委員會の發表によれば、支那事變以來華僑の寄せた援蔣贖金は總額一億元に達した、といふから、その後のものを合すれば相當尨大なものであることは想像に難くない。

一、日貨は南洋華僑の生命であるにも拘らず、日本品不買、日本商品の積戻し、對日取引中止、對日本人不賣を實行した。

一、支那苦力の日本品荷役、邦人鑛山の勞働ボイコットの敢行。

一、邦人銀行よりの預金引出し。

一、邦人に對する借家立退要求。

一、日本商品の廣告取扱ひ拒絶。

二、排日デモ。

等、等南洋隨所に排日風景が繰り擴げられたことは、吾人の記憶に新なるところである。

これほど排日に狂奔する華僑といへども、支那事變の歸する處、即ち重慶政府の既に西山に

あり、援蔣抗日の燒石に水なることは百も承知して居るが、扱一對日妥協、援蔣打切りといふことは同郷關係の切つても切れない因縁關係があるから、急速な期待はかけられない。

それでも、重慶政府の臺所は苦しくなる一方、窮すればするほど金穴華僑に依存する。華僑は衷心から愛國公債に應募する考はないが、應ぜねば名分的に祖國に申譯がないといふ立場にあつて、いはゞ愛國面子に死金を使つて居るといふ理である。

全世界を跨に雄飛して居る華僑等は特に理材の道に長け、また國際情勢や經濟にも達して居るから、無理な募債に償還の目當てのないことは百も承知して居る。それでも郷土可愛いさの餘り應分の獻金をなし只管廣東、福建の安全を祈りつゞけて來たのであつた。

ところが、「情ないぞえ、そりや聞えませぬ蔣大人！、廣東、潮州、仙頭、廈門、海南島、南寧と次から次へ先祖のお墓を人手に渡すとは何事ぞ」……と泣ごとを並べても追つつかない。援蔣抗日によつて華僑等の得たものは資金の潤渴と事業不振、それから郷國の焦土化の三つの幻滅とは餘りにも情ない。

その上國民黨の元老汪精衛は廣東に和平救國の第一聲を擧げ、第二、第三の聲明は蔣介石を

始め、援蔣一派を奈落の底に陥れ、中央政權の成立によつて華僑の迷夢は愈々ドタン場まで追ひつめられてしまつた。

南洋華僑と汪精衛とは、蔣介石以上に深い因縁關係にある。即ち孫文が東京で革命畫策中、三民主義の宣撫使として南洋に赴いた人こそ彼汪精衛であつたのである。

それ以來汪と南洋華僑とは特別の關係にあり、新政權の樹立後に於ける彼等の動向こそ刮目に價するものがあらう。

華僑の南進は、發生的に見れば清朝の苛斂誅求からの逃避行であつた。清朝時代に於ける官僚腐敗、土匪横行、軍閥横暴、商産業の無庇護など種々の惡條件が、彼等をして樂土を求めて海外流離の生活を餘儀なくさせたのである。

試に世界輿地學社發行の本國新地圖中の「中華國恥圖」を開いて見れば、華僑の最も多いタイ國は勿論、英領マレー海峽植民地、安南（佛領印度支那）、蘭領印度、香港、ビルマ等全華僑の九割を占める地方は、曾ては自國領土となつて居るから、支那人に言はすれば海外移住とはいへない理である。

下等動物的蔣政權の糧道を斷つべく作戰されたのが華僑の墳墓の地たる南支一帶の占領であつた。

パイアス灣上陸以來僅か十日にして南支の中心、國民政府誕生の地であり華僑の墳墓の地たる廣東城頭高く日章旗を翻した皇軍の神速には、全世界は更なり、蔣政權の驚愕は言語に絶するものがあつたが、それにも増して周章爲す處を知らなかつたのは、彼等華僑そのものであつた。それは廣東が彼等の本籍地であり、抗日蔣政權援助も、故郷安全を希ふ一念の現れに外ならなかつたのである。

抑も、廣東人は支那人中言語、體質、思想、風習の上に著しい特色をもち、移住的進取の氣象に富み、その上、支那に於ける最初の西洋文明を吸収した關係上、思想的にも因習的でなく解放的で、新思想を受けて海外に華僑を送り、國內に於ては國民革命の推進力となつたほどである。

よく上海などで日本人と間違へられた廣東人が、時々抗日支那の槍玉にあげられて居ることを見るが、廣東人はそれほど日本人と類似點が多い。彼等の特徴は言語荒く、動作は敏捷、氣

性鋭く勇敢であると同時に剛情で一本氣な處など、どの點から見ても支那人より日本人の方に近い。支那を認識しない人々に對つて、廣東人が日本人と間違へられて抗日支那のリンチを受ける等といつても、一言話せばすぐ判るだらう、と思ふかも知れないが、支那は一步他省に入れば言葉の通じない國だ。而も日本語と廣東語を聞きわける支那人は百人に一人か二人位なもの、といふほど支那は廣い國であり、何といつても謎の國である。

華僑の本籍地攻略は廣東だけにとどまらず、^{フットク}仙頭、^{フモイ}廈門、潮州、海南島、南寧など、矢つぎ早に日章旗が翻るといふ有様で、親戚や知友を多く持ち、特に墓地を何より大切にする彼等にとつては、忍ぶべからざる苦痛であることはいふまでもない。彼我顛倒して、若し我々在外居留民の故郷、即ち東京人が東京、九州人が九州を敵軍に蹂躪されたら……と假想するだけでも晏如たり得ない苦惱は誰れしも變りがない。

支那に浙江、廣東の二大財閥があるが、廣東財閥はいふまでもなく南洋華僑をバックとした經濟勢力で、これが支那の政治、經濟上に及ぼした影響は、殆んど支那を牛耳るとまで言はれて居る。

南洋華僑の多くはその地の土民と結婚してその地を永住の地として居る。あらゆる生存競争に有利なコンディションを持つ彼等は、營利のために歐米人の下に孜々として働き、如何なる屈辱をも甘受し、支那人特有の忍耐心や、粗衣粗食に甘んじて蓄財に精進、本能的商賣上手などによつて着々地歩を固め、而もこの大勢力を政治的方面に利用することなく、只管實利主義に終始し、政治的植民地の代りに經濟的植民地を築きあげ、その數既に八百萬に近く、世界ユダヤ禍と共に、世界到る處南京蟲と華僑の居ない處なし、とまで言はれる現在となつたのである。

抗日國民政府崩壞の前途が極めて明瞭なるにも拘らず、廣東、武漢陷落後、七百萬南洋華僑は日貨排斥、打倒日本の狂躁曲を奏で、なぜ蔣政權と共產黨の操る糸に踊り續けるか、國民革命以來國民政府と因縁淺からぬ南洋華僑が、何時まで魔酒に酔ひ迷夢を續けるか、彼等の商賣は日貨であり、日貨は彼等の生命であるにも拘らず、迷夢未だ醒めず蠢動を續けるは、愛國心の發露ではなく、國共の惡辣なる逆宣傳と煽動や威嚇に乗せられて居ると見ねばならぬ。

然し、彼等の援蔣抗日も、現實に悟い彼等の援蔣沙汰は、現在殆んど積極性を失ひ、抗日獻

金も次第に減少の一途を辿りつゝあることは注目に價する。彼等の援蔣ルートは次から次へ攻略され、殆んど關門といふ關門は完封されてしまった。これはまた、蔣政権が躍氣となつて戦勝確保を放送して居たものであり、彼等の間にも漸く今次事變の意義を認識しつゝある傾向が窺はれる。

この大勢力が因縁淺からぬ汪精衛の中央政權に對して如何いふ態度に出るか。

パンコック發電の報ずる處によれば、汪派の某氏は『南洋華僑の間に汪精衛の支持者が意外に多いのを發見、和平運動は、近く華僑の間に澎湃として起つて來るだらう』と自信あり氣に語つた、といふことであるが、この大勢力の今後の動向こそ期して待つべきものがあらう。

四、役徳王國

支那の人々に對つて、「コミッションは、贈つた方も貰つた方も罪になる」、と日本の話を聞かせても、世にも不思議なことがあるもの哉！といふ顔をして、いくら日本でも、自分の金

を贈與するのに罰せられる理由はあり得ない。といつて無條件には信じない者が多い。已むを得ず日本の「贈賄罪」を説明する……刑法第九十八條を見れば、「公務員、又は仲裁人がその職務に關し、賄賂を收受し、または之を要求し、若しくは約束したる時は三年以下の懲役に處す。因つて不正の行爲を爲さざる時は、一年以上三十年以下の懲役に處す。前項の場合に於て收受したる賄賂は之を沒收す。若し其の全部又は一部を沒收すること能はざる時は、その價額を追徴す」この賄賂罪に於て、賄賂を受ける方を收賄罪、次の第九十九條の贈與する方を贈賄罪と區別してある。贈賄罪の條文には「會社員、又は仲裁人に賄賂を交付し、提供し、又は約束したる者は、三年以下の懲役、又は三百圓以下の罰金に處す」とある。以上の法律を聞かせても、それは餘りにも酷だ、野蠻な話だといつて頭から野蠻國扱ひにするほど、支那人のコミッションは常識である。

支那財界の大御所で、國民政府臺所の賄ひ役たる宋子文が、アメリカから購入したる百臺の飛行機から百五十萬元のコミッションをせしめたため、蔣介石に嫌味を言はれたのが氣にくはぬといつて、財政部長の椅子を兄貴の孔に譲つてサツサと外遊したことは餘りにも有名な話で

ある。

かういふボロい役徳でもなければ、國民政府が天下とつて僅か十數年間に、政府要人の億萬長者が十指を越えるといふ數字は何處からも出て來ない。

支那の財界は何といつても宋と孔の天下、孔祥熙は行政院長といふ他位を逆用して、上海で銀の買占めを行ひ、香港では外國爲替を買集めるといふ有様で、この義兄弟は何れ劣らぬ同穴の貉、宋子文と美齡とが連名で、孔の夫人たる姉に對つて、餘り慾ばらないで一億元でも獻金したらどうか、と申入れたといふ話もある。

政府要人がこの通り猛者揃ひだから、一般大衆も敢て人後に落ちない役徳支那だ。されば拜金支那は地獄の里も金次第、コミッション無しで何の己れが櫻かな、一にもコミッション、二にもコミッション、遂に支那は「役徳王國」の名に叛かないものとなつてしまつた。

役徳支那人で、コミッションなしで働く者があるとすれば、それこそ聖者か馬鹿である。だが然し、在支十餘年、筆者の見た範圍では、この聖者にも馬鹿にも、曾て拜顔の光榮に浴しない處、全支は擧げて役徳王國の名の示す通りである。

數年前帝人事件で、與へた方も貰つた方も起訴された話を聞かせたことがあつたが、支「そんなことが罪になる筈はない、勿論無罪だ」と斷じ、日本の無罪判決に先だつ一年前、支那人は確信を以つて無罪判決を與へて居る。

賣動事件にしても、鐵道疑獄にしても、支那人から見れば蚤の擧丸以上のものではない、而もそれが政治問題にまでなる島國日本のセセコマシさは、大陸人には一種不可解なものであらう。

支那事變中にも、支那軍の給料不渡りは御座なりで、支那の政府や督軍が一ヶ師の給料を全額渡しても、師長二割、旅長一割五分、營長一割といふ具合に、それ／＼分に應じてピンを引くから、肝腎の兵士に渡る時は三分の一位になつたり、甚だしい時は給料不渡りとなることもある。

また師團にしても、平時五千の兵士を養ふ必要はないから四千人位で間に合はせて一千人分の入費を失敬する。若し檢閲でもあれば、一日四五十仙位でルンペンや乞食を狩り集めて俄兵隊で間に合せる。

かういふことは、從來支那では極めて普通に行はれ、上官も知つて知らぬふりして通つて來たが、滿洲事變以來裁兵問題がやかましくなつたため、從來のやうな「馬々虎々」では通らなくなつたらしい。

日本の内地を旅行して、一番頭を悩ますのは旅館の茶代である。近年目醒めた業者が段々茶代廢止をするやうになつて大助かりであるが、支那では何から何までコミッションが物をいふのだからやりきれない。

支那のボーイ（下男）でも、阿媽（女中）でも、買物をすれば必ずピンを引く。米や醬油、炭や砂糖に至るまでチビ／＼失敬する。全く油斷も隙もあつたものではない。

支那の便器は、一寸小火鉢のやうな恰好で、何處にでも持ち運び出来るやうになつて居るが、毎朝七時頃にモードン屋（糞尿汲み）が掃除に來ることになつて居る。

數年前のことであつたが、文路から吟桂路に轉宅した時、早速モードン屋を呼んで月極めの交渉をしたら、モ「一ヶ月料金一元で、コミッション六十仙呉れ」といふ。隣家に聞いて見ると、コミッションは町内全部四十仙といふ事であつたから、その旨モードン屋に話したら、モ「普

通四十仙であるが、貴家は家が大きいから六十仙が相當だ」といふ。家は大きくても小人數だから一般並で良いではないかといつても、家の大きいのは金持だから六十仙が至當だといつてなか／＼承知しない。

癪にさはつたから嗷鳴つたら歸つてそれきり掃除に來ない。いくら小人數でも、小さい便器では三日もすれば仕末に困る。山吹の水は滿々として堰を切らんとし、黄金の山は身近に迫つて脅威を與へる。それかといつて出るものは遠慮がない、これでは全く千早城だ、かうなると金錢等は問題ではない、我慢にも辛抱しきれず、拜み倒して六十仙を拂ひ臭い問題を解決したなどは、糞いま／＼しいコミッションもあつたものだ。

道路掃除の工部局人夫なども、盆、正月、双十節などには必ずコミッションを請求（貰ふに非ず堂々と請求）する。それが習慣だから與へない理にはいかない。

支那のコミッションは権利であつて、日本の袖の下のやうな生柔しいものではない。堂々請求する権利と心得て居る支那は、何といつても役徳王國の名に叛かない。

五、昇給後却つて怠ける支那人

凡そ俸給生活者にとつて昇給ほど待望の福音はあるまい。されば昇給の一と聲は、將に迦陵^{ガラク}嘯^{シヤウ}の聲のやうに聞ゆるのも當然である。第一身分があがるし顔がよくなる、生活は樂になるし世間態も良い、殊に同輩を追ひ抜くスリルなどは、恐らくサラリーマンにのみ與へられた快味であらう。

それほど嬉しい昇給なら、その喜びは洋の東西によつて異なるべき筈はないが、昇給後に於ける反響が、その國民性によつて種々違ふからをかしなものである。さればこれを日本人、歐米人、支那人によつて較べて見よう。

日本人——士は己を知る人のために死するの覺悟をもつてこれに報ゆる。

歐米人——昇給された金額分だけを餘分に能率をあげて責任を果たす。

支那人——昇給直後はよく働くが、働けば次の昇給の機會を與へられないと考へて怠ける。

支那人は、昇給直後は別人のやうに働くが、時日を経るにつれて段々怠け出すのが普通である。なぜ段々と怠け出すかといへば、昇給直後によく働くのは、昇給すればこんなに働くぞ、といふことを示し、それから次第に怠け出すのは、「昇給しなければ働かない、能率をあげようと思へば昇給せよ」といふ一種のゼスチュアーに外ならぬ。

これなどは支那人の所謂「理」によるもので、彼等の考へ方は、働く者に對しては昇給せずとも能率があがるから昇給の機會が與へられない、といふとんでもない持論をもつて居る。又怠けてさへ居れば能率をあげるため昇給されるなどと手前勝手な屁理窟から割り出して居る。

だから彼等にすれば、怠けることは昇給の機會を得ると同時に身體も樂で、一石二鳥の良策だ、といふ風に解釋をくだすのである。

支那人の處世訓は、すべてそれが正しいと否とに拘らず、一つの理によつて善處することを忘れない。邦人から考へると、その「理」が全く屁理窟で問題にならない、猿の淺智慧式のものであつても、彼等にすればメンと眞面目な考へだから如何にも仕末に負へない。

また支那人に一つの仕事を與へて、全部完成したら十元やるといへば、全部はとても難しい

から半分だけにして五元呉れ、といふやうなことは、在留邦人の平常に見聞する處である。

六、車掌は稼ぐ

上海には極めて舊式な有軌電車と、マッチ箱のやうな無軌道電車があり、一階バスと日本では見られない二階バスがある。

自動車賃はどんな近距離でも一元、一寸遠い處は一元五十仙二元といふ具合に相當高いため、上海市民の足としては黄包車と共に、この電車やバスが一番廣く利用されて居る。

わが國の電車やバスは、乗車と同時に切符を求め、降り際に車掌に渡す規定になつて居るが、上海では買ひきりで渡すやうなことはない。ところが支那人車掌の中には、降り際にこの不要になつた切符をねだる奴がある。そうしてこの古切符は次の乗客に賣つて、その金額だけを失敬するのである。

車掌の考へ方は、租界電車は歐米資本によつて經營され、支那人を搾取した賣上利益は、す

べて歐米人の懐を肥やすものであるから、金持の歐米人を、これ以上儲けさすより失敬した方がましだ、といふ風に解釋して居る。

車掌に以心傳心ねだられた支那人乗客もまた、如何せ捨てるものなら與へた方が良い、といふより、歐米人の懐を肥やす位なら、寧ろ貧乏な同國人を潤した方が良いと、與へることを却つて快とする風が見受けられる。

支那人乗客にしても、平常歐米資本の支那搾取には根強い反感をもち、外資の獨善的横暴ぶりには心良からず思つて居るから、支那人の所謂「理」によつて、金持の歐米人よりも貧乏な車掌を救けることは、社會的に見ても決して悪いこととは考へて居ない。

歐米人にまで切符をねだるやうな頓馬車掌は一人も居ない。何故ならば、歐米人は車掌の以心傳心線に異状があるばかりではなく、時々、電車會社の御目付役が乗込んで居て、マン悪くねだる處を掴まつたが最後、笠の臺まで素つ飛ぶ危険がある。

ところが、外國人といつても日本人に對しては平氣で要求するから面白い。これ等は日本人を同國支那人と間違へる筈はない處を見ると、車掌に限り日支同視か、反歐米の共同戦線か、

何れにしても穢く車掌に關する限り歐米反對、日支親善である。

電車には極めて不意に外人の車掌監督が乗込んで、車掌の悪事や、不正乗客の檢札を行ふが、この場合に於ける車掌は、狼狽の内にも用意周到、要領よく新らしい切符と交換して、滅多に尻尾を掴まれるやうなことはない。

先天的に胡魔化すことの習性をもつた支那人は、判らないと思へば平氣で胡魔化す、近頃この種不正行爲が段々尠くなりつゝあるのは、蔣政權の新生活運動の賜といふべく、同じ車掌でも、バスの車掌は少しもねだらなくなつた處を見ると、それだけ自覺向上した事が判る。

第四章 桃源の夢は醒めず

一、苦力は人に非ず

外國人が支那の岸壁に着いて第一番に奇異な感に打たれるのは、動物に近い生活をして居る苦力の一群であらう。

自ら中華と稱し、自大自尊の國民政府は、領土的にのみ大きな支那を世界の大国と稱し、近代國家を以つて任じて居るが、今から十數年前までは公園入口の「犬と支那人入るべからず」の制札を甘んじて受け、現在も苦力と稱する一種の野蠻人を、近代都市であり國際都市上海の至る處に、支那の非文明を表徴するかのやうに、その原始的グロテスクな姿を知らぬ顔の半兵衛然と看過して居る。

如何に支那の大官要人等が、大国だ一等國だと自負しても、この動物的存在たる苦力群を人

間並に向上させない限り、支那は近代國家としての資格がない處か劣等人野蠻人と言はれても辯解の辭はあるまい。

清朝末期のグラ官どもが、自らの懐を肥やすことに汲々として、支那のあらゆる面目は失はれ、自主性獨立性の完膚なきまでに歪められたことに奮起し、その失權回復の手形を振出した蔣政權が南京に覇を唱へると同時に銳意國權の回收に乗り出し、國家的地位の向上に努力した結果「犬と支那人入るべからず」の制札も撤回され、その他ある程度の成績を挙げ得たことは友邦として大いに多とするが、内治的に意を用ひた新生活運動が支那の向上を阻害する苦力改善問題を除外した理由が判らない。

されば支那の野蠻人たる苦力とは如何なるものかと言へば、苦力の本場は山東省で、河北、河南から江蘇、浙江、廣東省に及びその數三千萬人に達すると言へば、この一單位丈で一獨立國家が建設される。

彼等は躍進支那に取殘された文明の落伍者で、支那の支關口たる上海その他の國際港にも、揮一つの素つ裸、跣足で、垢と油でドロ／＼のまゝ、遠慮會釋もなく横行し、牛馬の職場を天

職としてあらゆる下級勞働に従事して居る。

國際港上海、近代都市大上海に苦力群ほど不似合で、さうして不快な存在はなからう。それを放任する國民政府もさることながら、それを許す租界當局も當局だ、やれ近代國家だ、大使が交換された等と有頂天になつて居る要人等に、近代國家支那の一員たる苦力も近代人かと突込まれたら、それこそグーの音も出すことは出来まい。

いかなる時と場所を問はず苦力の原始的グロテスクな姿は許されて居る。在留邦人等は足袋一つ忘れて外出しても、日本人の體面を損ずると言つて、領事館警察からきつい御目玉を頂戴せねばならぬ。

普通の人が街角で立小便すれば罰金なしでは濟まされぬが、犬と苦力だけは巡査の持つて居る棒で擲つて相濟み、人間並の罰則は適用されない、これだけでも苦力は人間並に扱はれないことは十分に立證される。

苦力と雖も支那民衆の一員たるに異論を挿む者はあるまい。然し自ら文明人を以つて任ずる支那人に向つて、一、支那人は文明國人か。二、苦力は支那人か。三、苦力も文明國人かと言

よ三段論法を適用すれば苦力は文明國人でもなく、支那人でもない所屬不明の存在となつてしまふ。

この三千萬に達する所屬不明の苦力群が、吾等の同胞として東亞協同體內に嚴存する以上、吾等は苦力群を立派な同胞として、彼等の歸する處を明瞭にせねばならぬ。

支那は勿論歐米といへども、汽船の荷捌き、倉庫、土木、産業等すべて苦力なしでは動けない。彼等が大罷業を敢行すれば必ず成功する、それ程苦力群の支那に於ける存在は大きなものである。

ところがそれ程偉大な力を持つ苦力群と雖も、個々に考ふれば犬以上の待遇を與へられない。彼等こそは貴い筋肉労働の供給者として神聖なる職業にあるが、訴へる権利を持ちながら合法的に訴へる手段を知らない。宗教家と雖も苦力に對しては佛の慈悲の外に締出して居る以上、世に彼等を救ふ者はない。支那の宗教が下層を蔑視して彼等に及ばざるは、宗教の墮落を自ら立證するものでその使命を全うする所以のものではない。かくの如くすべての世界から締出しを喰つた苦力群は、已むを得ず自ら苦力哲學を創造して慰めて居るに過ぎない。

苦力群中最も組織的に統一されたものは上海に於ける黄包車ワゴンの車夫である。彼等の數は二萬五千以上に達し組合によつて一單位を形成して居る以上その統制力によつて、他に先んじて向上の先鞭をつけ、裸や跣足の蠻風を改善することは決して難しいことではない。然るにこの原始的な恰好で、凡そ彼等に不似合な上海の街を縦横に疾驅することを默認する等は當局の常識を疑はずには居られない。

蔣介石が支那の陋習打破に乗出し、新生活運動によつて生活の向上に努力し、お膝下の南京等では驚異的に改善の實を擧げ得たと稱して居るが、支那非文明のシンボルたる苦力に對してだけは何等對策を講じて居ない處に新生活運動の佛作つて魂入れずがある。これから考へても支那の當局が苦力群を度外視して放任することは、自ら文明國人と稱する支那人全體が野蠻人たることを甘受するか。苦力は支那人に非ずと強辯するか。何れにしても、哀れ憐い苦力群は人間並に扱はれない特殊の存在たることに間違ひない。

一、黄包車は支那の足

上海上陸第一歩、等しく一驚を喫するのは蟻の行列を髣髴させる黄包車(人力車)の氾濫である。

黄包車は一名東洋車(日本車)といはれその名の示すやうに日本が元祖で、明治時代に於ける日本は人力車全盛時代を現出したこともあつたが、時代の流れと共に西洋文明のスピード化に押されて、臺灣、大連以外の日本内地では殆んどその影を潜めつゝあるに反し、支那では労働賃銀の安い関係から、軽便で安直なこの黄包車が都會人の足として一番重寶がられて居る。殊に荷物携行の近距離などの用途しや、中流以下の人々の外出には無くてならない足となつて居る。

上海租界工部局の規定では半英里十仙(小洋)となつて居るが、時と場合、場所と相手次第では三仙でも五仙でもOKだ。

早朝マダムの市場買出しや、サラリーマンの出勤、通學兒童の送迎、その他商用、見物、訪問に至るまで、すべてこの手輕な黄包車がお供する。

黄包車といつても種々で、自家用の黒塗、黄塗、銀色等の高級車もあれば、營業用のポロ車もある。また同じ自家用の傭車夫にしても、單なる傭車夫もあれば、自分の持車を持つて來る便利な車夫もある。前者は月給二十元、後者は二十五元が普通相場となつて居るから、一臺の車の借賃は月五元の割合になるが、この安い月給で夜も晝も、兩租界から支那街へと終日走らせるばかりか、家に居る間はボーイ代りとして、家事萬端手傳ふ等は重寶な車夫もあつたものだ。

大上海中至る處黄包車の居ない處はない、一寸した盛場には數丁に及ぶ長蛇の列を爲して居る。何處から出ても、その瞬間には數臺から數十臺の黄包車群に包圍され、「乗らねば通さぬ」車の障壁が出来て進むことも出来ない、判然り「不用!」と呶鳴るか、一臺を選んで乗るまでは、いつかなこの圍みは解けない。

乗客の争奪は豫想以上に猛烈を極め、臨時に乗客獲得の市が展開され、普通一番安い値を唱

へた黄包車がその客を得ることになつて居る。

終日を殆んど牛馬のやうに働き続ける彼等の収入——筋肉労働の最も長い黄包車に報ひられる日收は、一日十四時間(午前三時から午後五時まで)を働き続けて平均一元五十仙程度と言はれ、親方(車の所有者)に借賃の八十五仙を拂つて、一日の食費十五仙程度を引いたその日の純益は五十仙以上のもではない。

また他の交代の一隊は午後五時から午前三時までの間を、親方に一日の借賃八十五仙を支拂つて働き続けるのが彼等の日課となつて居る。

一番割の良いのは彼等の上前を刎ねる搾取者だ、黄包車の親方ほどポロ儲けの獨善者はない。一臺の車から晝夜の二交代であがつて来る収益は一元七十仙で、黄包車百臺の所有者は、毎日百七十元の現銀が、「今日は」とも言はずに轉げ込んで来る。

支那は歐米人の搾取市場といはれ、例によつて搾取に一步も假借しない工部局は高い税金を課することに於ても有名であるが、然しこの高い税金を支拂つても、ガソリン代は要らず、馬料は要らず、車庫も要らない、たゞ安い修繕費だけで食費は自辨と來て居るから、その経費と

言つてもそれこそ小供の小使以上のものではない。勞資の社會相を如實に見せて、車夫の惨めさに較べて親方の懐は張裂けるほど膨張の一途を邁進する。

車夫が一月十五元を稼ぐためには、彼等の労働時間は一日十四時間、半ドンもなければ日曜祭日もない、降りしきる雨の日も、地軸を凍らす雪空も、炎天舗道を焼きつける夏の日も、開北から虹口へ、徐家匯から南市へと、東西南北乗客の意のままに、裸一貫跣足のまゝで、息も絶えだえに走り廻る。巡査に擲られ客には叱られ、トラックに跳ね飛ばされては路上に長々と延びて居る哀れな姿は、在留吾人の屢々見受ける路上風景である。

醉拂ひのアメリカ・セーラーに黄包車を顛覆させられて、おまけに散々叩かれて居る圖は上海夜の路上に屢々見られる。

意地悪の支那巡査から布團(客席用)を奪られて哀願して居る者もあれば、印度巡査にライセンスをヒツ割がれて立往生して居る者もある。殊に彼等の一番鬼門は棒を持った交通巡査だ、赤と青の信號を一寸見損つたが最後、棒は容赦なく頭上へ、背へ、尻へ飛んで来る。

黄包車生活者こそは全く牛馬と何等異なる處はない、彼等は車をひく爲に生れて來た機械だ。

食べたいものも食べず、慰安を他所に働き続ける彼等は、營養不良と過勞から次第に身體は瘦せ衰へ、衰弱は嵩じて病魔の虜となり、遂に働く氣力も失せて、この短い一生を働き続けながら枯木のやうに朽ち果てる。

黄包車短命！ 彼等の平均壽命は驚くほど短い、この短い命も金ゆゑ長い、僅か五仙か十仙の端金のために叩かれ鞭うたれ、「こゝで曲れ」、「間違つた豚！」と口穢く呶鳴られながら、客の意のまゝに走らねばならぬ生きた機械だ。

大の男が二人相乗で、へト／＼になるまで走らせておきながら、さて、それに酬ひられるものは僅か一人分にも足らない小さい銀を投げて行くが、正當な權利によつてこれを請求しやうものなら、銀の代りに鐵拳を與へる暴漢もある。

如何なる場合も黄包車の味方はない。何故なれば彼等は人間並に扱はれない人生の落伍者であるからである。

哀れはかない苦力としてあらゆる虐待に反抗の氣力も失せて、豚よ人非人よと罵られながら馬の職場を天職として、營養不良と過勞から心臓や肺を侵され、この短い壽命を儘く朽ち果て

る人生の落伍者だ、而も彼等の多くが生涯女も家庭も知らないとは、哀れ憐き者よ！ 汝の名は黄包車なりである。

三、強い婦人も金ゆゑ弱い

支那婦人の鼻柱の強さや、男性を尻とも思はぬ傍若無人な態度は、支那人の生活面を實見しない内地居住の人々にはとても想像も及ばない横暴なもので、丁度日本に於ける「亭主關白」を逆に想像すれば間違ひない。

それほど強い支那婦人といへども、銀がもの言ふ拜金支那の一員の悲しさ、「銀」の前には全く頭があがらないから不思議なものではないか。

支那の持てる家庭の内房を一寸覗いたゞけでも、銀にお辭儀した多くのお妾さんが同棲して居るがこれ等は強い女權が銀に負けた實證で、拜金支那では、妾は勿論、醜業婦や女中、了頭（奴隸）に至るまで銀に自由を奪はれた者の多いことは想像以上である。

古來支那の女尊男卑は衆知の事實で、女ならではの夜の明けぬことにかけては、世界中比類のない國といはれ、従つて女性の権力は歐米の男女同權など顔負けの形である。

支那婦人の纏足などを見たゞけで、彼女等を男子の玩弄物のやうに考へる人があつたら、それこそ認識不足も甚だしい。古來女性に口返答したり、鐵拳をふるふ等は男の風上にも置けない横道者と言はれ、絶対服従こそ男性の美德とするのが一般支那人の常識である。されば男に對する限り驛馬のやうな支那婦人を、殆んど猫のやうにおとなしくするものは銀！ 拜金支那は一にも銀、二にも銀と、銀さへあればわが世の春である。かう言ふ黄金萬能の支那なればこそ、親の光より銀の光で、男は多少低賤でも、銀の光で驛馬のやうな女性を自由にすることが出来るが、その反面偉人、聖者といへども銀のないのは首のないのと一般、婦人の前には頭のあがないのが支那の世相である。

拜金支那のあらゆる問題は銀によつて清算され、首の素つ飛ぶやうな關頭に於ても銀さへあれば容易に救はれる。一方に數十名の妾を擁して贅澤の限りを盡す金持があれば、反面、賽の河原の石ころのやうに、一生獨身を餘儀なくされる無産者もあり、就中乞食の多いことでは世

界中に比類なしとまで言はれて居る。

普通中流以下の支那家庭はおしなべて女性に権力のあることは上述の通りであるが、獨り支那の持てる階級の人々は銀の力で多くの妾を蓄へ、その多きを以つて持てる者の誇りとして居ることは衆知の事實である。而も鼻柱の強い支那婦人が、一旦銀で買はれた後の豹變振りは吾人の最も不可解とするほど従順しいものである。

支那の所謂「理」と「諦め」を完全に會得した支那のお妻さんは忍従羊の如く、その強さは何處にも見ることが出来ない。それこそ去勢された動物のやうに従順しくなつた彼女等の生活は、鶏舎に於ける一羽の雄を繞る群雌を見るやうに愛情を超越した吳越同舟が角突き合はずともなく一軒の家に同居生活に甘んじて居る。

わが國に於けるお妻さんといつても種々あるが、大抵のお妻さんは有閑婦人として外出好き、芝居映畫やデパート漁りを楽しみとして居るが、これは又地味な、殆んど尼僧に近い支那のお妻さんは極端な外出嫌ひだから、この點でも日支は對蹠的に相反して居る。

支那のお妻さんの生活は、全く浮世離れた尼僧を髣髴させ、殆んど幽閉に近い生活を甘んじ

て受けて居る。支那婦人の纏足などもその目的の一つは奔放な彼女等を如何に拘束するか、と言ふ外出禁止案によつて強要されたとも言はれて居る位である。

支那のお妾さんが、これほどまでに外出を嫌ふ大きな原因の一つは、必要以上に銀とお妾さんを持つて居る獨善者の御意にあることも亦見逃がすことの出来ない事實である。驛馬のやうな支那婦人を意のままに御する弗旦が、何故それほどお妾さんの外出を嫌ふか、即ち男は一日外で働いて身心ともに疲れて歸つて来るが、それを慰めるものは言ふまでもなくお妾さんである。ところがその肝腎な慰安が外出不在とあつては銀で買はれた意味ない理で、高い銀で買はれた玩弄物である以上、その御意のままにならねばならぬと言ふ「理と諦め」を判然り自覺して居る彼女等である。

彼女等の門外不出は、彼女等にとつても決して不合理なものではなく寧ろ願つたり叶つたりである。なぜならば、彼女等とても多分に女盛りの××××を、妾の數によつて割當てられる幾分、幾十分の一ではその青春を満されないものがあり、外出は猫に鯉節のやうな多くの異性を見ることは、目の毒にこそなれ何の益もないことで、萬一間違を起して、現在の幸福を失ふ

やうなことがあれば、それこそ後悔先に立たずの由々しき一大事である。

同じ女性を玩弄視する人種中にも、南洋方面の野蠻人は女を一種の奴隸のやうに勞働に酷使するが、支那人の女に對する態度は實に優しい限りで、中産階級以上の家庭に於ける婦人の仕事は殆んど皆無と言つても過言ではない。

近代支那の女性は、所謂宋美齡型を讚美して素足の流行時代を現出、婦人の街頭進出は著しく増加して新らしき女性時代となり、男性よりの解放を喧しく唱へて居ることは注目に價する。

蔣政權の新生活運動でも、積極的に生活の改善に乗出し、蓄妾廢止が論ぜられて居ることは衆知の事實で、支那事變前に於ける南京等は多くの官吏中、一人の蓄妾者もなかつたと言はれて居る。

殊に新らしき婦人團體の氣焔はもの凄く、これが着々實行運動に成功しつゝある次の時代には、拜金支那を吹飛ばして、名實共に婦人萬能時代を現出するかも知れない情勢にある。

四、哀れ法幣の末路

「法幣」は支那の通貨を言ひ、今度の支那事變以來蔣政權の運命を暗示するかのやうに、目下大海を漂ふ難破船を髣髴させ、その運命は日支は勿論、全世界注視の的となつて居る。

どれほど長い在留邦人といへども、それを専門的に研究した人でない限り、この「法幣」の種類を知悉して居る人はあるまい。それほど「法幣」の種類は多種多様で、その種類は五十種以上に及ぶと言はれ、比較的身元の確かなものは政府系の中央、中國、交通、中國農民の四銀行を筆頭に十二種内外で、警戒を要するものがザツと二十九種、小額紙幣九種、その他贋造紙幣の横行に至つては支那を知らない人々にはとても想像も及ばないものがある。

謎の國といはれる支那では法幣もまた謎で、たとへ贋造紙幣でなくとも、土地銀行の「法幣」は他省では通用しなかつたり、通用しても割引されたりするから「法幣」の取引には相當馴れた人々にとつても一通りや二通りの苦勞ではない。

これほど難しい支那紙幣出納の劇しい邦人銀行や商社などでは、不馴れた日本人では危険性が多いから、所謂「買辨」と稱する支那人出納係を雇つて居る。この「買辨」は幼少の頃より「法幣」に馴れ、贋造紙幣に對しては最も敏感な第六感を備へて居るから、如何に横行する贋造紙幣といへども絶対にこのトーチカを突破することは出来ない。

支那の通貨は紙幣でも銀貨でも所かまはず錢莊(兩替屋)の印がベタ／＼と捺してあるが、その印が多ければ多い程信用出来る。ところが抜目のない贋造通貨もまた錢莊不明の盲印が我物顔に捺されて居るから、結局馴れない者はどれが正貨か判断に苦しむ場合が多い。

かう言ふ危険性の多い通貨に對しては、取引する方もなか／＼不安心で、勢ひ神經過敏ならざるを得ない。さう言ふ不安から、紙質の新らしいものや、初見參の札、印刷色の一寸變色したものが支拂はれた場合は、他の安心出来るものと取替を要求したり、その場で附近の錢莊にもつて行つて兩替するのが一般であるが、それほど注意を重ねても不馴れの悲しさは、智者にも千慮の一失ありで、見事銀の代りに紙を掴まされることがあるが、掴れんだ時の氣持は内地居住の人々には想像出来ない不快なものである。

一度掴んだ贋造紙幣は、掴ませた人種即ち支那人に掴ませようとあせつても、ドツコイ支那人にはそれほど甘い鴨は小供にもない。といつて容易く掴む邦人に渡すことは良心が許さないから、最後の手段として金銭出納の劇しいハイ・フライヤ競犬場、支那賭博場等の票券購入に出さうものなら一遍に悪事露見、紙幣ならば用意されてあるスタンプで「贋造紙幣」の烙印を捺され、銀貨は用意された金槌でグチャ／＼に叩き潰されて突返される。わが國だつたら贋造紙幣を使へばその場から引致され臭い飯の御馳走を受けないとも限らないが、支那は何といつても贋札流行の國柄だけに、紙となり鉛となつて返される寛大な點だけは感謝さるべきである。かう言ふ賭博場の何處に行つても、この印と金槌が出納係に用意されてある處から見ても贋札の横行がどれほど劇しいかおして知るべしである。

支那の銀貨は大洋一元、二十仙、十仙の三種と小洋二十仙、十仙の二種合計五種類であるが大洋は大抵袁世凱、孫逸仙、舟等が彫刻され、中にはメキシカン弗等も珍らしくない。

一元銀貨の贋物は、鉛に銀メツキされたもので、外觀や重量等は正貨と何等異なる處はないから、銀貨二枚をカチ合せた音色や、板に叩きつけてその澄んだ音色によつて眞偽を判別するの

が一般の習慣となつて居る。

支那紙幣のどれを見ても、その表面には必ず上海、漢口、青島、杭州等發行銀行の土地名が記入されてあるが、それはその土地のみに通用され、他省では使用不可能か、通用しても割引されることは上述の通りで、このために蒙る旅行者の不便は想像以上であることは言ふまでもない。だから他省旅行の人々は、一々旅行先の法幣を兩替して行かねばならぬとは厄介千萬な通貨もあつたものではないか。

幣制改革以前のやうに銀貨の通用した時代には、現銀さへ携行すれば何處に持つて行つても堂々と通用したのだが、然し支那の銀貨は一元銀貨一枚の重さが殆んど八匁近く、重量や嵩から言つても僅か百元の現銀携行は仕末に困るほど厄介千萬な重荷である。

支那紙幣は紙質の新らしいものほど贋造紙幣の多いことは言ふまでもない。支那四百餘州あます處なく遍歴して來たと言ふやうな、垢と油、ドロ／＼で分厚くなつて、おまけにベタ／＼と處かまはず錢莊の印が捺されてある、殆んど文字も辨ぜないやうな札ほど信用がある處を見れば、支那は通貨から見ても全く謎の國である。

支那に馴れない人々が、かう言ふ古びた札を受取つた時などは不快さうに聲壁面シカガツラして居るのを見受けるが、これなどは嫌がられるのも無理ないことだ。何故ならばかう言ふ札は何處から見ても法幣の乞食といったやうなポロ札であるからであるが、その實支那では磨かれないダイヤモンドの價値があるから面白い。

上海事變當時の法幣が排日廣告に逆用されたことは衆知の事實で、「打倒日本××主義」、「日貨不買國貨愛用」、「日貨仇敵」など、神聖なるべき法幣を排日の道具に適用する等は言語道斷、痛く在留邦人の憤激を買つたものである。

昭和十年十一月四日を期して抜打的に斷行された所謂支那の幣制改革といへばすぐ「リースロス」の名が浮んで来る。抗日支那の總本山たる蔣政權は、その幣制改革によつて現銀國有を敢行し、支那大衆からかき集めた現銀をイギリスやアメリカに送つて在外正貨を充實すると共に現代支那法幣制度の基礎を固めたのであつた。

當時イギリス經濟最高顧問サー・フレデツク・リースロス（現イギリス戰時經濟省長官）は、遣支經濟使節として日本經由渡支、蔣政權の要人連の間を奔走して居たと思ふや、抜打的

に斷行されたのが、「蔣介石をして對日決戦に自信をつけさせた」幣制改革であつたが、思へば彼も罪なことをしたのではないか。

この幣制改革前に於ける「法幣」の相場は變動常なく、前上海事變當時などは日本の金壹百圓を出せば支那札で二百四十八元と交換するべし棒な時代もあれば、これと全く相反する時代もあつた。かう言ふ時代に於ける在留邦人の財産を日本金に換算すれば非常な悲喜劇を展開する。倒へばこゝに十萬元の財産家があるとして、その金を日本に持つて歸つた場合、時の高低相場によつて二十萬圓になることもあれば、時によつては五萬圓以下になることもあると言ふ具合で、上海などで同じ日本の十圓札を見ても、「法幣」の相場によつて五元位に見えたり二十元位に思へたりして、そのあり難さが非常に違ふといふ有様であつた。

昭和十四年春頃に於ける日本金と法幣相場を較ぶれば、法幣の百元に對して日本金九十三四圓、即ち日本金十圓を兩替すれば支那金十元六十仙ばかりの紙幣と小洋銅幣の混ぜこぜが受取れる。ところがこの兩替相場は爲替相場に較べると非常な矛盾がある。即ち日本の對英爲替相場は當時一圓につき一シリング、二ペンス、法幣一元は八半ペンスの當時に於ける相場からす

れば、支那の百元は日本金六十一圓位に相當する理であるが、圓札と法幣の需給關係や、その日々の種々な材料を織り込んで錢莊が勝手に相場を立てるのだから良い加減なもので、現時のやうに圓札が支那市場に氾濫すれば勢ひ日本金が安くなるし、英米の對支借款成立、日英日米の對立激化、ソ聯の動向、歐洲大戰等によつて、法幣はグン／＼圓札に肉迫したり、または引離されたりするのが常である。この爲替差を金儲に利用した不良外人が一網打盡に檢舉されたことは、一時新聞の社會面を賑した通り相當盛んなものであつた。

蒋介石政權によつて發行された法幣は、支那事變直前に於て十七億二千四百萬元となつて居るが、昭和十四年六月末現在では二十六億二千七百萬元昭和十五年正月には三十億元を突破するといふ驚異的膨脹を示して居る。何れにしても、地方政權か匪賊化しつゝある蔣政權のことだから、懷次第ではどんな無茶でも仕兼ねない以上、愈々尻に帆かけて亡命と言ふ頃には、どれほど増發、否、濫發するか判らないと言ふのが一般の見方である。

この法幣の生みの親は、言ふまでもなくイギリスであるが、日本を出し抜いて（當時日本に協力を求めたが、日本はイギリスの野望を見抜いて拒絶した）支那を經濟的に植民地化するた

めに打つた大芝居で、これによつて、自國の在支權益を護るばかりでなく、將來益々發展しようとする基礎工作に外ならぬ。

今度の支那事變以來、蒋介石政權と法幣は運命的に共倒れの危機に直面して居るが、愛兒の大病に心痛する親心で、法幣の下落防止にはあの手この手と躍氣となつて狂奔し、アメリカを誘つて、イギリスの一千萬ポンド、アメリカの二千五百萬弗と、對支クレジットが設定された理であつた。

開會前から決裂を豫想された日英東京怪談も、豫想通り法幣問題でデッドロックに乗りあげてしまつたが、イギリスとしては引くに引かれぬ重大案件であつて、おいそれと引込むやうな生柔しい問題ではない。

廣東、武漢の陥落後、却つて法幣の強調を續けたのは、一見奇異な現象のやうに考へられるが、奥地逃避行の法幣は出口を防がれてその儘死藏されて居るのと、支那人の考へ方は、日本が武力で壓倒すればするほど、戦争はそれ丈け早く片づいてしまふ。戦争が終結すれば、今事變によつて取引出来なかつた奥地の物資を買出すことが出来るが、その買付けには絶対に法幣

の必要が生じて来る。また、一方英米の對支借款から見ても、殊にイギリスの本腰入れた法幣支持は絶対不變、法幣は英米の子供である以上、彼等としては、愛兒の危急を見殺しにするとは思はれない、と言ふ風に解釋し、また支那人自身からしても、數年前まで命から二番目、否寧ろ、命以上の愛着を以つて抱き締めて來た現銀を一片の紙(法幣)に代へさせられた。即ち銀の身代りと言ふ一種の國民的信念は單なる經濟的理論のみでは割切れない、或る大きな力があるのである。

これほど支那大衆から無言の支持と信頼を受ける法幣であり、また駐支イギリス大使カー氏の『蔣政權よりも可愛い』と言つて居る法幣が、イギリス必死の工作によつて、事變以來一年有半、八ペンス臺を維持して來たが、昭和十四年六月七日、上海の香港上海銀行が、香港よりの指令と稱して、インターバンクの外貨賣停止を行ふや、果然崩落の一途を驀進し、六ペンス臺に落ちつくかに見えたが、天津租界問題や、華僑の根源地たる汕頭の攻略等によつて大打撃を蒙り、歐洲大戰と言ふ最悪の場面に立至つて五ペンス、三ペンスから最底二ペンス臺まで崩落し昭和十五年春は五ペンス臺までもどして居るが、その前途は豫斷を許さず、第一次歐洲大

當戰時に於けるマークやルーブルの轍を踏まんとする情勢になりつゝある。

獨善蔣政權によつて、現銀を一片の紙に代へることを餘儀なくされた支那四億の大衆こそ御難だ。新支那中央政權は、特にこの法幣對策こそ輕視すべからざる重大問題である。政治は仁政でなければならぬ以上、新中央政權が、若し近き將來に於て、法幣對策を具體的に研究する場合があるとすれば、何をおいても、民意を尊重して最も慎重に善處すべき重大問題である。

五、日本にない漢字

古來支那は文字の國と言はれ、日本文字の主體となつて居る漢字も、讀んで字の如く支那から傳つたことと言ふまでもない。吞氣屋で理窟屋支那の先祖……世界で一番面白い遊戯と言はれる麻雀を考案した程の現代支那の先祖だけあつて、この漢字を味へば味ふほど、一字一句が意味深な處得も言はれぬものがあり、さすが文字の國だと、つくづく感に堪へないものがある。

日本にインテリ多しといへども、現代支那のすべての漢字を知悉せる人は恐らくあるまい。なげならば、日本にも日本産の漢字があるやうに、支那にも次から次へ新らしい漢字が現出し、在支日本人など時々初見参の文字にぶつゝかつて面喰ふことは決して珍らしいことではない。大正七八年頃日本に留學して居た梁氏の家庭を訪問すれば、十二三歳位の次男坊が大聲あげて、すら／＼棒讀して居る本を一寸覗いて見れば、我が高専程度の學生といへども難解な漢文であるのには一驚を喫するが、學生時代漢文の先生にサン／＼油を絞られた過去が聯想されて苦笑を禁じ得ないものがある。

日本にない珍らしい字を列記すれば少くとも一冊の本が出来るが、それは後日に譲るとしてこゝにその數例を擧げて見よう。

一度上海を旅行したことのある人なら、誰しも電車やバス内に「謹防扒竊」の四字が目にとまつたであらう。この四字を突然出された内地居住の人の中で、正しい解釋の出来る人は恐らくないと言つても過言ではなからう。ところが、その横に英語で「拘摸に注意せられたし」と書いてあるところから、この「尋」は拘摸の意、即ち普通人の二本に對して、手癖の良くない者

には一本餘分の手があることを意味するものである。わが國では手が長いとか、指先が曲つて居る等と言つて居るが、同じ拘摸を形容する字句としても、支那の「尋」の方が餘程面白く形容されて居るではないか。

昭和十年の夏季休暇を利用して立教大學卓球部選手一行の上海遠征があつた。上海全日本軍との對戦に榮冠を得た餘威をかつて、次に支那人チームと對戦することになつたが、その時のポスターを見ると、「中日兵兵大會」と大書してあつた。わが國ではピンポンを漢字で卓球と書くが、支那では兵隊の兵をピンと讀む處から、兵隊が片足づゝあげて行進するのを形容して「兵兵」と讀ませる處などは、いかにも文字の國の面目躍如たるものがある。

野球といへば日本式にベースボールと解するのが當然であるが、支那ではゴルフのことを言ひ、ベースボールは棒球、テニスを網球と言つて居る。

上海あたりの街を歩いて居ると所々に「汽車」と書いた家を見受けるが、この小さな家が汽車の停留所でもあるまいと一寸合點が行かないが、支那の汽車は自動車の意で、日本の所謂汽車は支那で「火車」と言つて居る。日本の自轉車を支那では「脚踏車」と言つて居るが、自轉

車は自動自轉車のやうに勝手に運轉されるものではなく、足で踏む車である以上、自轉車の呼稱より支那の脚踏車の方が餘程適言のやうに考へられる。

支那に東洋人と言ふ言葉があるが、この言葉こそは、吾々日本人の呼稱だから聞いて吃驚だ。吾々日本人から考へれば、東洋人は黄色人種の別稱であるが、支那人は自らを中華人、日本人を「東洋人」、歐米人を「西洋人」と區別して居る。

國名の呼稱も、日本を「東洋」、米國を「美國」、佛國を「法國」、獨逸を「德國」等と言つて居る。比國と言へばフリッツピンのやうに考へられるが、支那ではベルギーを言ふのであるからとんでもない間違を生ずることがある。

支那の藝者は大別して大先生と小先生に分れて居る。小先生は舞や歌専門に精進する、所謂一本立を言ひ、大先生は旦那持藝者を言つて居る。

日本の藝者なども旦那を持たない若手藝者は何といつても人氣があつて、座敷なども斷然忙しいのは言ふまでもなく、従つて収入も多い理で、支那でもこの小先生は非常に人氣がある。されば誰しも小先生であることを望むことは言ふまでもないが、この小先生が一度旦那をとつ

た、トタンに大先生となり、同時に人氣がガタ落となり収入減を來すので、素知らぬ顔して小先生を氣取つて居るインチキ藝者があるが、これを稱して「尖先生」と大小を兼ねる等は如何にも穿つた呼稱ではないか。

日本に來て間のない支那人が、商店頭に掲げられた「小僧入用」の張紙を見て、訝かしさうに首をかしげながら、日本では如何して普通の商店に若い和尚さんが要るのかと不思議がつたと云ふ話もある。また鯉節の正體を熟々眺め、何處にも節らしいものがないのに鯉節とはこれ如何に？と奇問を發した例もある。

支那の目出度い儀式を見れば必ず喜を二重にする意味で「喜」を用ひるが、氣持だけでも餘程目出度いやうに思へる。この喜と同じやうな意味で、金を三つ重ねた「鑫」と書いて大いに金儲けするやうに縁起を擔ぐところ、支那は何處までも支那らしい景氣の良い文字を用ひる。

「綿票」とか「肉票」と言ふ字は一寸日本人には見馴れない文字で、無理に解釋すれば入場券か乗車券位に想像されるが、これが豈はからんや社會や家庭を戦慄と哀愁のドン底に陥れる人質のことだから聽いて吃驚だ。文明を誇るアメリカでさへ人質の蠻行に富豪の心膽を寒からし

め、飛行王リンドパーク大佐の歐洲逃避行となつたことは餘りにも有名な話である。ところが暗黒支那の「綿票」流行はアメリカ等の比ではない、大小土匪の全部がその常習者と言ふに至つては驚くの外はない。

支那の害蟲土匪の種類も色々で、その種類によつて「綿票」も異つて居る。富豪の主人や妻子を奪つて行くこともあれば、要人大官を掠つて行くこともある。數年前には外國人を掠ふことが流行したが、これ等は一番纏つた金を正確に握ることが出来る寶の山である。フランスの宣教師が土匪に掠はれた時などは、十數萬圓の身代金要求に對し、フランス出先の強硬交渉によつて、相手もあらうに國民政府の懷から支拂はれたことがあつたが、土匪群が大威張で跋扈し、躍氣となつて西洋人を狙つたのも「アツタリマヘ」である。

毎日出る支那新聞の社會面を見れば、時々魔誤つくやうな字句にブツつかることがある。「風流和尚」等の字を見れば、誰しも一休和尚等のやうなものを想像こそすれ、眞逆かこれをエロ坊主と考へる人はあるまい。支那の所謂「風流」は變態性慾者などの餘り香ばしくない意味を持つて居るから、支那ではお世辭にも「風流紳士」とか、「風流婦人」などの言葉は禁物である。

ある。

「上校」^{ソンシャウ}、「中校」^{フンシャウ}、「少校」^{ショウシャウ}の字句を見て、普通一般に大學、中學、小學と解釋する者が多いが、處かれば文字かはる、目下支那事變で皇軍に對つて蟻螂の斧をふるつて居る支那軍の御歴々大佐、中佐、少佐のことである。

日支は同種同文といつても、その風俗習慣は支那が近い日本よりも、却つて歐米に類似して居るやうに、同文といふ氣持に便乘して字義を解釋すれば、とんでもない間違を起すことが屢々ある。だが然し、何れにしても支那の字句はさすがに文字の國であり、日本の先輩だけあつて種々穿つた字句の多いのには感服の外はない。

六、支那人に化けきれぬ日本人

吾々が白色人種を英、米、獨、佛人など一見して識別出來ないやうに、彼等もまた日支人の區別は不可能であると言つて居る。然しお互から見れば日本人は日本人、支那人とは何處かに

違つた處がある。

どれほど長く支那に住み、殆んどその風習が支那式になりきつて居る老支那(支那通)でも、完全な支那人には化けられぬから不思議なものである。

在支居留民中には、商用その他の目的で、往々支那の奥地旅行をせねばならぬ事があるが、その目的によつては、日本人として正式に護照を受けて行くより、寧ろ支那人に化けて行つた方が都合の良い場合が尠くない。殊に日支對立以來日本人としての旅行は危険性が多く、場所によつては護照が受けられないやうなこともあつたし、支那に馴れ、旅行に馴れた老支那は氣輕で、安あがりな支那人として旅行することは萬事に好都合であつた。

日本人と支那人の習性の相違は非常に多く、例へば大工の鉋や鋸の使ひ方にしても、日本人は手前の方へ引くが、支那流は反對に押して居る。車類等も、日本人は車の前方にあつてひくが、支那人は黄包車(人力車)以外手押しを常として居る。食卓に箸の置き方も日本流は横、支那流は縦に並べる。硯の墨のすり方も、日本流は前後に磨るが、支那人は「の」の字型に圓く廻して磨るのが常である。御馳走の食べ方等は殊に甚だしい相違がある。即ち日本人は禮儀

を第一として、一皿づゝ綺麗に食べるやうに習慣づけられて居るが、支那人は、身分の上下だと初対面たるとを問はず遠慮がない、山と盛られた支那料理を片端から攻略する、所謂盃盤狼藉、食べ殻は壘々として足の踏む處もないのが、隔意のない親し味を現はす禮儀となつて居る。

然しこれ位の支那知識は幼稚園級だ。支那人に化けようといふ程の老支那は、奥の奥まで知りぬいて居るから、大抵なことで尻尾を掴まれるやうなことはない。

昭和六年といへば上海事變の前年、滿洲方面の風雲急を告げ、排日風潮が漸く焦度を高めつゝあつた當時で、ある要件のため、四川、貴州、廣西方面へ支那人になり澄まして旅行した一在留邦人があつた。

この旅行者は、在支二十七年の老支那で、而もその大部分が田舎で支那人と共に生活したゝめ、何處から見ても支那人をつくり、支那服を着て支那語を話す處等は日本人と見破ることは出来ない。四川省の重慶から成都を廻り、貴州に入つて貴陽までは難なくパスしたが、廣西省の桂林で、こ奴臭いぞ！一寸待てツ！といつて怖ろしい處に引っぱられてしまった。

どこで尻尾を掴まれたか？ 内心不安を懐きながらも、そこが老支那だ、糞度胸を据えてあくまで支那人で突張った。疑ひも晴れて愈々怪しい者にあらず、といふので打つて變つた鄭重な待遇となり、種々世間話に花が咲いて居る時、「シーコツ（水瓜の種を鹽づけして干したものの）」が出たが、それを食べて居る中に、こ奴偽支那人だ！ といふ烙印を捺されてしまった。

この「シーコツ」の食べ方は、馴れない人々はなか／＼うまく食べられない。支那人は幼時から馴れて居るから實にうまいもので、無造作に口にほり込んだかと思ふと、ベツ！ と吐き出すが、その動作は極めて敏捷、而も「シーコツ」の兩殻は完全に割れて、中味は胃袋の中に收まつて居る。これだけは支那人獨特の藝當で、日本人には眞似も出来ない手品のやうな早業である。普通日本人は二本の指で縦に摘んで前齒で割り、両手で割つて中味を食べるが、その動作ののろいこと、全くお話にならぬほど不器用なものである。

またある時、三十年以上も支那に居る日本人が、洗面で馬脚を現はしたといふエピソードもある。

彼は日露戦争以來の在支居留民で、支那通としては自他共に許す第一人者である。

ある時彼は洗面を勧められた。彼の面前に持出された洗面器にお湯が一杯とタオル、梶原の首實驗よろしく、先づタオルを四つに折つて湯に浸し、両手で戴くやうに、顔は半ば洗面器に突込まんばかりにして、両手のタオルで「の」字型に圓く／＼顔を撫で廻はし、最後に濡れタオルを絞る時も、日本流とは反對に、左手を内側に、右手を外側に廻はして絞り、これなら大丈夫と思つたが、どつこい！ これも見事な失敗、完全な支那流ではなかつた。

支那人の洗面は、決して手やタオルのみを動かさない。彼等は手と反對に顔を動かすのが習慣で、側から見れば、顔でタオルを洗つて居るやうに見える。

かういふ例を挙げれば枚舉に遑がない。餘程支那に馴れた人でも、こんな細かい處まで實演することはなか／＼難しいことである。これから見ても、日本人は完全な支那人に化けることは不可能といつて差支へない。

七、斷髮令

斷髮以前に於ける支那の男性は、頭髮の周圍を剃つて眞中だけを長く延ばし、細長く編んで後に垂れたり、グルグル巻にした所謂辨髮であつた。少くとも清朝末頃までの支那人は長髮人種であつたことは衆知の事實である。

ところが、國民革命運動以來、男の辨髮は不自然であると共に、支那の恥辱であると言ふので、徹底的にこれを禁止したが、それでも永年の習慣は愛惜の念斷ち難いものがあると思えて實行者は極めて尠く、成績としては殆んど見るべきものがなかつた。

わが國などでも、明治維新の斷髮令によつてチヨン髷を切られることを極度に嫌つて、露々たる反對を唱へた人々があり、大正末頃まで後生大事とチヨン髷を結つて居た老人もあつた程だから、因習を尙ぶ保守的な支那人にすれば、首でもチヨン斬られるやうに歎き悲しんだことも無理ならぬ話である。

命令の不徹底は政府の威信にも拘る、と言ふので躍起となつた國民黨部が嚴命を下し、最後の手段として強行法をとり、巡查を街角に待機せしめ、辨髮の通行者は見つけ次第、片端から引提へて、大聲あげて泣出す奴の頭髮を、有無を言はず斬落した近代支那風景は奈良の鹿角

斬りを髣髴させ、泣きながら頭かへて後をふりかへりつゝ逃げ行く様は、得も言はれぬナセンスであつたことは想像するに難くない。

歐洲大戰以來歐米に婦人の斷髮が流行するや、その主旨に共鳴した蔣政権では、早速これに倣つて婦人の斷髮を強要する斷髮令を出したが、初もの嫌ひな支那婦人の轟々たる非難に遇つて苦境に立つの已むなきに至つた。ところが、時代は流れて新らしき女性時代となり、今度は吾もくと歐米の流行を追つたため、自然的に斷髮者は増加の一途を辿り、斷髮、パーマネントが近代支那流行の尖端となり、都會地に於ける若い婦人の長髮は殆んど見ることが出来なくなつてしまつた。

上海のメインストリートたる南京路百貨店街を濶歩する若い姑娘は、誰を見ても斷髮パーマネント、ズバ抜けて高い襟、自慢で着流す流線型支那服、ハイヒールも軽い胡蝶のやうなモダンガール一色に埋れて居るのを見ても、如何に近代支那が歐米風に近いか想像も及ばないものがある。支那婦人の長髮は殆んど老年纏足組に限られ、こゝ二三十年先に於ける支那婦人の長髮は昔話にならうとする情勢に在つた。

ところが、曾ては斷髮令振出しの本家本元たる國民黨部では、果しなきパーマネントの流行に驚いて、今度は支那固有の婦人美をまもると言ふ見地から、一九三五年になつて、軍人は斷髮婦人と結婚まかりならぬと言ふきつい規定を設けたため、全支那に一大センセーションを捲起し斷髮婦人の猛反對運動が展開され、長髪が是か斷髮が非か、頭髮の長短カミゆゑに迷ひ、カミに關する限りカミの言ふことが信じられなくなつてしまつた。

支那事變以來現代日本でも、男女の頭髮に就ては種々意見が對立状態にあり、結着の斷が下されない過度期にある。

パーマネントの可否は暫くおき、婦人の斷髮は近代婦人の等しく望む處であることは種々な點から見ても肯定し得られる。舊思想の持主は日本鬘を好み、新時代の人々は斷髮を是とすることは自然の理で、日本髮黨は日本固有の婦人美を護ると言つて居るが、斷髮黨に言はせると日本髮は封建時代の遺物であり、男のチョン鬘と對照されるものである以上すべからく廢止すべきである。而も男性中の日本髮禮讀者は中流以上の者に多く、糟糠の妻の目を盗んで髮附臭い藝者や妾狂ひするやうな、女性を玩弄視する不心得者に多いことは注目に價する。

現代日本の斷髮婦人は支那に較べると非常に少い、而もそれが餘り香しからぬ職業婦人に多かつたことが禍して、輿論は遂に日本髮黨に軍扇をあげて居るが、いままし、名流婦人が率先して斷髮の範を垂れるとすれば全婦人がこれに追隨することは火を賭るより明らかである。日本髮は婦人にとつてそれほど厄介千萬な重荷であることは、如何なる婦人も内心感じて居る不満であらう。

現代日本に於ても實社會に適用するものは斷髮であることは手近に活動的衛生的な女學生が實證して居る。抑も婦人の斷髮流行は、第一次歐洲大戰當時、すべての男性は第一線に出勤し銃後は猫の手も借り度い超非常時を現出、筋肉労働までが婦人の職場となつたため、頭髮手入れの餘裕なく惡臭を催し、剩さへ虱の巢となつては我慢にも辛抱しきれず、思ひきつて愛惜の黒髮ならぬブロンド髮を斬落した後、初めて斷髮の良さを知つたのであるが、それが斷髮流行となつたのである。されば斷髮は非常時型であり、衛生的、活動的であることは議論の餘地がない。

長髮特に日本髮……夫人の丸鬘、藝者の島田、娘の桃割等は側で見ると鬱陶しい限りだ。

わが明治維新の際の尊皇攘夷黨の中にも、明治政府の方針が開國進取に改まつた後までも、尙ほチヨン髷を惜しんで切らず、汽車に乗れば大和魂が汚れると稱し、寫眞を撮れば壽命が縮まることを怖れ、電線の下を通る時は、汚らわしいと言つて、チヨン髷の上に扇子を置いて通つた等は、七十年後の今日正氣の沙汰とは考へられない。

これを要するに日本髪等もチヨン髷同様次の時代にはナンセンスものとなることは必至の運命にある。されば婦人の重荷は髪である以上、多忙な婦人の重荷を省くためにも、わが指導者はすべからず斷髪を奨励すべきではなからうか。

八、支那商店風景

支那では何處の支那人店を覗いても、店の割合に店員の多いのと女氣のないのには一驚を喫せざるを得ない。支那商店の店員といへば何處を探しても野郎ばかり、女と名のつくものは、そ

れこそ猫の子一匹も居ない完全な女人禁制とは珍妙不可思議なものではないか。

わが國などでは、住宅たると商店たるとを問はず、炊事や洗濯、拭掃除などはすべて婦人の職場となつて居るが、支那商店は店と言ふに及ばず奥の方を探しても女氣は藥にしたくもない。いくら支那人でも、食事はせねばならぬだらうし、洗濯や拭掃除は放つておく理にはいまい。一體誰がこの女の職場を受持つかといへば、野郎店員中の誰でもが、一人前の炊事當番たる資格を備へて居る。極めて下級社會は別であるが、普通一般の家庭、殊に中以上の家庭であれば肉を買出すにしても、手鍋を使つて脂で肉をいためるにしても、すべて男以外あれたけの甘い味は出せないと言はれて居る。料理にかけては三名の女性が必死に働いても、一人前の男に太刀打出来ない「料理王國」支那の料理だけは何といつても男性獨特の腕にある。

支那商店のかうした男ばかりの生活面を見て、いかにも無味で殺風景のやうに考へられるが、それは普通生活者の言ふことで、店主や女房持は店が閉ると同時に住宅の方に歸つてしまふが、他の獨身殘留組は、土間や店の商品の間に蓆を敷き、煎餅布團にくるまつて寝ると言ふ有様で、その原始的な生活振は、普通常識では想像も及ばないものがある。

わが國に於ける女性の職業戦線進出は、年と共に近年増加の一途を辿り、あらゆる方面に進出して男の職業戦線に異状を興へ、男性恐怖時代を現出しさうな現状にある。ところがお隣りの支那では、女性の職業として最も好適なデパートやカフェーは言ふに及ばず、會社銀行から商店に至るまで、眞面目な方面の職場は皆無といつても過言ではない。

従來支那では働く女性を非常に卑しく考へて來た。現代支那はその點幾分目醒めつゝあるとはいへ、それでも職業婦人といへばダンサー、女中、賣笑婦ぐらゐなもので、日本の明治時代と何等異なる處がない。

上述の通り上海に於ける支那商店街たる南市あたりのどの店を覗いても女店員の片影すら見ることには出来ない。而も店員の數は無用に多く、第一不經濟であり、店内の緊張を缺き、却つて邪魔のやうに思へるが、支那人の考へ方は所謂「理」によつて善處して居ると言ふのである。

取引關係のある四川路の連長記公司(上海一流の運動具店)は十七名の店員を擁してそれこそ懐手した店員がウヨウヨとして居るが、その主人の語る處によると……支那の店は店員を雇ふ心配は全然ない、何故ならば一店員の知友が田舎から出て來て、何時の間にか店員の仲間入りする

のが次から次に増加して、現在のやうに必要以上に多くなる。かう言ふ店員だから給料なども至つて安く、普通三、四元から餘程良い方で二十元程度、七八十元や百元と言ふ高級者は殆んどない。食費なども人數の割合にそれほど嵩むものではない。支那の料理は安い材料で甘い味を出すのが特長で、一ポンド二十五仙の牛肉、三十五仙位の豚肉を店員中の腕利きが料理部を引受ければ、極めて安い銀で全部の店員に十分の満足を興へることが出来る。

支那の商店には何故婦人店員を雇はないかといへば、婦人は口達者な上に見識が高く、給料の割合に能率があがらないこと夥しい。殊に依怙最員があつたり、店員間に揉めごとが起きる等、女店員は百害あつて一利もない以上、結局女人禁制は支那商店に限り絶對的である。

店員は年一回乃至二回、多くは舊正月や八月中秋の頃、店員同志交代で郷里に歸ることを許されるのが習慣で、その時は全部の貯金を持つて行つて兩親を犒らふとか、地所を買ふなど、相當有效なものに使ふのを常として居る。

支那人は親の子は親の子である、親が奉公して息子を専門學校へやるなど、言ふ成算のない不經濟な生活をする者は殆んどない。わが國などでは、親が百姓で苦しい中から中學を卒業さ

せたがブラ／＼不良になつた等と言ふことはザラにあるが、支那では大抵蛙の子は蛙、百姓の子は百姓と言ふ風に親の商賣を繼ぐのが普通で、餘程霸氣のあるもの以外他の商賣に轉出するやうな者はない。

九、杭州勸善懲惡の像

杭州名物は、先づ第一に錢塘江セントウコウの高潮を筆頭に擧げねばならぬ。皇軍百萬杭州灣上陸で一躍有名になつた杭州灣に注ぐ大錢塘江——海寧附近の海嘯は餘りにも有名な話である。殊に春秋二箇舊曆二月と八月の満月の頃押寄せる潮の高さ優に二十尺に達し、錢塘江畔には壯觀な觀潮繪圖が繰りひろげられる。

今度の支那事變以來觀潮會などの餘裕はないが、平時は中秋の名月の夜から三日間を觀月節と稱し、海寧附近一帯には數萬の觀衆が遠く上海、南京あたりからまで押寄せて來る。

江岸は人の山、このスリルを味ふべく固唾を吞んで持つ間ほどなく沖合を見れば、はるか舟

山列島方向の水平線に白い波が踊つたかと思へば、遠く海鳴りが聞えて來る。と同時に合圖の鐘は打鳴らされ、波は大きな弧を描きながら刻々大陸を一舐めにするやうな凄い勢で押寄せて來るが、近づくにつれてスピードは加速度的に増し、アツ！と言ふ間に群集の眼前を通過して上流を襲ふ、その一瞬のスリルは天下の奇觀、言語に絶する雄大にして壯觀なものである。

次に擧げられる杭州名物は、山腹に刻まれた五百羅漢像だ。相當に高い峨々たる山の中腹にあれだけ見事な彫刻がよくも出來たものかなと、見る人々をして感歎久しうさせる。

案内者の説明によりその來歴を聞けば、この五百羅漢は大昔印度にあつたものだが、世紀の颱風に吹飛ばされ、はる／＼この杭州の山腹に吹付けられたものである。如何に名工ありといへども、あれほど高い山の中腹に、而も見事な彫刻が、人間業では出來るものではない。五百羅漢と稱する以上五百體あるべき筈だが、事實は三像缺けて四百九十七體となつて居る。他の三像は如何間違つたものか日本へ飛んで行つたと言はれて居るが、『あなたの方の中に御存じの方はありませんか』とは人を喰つた奇問もあつたものだ。科學文明の現代に至るまで、案内人そのものがそれを信じて、眞面目くさつてこの由來記を話し、支那の大衆がこれを眞に受けて疑